

二條の後の春宮のみやす所と申しける時に、御屏風に立
田川に紅葉流れたるかたをかけりけるを、題にてよめる

そせい

もみぢ葉の流れととまる湊にはくれなる深き波や立つらむ

○二條の後の春宮のみやす所と 春上「春の日の光にあたる云々」の條に既出。○かたを 繪を。

大意 この立田川に散り浮いて赤く見える紅葉が、流れて一つに行き止まる湊には、何時もの白波とは違つて、定めし眞赤な色の深い波が立つ事であらうか。

評 光彩眼を射るばかり色濃く描き成した紅葉であつたとすれば、かうした想像も起らう。紅濃きを「深き」と轉義して、波の深い趣をも聯想させた。字法精細である。「湊」は、所の轉義ぐるりに軽く見たい。結句、六帖に波ぞ立ちけるとあるは、立田川が紅葉の流れ止まる湊のやうに聞えて、穏やかでない。

業平朝臣

千早ぶる神代も聞かずたつ田川からくれなるに水くゝるとは

○千早ぶる 汎く神にかゝる枕詞。「千早」は逸筆の義で、鋭い勢をいふ語。「ぶる」はびの變化で、形容の接尾語。故に千早ぶる人、千早ぶる神など續けて、荒ぶる人や神をも稱したが、その本義ではない。○からくれなる「から」は韓で、その昔あらゆる技巧は韓國の方が優れたので、遂に移つて美稱となつたのである。○く

くる 絞るの意で、潛るではない。さて紅に絞るとは、今の絞染の事で、令式に、絹を絲で所々絞つて、紅、紫、緑などに染めることが出てる。字には纈纈と書き、ユハタと訓む。

大意 さて、奇妙なことよ、このやうに立田川で紅に水を絞染にすることは、いろいろ不思議の事のあつた神代にも、一向聞かぬわ。

評 先づこの畫のさまを想像すると、眞青に描き流した水の上に、頗る大きな紅葉の、しかも濃い紅なのが、あらあとした、かに、模樣的に描かれてあつたのだらう。古代の畫のさま思ひ遣られる。その一葉々々を、纈纈の形に見成したのである。神代に不思議があつたといふことは、國史に、草木がさゝやいたり、又祝詞などに、岩根木根たちが物をいつたりした事が見え、その外種々様々な奇蹟が傳へられてあるから、「神代」を例に引いて、今の不思議さを強く表現したのである。又紅葉の語が一首のうちにないは、例の詞足らずなのでない。畫の上に譲つて略いたのである。實詠としては、「唐紅に水くゝる」が誇張に過ぎて面白くないやうだが、題畫の歌として見ると却つて面白い。

是貞のみこの家の歌合の歌

としゆきの朝臣

わが來つる方も知られずくらぶ山木々の木葉の散りとまがふに

○くらぶ山 春上「梅の花匂ふ春へは」の條に既出。○散りとまがふに 散りと散り紛ふの略。意は甚しく散り紛ふこと。

大意 ゆく先は無論、今自分が通つて來た方もわからぬわ、只でもこの暗いといふ名の暗部山の、木どもの葉が頗に散り紛ふのでサ。

【評】 落葉の盛りに、たまくさる山中に行き迷つた趣を、木の葉の散るによつて誇張した。山の名の「くらぶ」の聯想が、既に初二句に響いて、覺束ない氣持がある。これこの作者の慣手。

二句、古本に道もしられすとあるのを眞淵は執したが、ことが狭い。又三四の句、家集にはくらま山やまの木の葉のとある。

たゞみね

神なひのみむろの山をあき行けば錦たちきることちこそすれ

【釋】 ○たちきる 裁ち着るの意。契沖が、立ち着るの意と見たのはいかゞ。但「裁ち」は熟語として添つたのみで、主意は「着る」の方にある。

大意 一の神南備の三室の山を、秋の頃通ると、紅葉が散りかゝつて、錦を着物にして着る心持がするわ。

【評】 官卑しく祿賤しい流石の忠岑も、今日ばかりは引き換へた紅葉の錦衣に、いかに心驕りした事であらう。想は平凡だが、作者の人柄に惹かれて、をかしくも聞える。

三句、六帖及び家集に分け行けばとある。

北山にもみぢをしむとてまかれりける時によめる

貫之

見る人もなくて散りぬるおく山のもみぢはよるの錦なりけり

【釋】 ○北山に云々 北山は、京都の北部、葛野郡衣笠山以北の山地をいふ。「もみぢをしむ」は、紅葉を愛賞する意で、その散るを惜む意も、おのづから含まれてゐる。これを理りなしとして、古本にもみぢ折らむとてとあるに、眞淵、宣長の従つたのはいかゞ。折らうといつて出掛ける、そんな殺風景な事は今の人でもしない。○おく山 奥山は深山をいふ。端山の對語。○よるの錦 如何に美しい錦でも、夜は文目の分からぬから、物の詮の無いのにいふ譬喩である。史記、項羽本紀に「富貴不歸故郷如三衣繡夜行誰知之者」とあるに本づく。又史記の、朱買臣傳にもある。支那の古諺である。

大意 格別見事に錦のやうに見えながら、誰れ賞翫する者も無くて散つてしまふ、この奥山の紅葉は、全く喩にいふ夜の錦であつたわい。

【評】 典故を湊合した夜の錦の隱喩、親貼を極めてゐる。況や衣錦夜行の意を、僅々「夜の錦」の數語にいひ取つた造句の簡淨さ、凡手の到底眞似も出来ない所である。「おく山の紅葉は」も、都近い紅葉の心ある人々に、畫の錦と賞翫されるのに反映して、無量の感慨を含む。想ふに或は寓意の作か。わが大才を抱きながら、陸沈して朽ち果て、しまふことを慷慨し、自ら奥山の紅葉に擬して、その幾微を洩らしたのではあるまいか。

秋のうた

かねみの王オホノミ

立田姫たむくる神のあればこそ秋の木の葉のぬさと散るらめ

【釋】 ○秋のうた 契沖いふ、「この下に、とてよめるの五文字落ちたる歎」と。さもと思はれる。○立田姫 立田の社はしなつ彦、しなとべの神の、男神女神を祀つてある故に、その男神を立田彦、女神を立田姫と稱へる。

もと風の神なのを、後世秋の神とすることは、奈良の京を中心として、その西の方角に立田は當るので、西を秋に配する易や、纖維の學に依つて、立田姫を秋の神として、春の神佐保姫に對した。「立田を紅葉の名所としたから、其處におはする神なので立田姫を秋の神とした」といふ舊説では、佐保姫の解説が付かなくなる。○たむくる神 手向する神の意で、昔は旅に出ると、こゝかしこの道の神に、幣を捧げる習慣であつた。道の神は道のなかぢの神、又くなどの神とも、さへの神ともいふ。支那の道祖神に似てゐる。○ぬさ 幣帛。みてぐらとも、にぎてともいふ。いにしへは絹布の長きまゝを用ひたが、後には五色の絹を細かに切つて袋に入れたのを携帶して、神前毎に撒き散らして手向ける事となつた。されば幣には、散るが縁語である。

大意 立田姫は秋の神だが、それすら暮れて行かれる折には、お手向けなさる道の神様があるからこそ、このやうに、御自身お染めなされた秋の木の葉が、手向の幣のやうに散るのであらう。

評 木葉の飄零するさまを見て、五色の切幣を聯想し、さて暮れて行く秋の女神の旅を想像したのは、頗る面白い。更にその女神にも猶手向ける神様のあることに想到したのは、所謂奇想天外より落つるもの。

小野といふところに住み侍りける時、紅葉を見てよめる

つらゆき

秋の山紅葉をぬさとたむくれば住むわれさへぞ旅ごちちする

釋 ○小野 京都の北にある山里。但三箇所ある。今の葛野郡元杉坂村、これ古の小野庄である。又愛宕郡高野村と、同郡小野山とにある。眞淵の説に「古本に『紅葉を見て』の五文字なきをよしとす。この集の詞書には、

歌とかよはせて紅葉と書かぬ例、上にも下にも類多く見ゆ」とある。

大意 秋の山では、恰も旅人が道の神に、道々幣を散らして手向けて行くやうに、風が紅葉を散らして山の神に手向ける故に、此處に住む自分までが、どうやら旅の心持がするわい。

評 想ふに作者の小野に住んだのは、一時の假住居であつたらう。さては外界の縁に觸れては、旅心地もされやうではないか。折しも暮秋風廻つて、木葉繽紛とする其の狀が、さながら切幣を撒き散らした様とすると、思はず、「住むわれさへぞ旅心地する」と歌はれもしよう。但切幣を手向くる習慣は今も廢つたから、以下の歌とも皆切實な實感を、聽者に起させることは、やゝ困難である。

神なひ山を過ぎて、立田川をわたりける時に、紅葉の流れ

けるをよめる

ふかやぶ

神なひの山を過ぎ行く秋なればたつ田川にぞぬさはたむくる

釋 ○神なひ山を過ぎて 貫之本に越え過ぎてとあるのが優つてゐる。「神なひ山」は上出。

大意 これから神南備山を暮れて過ぎ行く秋なので、先づ山口のこの立田川にサ、あれあのやうに紅葉の幣は手向けるわ。

評 上にもいつた如く、この立田川は神南備山を半周して流れてゐる。作者は、神南備山を越えて、立田川の西岸に出ると、こゝには、又紅葉が波に浮いて流れてゐる。そこで、先刻自身が神南備の神に幣を手向けて來た事を思ひ出して、川の紅葉を、神南備山を越え行く秋が手向けた幣と見成した。つまり作者は神南備山を東へ越

え、行き違ひに秋は西へ越えるものとして立案した、往時の旅行者の感じさうな興趣で、秋の擬人がこの生命である。落葉の意を一首にめぐらして、その語を遺したのは實景に譲つたものである。

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌 興 風

白なみに秋の木の葉のうかべるをあまの流せる舟かとぞ見る

釋 ○あま 海村の生活者を總稱していふ。○流せる 漂流させたの意。下の十九卷の伊勢の長歌にも「年へて住みし伊勢のあまも舟流したる心ちして」とある。

大意 白浪の上に、この節の木の葉の散り浮いたのを、漁人の海に流した、小舟かしらとサ思ふわ。

土佐日記に、

みな人々の船出づ。これを見れば、春の海に秋の木の葉しも散れるやうにぞありける。

など、舟を落葉に譬へることは常套でもあり、自然でもあるが、落葉を舟に譬へることは、繊細な詩境である。「白波に」はその荒びた状を拈出して、下旬に海上の難船を聯想する襯染とした。場處は早瀬の水で、もあらう。

寛平歌合、新撰萬葉に、三句浮べるは、結句舟にざりけるとある。六帖には、結句舟かとぞ思ふとある。

たつ田川のほとりにてよめる 坂上是則

もみぢ葉の流れざりせばたつ田川水の秋をばたれか知らまし

釋 ○水の秋 水にある秋の意。

大意 水といふ物は、何時も同じ色だから、若しこのやうに水の赤くなる紅葉の、流れずにもするならば、

この立田川の水にある秋をば、誰が知らうぞ誰れも知りはずまい。

聯想の上から、水にも春秋のあるものとするは、例の手段で、即ち物名の部に、

浪の花おきからさきに散りくめり水の春とは風やなすらむ

とある伊勢の歌の儻である。紅葉の流れるので、はじめて水の秋をば知るといふ意を逆寫して、婉曲の味をもたしめようとした。そのわざと奇巧を究めた處は、夙く金葉、詞華二集の風を啓いたといはれよう。宮聲半を占めて和諧。

志賀の山越にてよめる 春道列樹

山川に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり

釋 ○かけたる 造りかけたの意。○しがらみ 水流を堰く爲に、材を連ね立て、横に竹柴などを據み附けた物をいふ。○流れもあへぬ 流れもおほせぬの意。

大意 この山川に、風の拵へた柵は、外でも無い、瀬々の處々に流れもまあおほせず、水を堰いて居る落葉であつたわい。

釋 既に落葉の山川の瀬々に溜つた状を柵に譬喩したのを、又「風のかけたる」と擬人したのは、巧中の巧を求めたるものである。木の葉なりけりといはず、「紅葉なりけり」といつたのは、川水に對する色彩を拈出したの

である。北白川の上方、近江に通ふ志賀山越の溪水が、玉を蹴つて流れる處、奇岩怪石の間を、紅葉の點綴した光景が、ありくと見える。聲調もおのづから爽快である。

池のほとりにて、紅葉の散るをよめる み つ ね

風ふけばおつるもみぢ葉水きよみ散らぬ影さへ底に見えつゝ

大意 風が吹くと誘はれて落ちる紅葉が、池の上に浮いて見えるばかりか、水の清さに、まだ散らぬ梢の紅葉の影までが、底に映つて見えくして、面白い事よ。

評 最初は梢の紅葉の色の深さに目にとまり、次には風に任せて打ち散る紅葉の行方を辿つて、測らず池水の清さに驚き、さてさやかな梢の影を水底に見出した趣向である。すこし混雑した感じがして、作者の他作に類しない。又「つゝ」の用法も正格でない。古今傳授を云爲した者、これを「力ありて見過ぐすべからず」といつたのは曲解である。

亭子院の御屏風の繪に、川渡らむとする人の、紅葉の散る木のもとに、馬をひかへて立てるをよませ給ひければ、仕うまつりける

たちどまり見てを渡らむもみぢ葉は雨と降るとも水はまさらじ

釋 ○亭子院云々 宇多上皇がその御所亭子院の御屏風の繪を題にして、躬恒の歌を召されたので、詠んでさし

あけたのである。亭子院は、春下「見る人もなき山里の」の條に既出。「馬をひかへて立てる」は、馬を乗り据ゑて立つてゐること。○見てを「を」は歎辭。

大意 先づ立ち止まつて、あの紅葉の散る景色を見てサ、この川を渡らうぞ、眞の雨ならば猶豫しては居られぬが、紅葉は散つて雨のやうに如何ほど降るとても、この川の水は増りはすまいと思へばサ。

評 浅川のほとり、駒を控へて紅葉の散るを見る、その光景は頗る詩的だ。即ち畫中の人物の抱くべき詩的觀想を假想して、更に有聲の美を添へた。はげしい落葉から雨を聯想するは常套ながら、「水はまさらじ」とまで想像を延長したその痴氣は、實に愛すべきである。題畫の歌としては、洵に上乘の作と思はれる。公任が九品に、これを中の上に据ゑて、「心詞滯らずして面白きなり」と評したのは允當。

是貞のみこの家の歌合の歌 たゞみね

山田もる秋のかりほにおくつゆはいなおほせ鳥の涙なりけり

釋 山田もる「もる」は守るの意。○かりほ 假庵カライホの約。秋の田の稻を、鳥獸に荒させまいと守る者の居る小屋をいふ。○いなおほせ鳥 秋上の「わが門にいなおほせ鳥の」の條參看。

大意 山の田の番をする秋の假小屋に、このやうに置く露は、このあたりに來て鳴く、いなおほせ鳥の涙であつたわい。

評 假廬のあたり、白露の穠々たるのを見て、いなおほせ鳥の涙を思ひ寄つたのは、以てこの鳥の雁鶉椋鳥の類の、秋の渡り鳥である事が知られ、以てこの鳥の、いかに繁く鳴き騒いだかが想はれる。鳴くにつけて涙を聯

想するは、例の事である。
結句、新撰萬葉に涙なるべしとあるが、却つて詩味が局促する。

題しらず

よみ人しらず

穂にも出ぬ山田をもるとふぢごろも稲葉の露に濡れぬ日はなし

○穂にも出ぬ 稲穂の秀でぬをいふ。「も」の辭、語調が強いから、さへもの意に聞き取られる。○ふぢ衣 藤葛の皮の織維で織つた衣。今の葛布に同じい。古へは、山住などしてゐる賤者の服であつた。又喪服の稱ともする。

大意 まだ穂にさへも出ぬ山田を番するとして、稲の葉の露に、藤衣の濡れぬ日とは一日も無いわ。

評 嗚呼辛氣なことよの餘意がある。穂に出ぬ間すら既にかうだとすると、やがて穂に出でて、實つて、さて刈り收めるまでの艱辛は、どんなものだらうと想ひやると、この田夫の述懐、世に同情を寄せないものとはあるまい。歌の風格も、古調を帯びてゐる。

初句、季吟木に穂にいでぬとある。又結句、貫之本に濡れぬ夜はなしとある。山田を守るも露の置くも、夜を主とするから、夜はの方、呼應の妙があるやうに思つたが、よく考へると、却つて事が狭い。又古本には、この歌の次に、前の「山田もる秋の假庵の云々」の歌を擧げてある。この初二句の趣に據ると、従ふべき序次と思はれる。

○

かれる田におふるひづちの穂に出ぬは世を今更にあき果てぬとか

○ひづち 刈つた後で再び自生する稻。おろか生ひともいふ。○あき果てぬ 「あき」は、飽きに秋をかけた。

「ぬ」は現在完了の助動辭。○とか といふ事かの略。

大意 刈つた田に又も生えるひづちが、一向穂に出ないのは、今となつては時節の秋もはや果てたし、この世の中をもう飽き果てたといふ事であらうかしらぬ。

評 一旦は生ひ立ちながら、遂に穂に出ないで止むひづちを怪んで、世を飽き果てたのかといへる擬人の想像は、蓋しこの憂き世を飽き果て、出身の素念を斷つた人などの寄せた感懐であらう。

北山に僧正遍昭と茸狩にまかれりけるによめる

そせい法師

もみぢ葉は袖にこきいれてもて出なむ秋は限りと見む人のため

○北山に云々 古本には「僧正遍昭と」の五文字がない。家集の詞書にも「北山に松茸とりにまかりたりけるに」とある。○こきいれて 「こき」は掻き落すこと。すごくに同じい。○もて出なむ 持つて出でようの意。「なむ」は希望の辭ではない。

大意 この梢の紅葉は、自分の袖へこき入れて、持つて往つて土産にしようぞ、こゝらに來て見ずに、秋は最早仕舞ひだと思ふ人の爲にサ。

評 紅葉を袖にこき入れるのは、逸興ある所作だが、既に萬葉集に、

ひきよちて折らば散るべく梅の花袖にこきれつしまばしむとも (卷八)
時鳥なくはぶきにも散りぬべし袖にこきれつ藤なみの花 (卷十九)

とあるから珍しくはない。「出なむ」が眼目である。この一句によつて、山中に現在入り立つてゐる趣が見える。京附近の紅葉は、既に空しい枝のみとなつた頃とすると、秋のしるしとして見るべき物もないから、「秋は限り」と思ふのは固よりの事、作者自身も、全くさう思つた一人であつたらう。たまく北山邊に、茸狩の勝遊を試みた所が、測らず紅葉のなほ盛りなのに會つて、いざこれを家産にして、山には秋の残つてゐる事を、都人等に知らせようと興に入つたのは、いかに作者自身が、この紅葉の盛りを意外と感じたかが想見される。春上同人の歌、

見てのみや人に語らむさくら花手毎に折りて家づとにせむ

はその興味といひ、構想といひ、ほゞ同調の作である。この他、春興を憶うては、「思ふどち春の山べにうち群れて」と歌ひ、大和撫子を見ては、「我れのみやあはれと思はむ」と歎き、躑躅を見ては「思ふどち折りて暮らさむ」と希ふなど、人と娯樂を頌つて俱に天與の恩光に浴したいのが、この作者の特想である。渠れは單に理想として希望として、これを稱道したのみではない。事實に於いてそれを踐行した。即ち渠れの交際は汎交で、上は宇多上皇より、下は乞食坊主の輩に至つてゐる。會友を喜び、會談を娛み、會飲を解し、山野の同遊を以て唯一の性命としてゐるやうである。その動もすれば、狷介獨立、世と忤ふのをえらい事とする野狐禪の境界を出離してゐる所以は、既に春上「思ふどち春の山べに」の歌の條で、論じておいた。

初句、新撰和歌、六帖にもみぢ葉をとある。四句、古本に秋を限り、三句、打聽本にもていなむとある。

寛平の御時、ふるき歌奉れとおほせられければ、立田川も
みぢ葉流るといふ歌を書きて、そのおなじ心をよめりけ
る おきかぜ

み山より落ちくる水のいろ見てぞ秋はかぎりと思ひしりぬる

○寛平の御時云々 宇多帝の御世に、古歌奉れとの仰のあつた時、上に見えた、「立田川もみぢ葉流る神なひのみ室の山に時雨降るらし」の歌を書いて、それに同趣向の歌を詠み加へて奉つたとの意。

大意 まだ秋が残つて居らうと思つたその深山から、散紅葉の流れて來る水の色を見てサ、さてはもういよいよ秋は仕舞ひだな、と思ひ知つたわ。

都あたりこそ散り盡したれ、深山の方にはまだ秋をとめて、紅葉のある事と思つてゐた趣、「ぞ」の辭と「は」の辭との應接によつて聞き知られる。紅葉の語を着けないで廻護したのを、一ふしとするが、詩味饒かでなく、とてもかの「立田川もみぢ葉流る」の仕に配するに足らない。「名歌に返歌なし」の諺の通り、唱和などは控へれば、却つて賢かつたものを。

二句、六帖におちくる瀧のとある。

秋のはつる心を、立田川に思ひやりてよめる

つらゆき

年毎にもみぢ葉ながすたつ田川みなとや秋のとまりなるらむ

○秋のはつる云々 立田川を想像して、暮秋盡の意を詠めるとの意。○とまり 泊舟の繋る處をいふ。

大意 毎年々々紅葉を流し下す立田川の川下の湊がサ、あの暮れて行く秋の泊り處であらうか。

湊は百船の泊る處なので、紅葉の流下によつて、立田川の湊は秋の泊だらうとの想像は、甚だ巧趣がある。

上なる「もみぢ葉の流れととまる湊には」の歌に似通つた所もあるが、六帖に、

もみぢ葉の流れてよどむ湊をぞくれ行く秋のとまりとはする

は殊に類想類型である。但用語は一層の洗煉を経てゐる。「ながす」は、舟や筏を流し下す趣に聞えて、湊、或は泊の語に打ち合ひ、例の細やかな叙法である。舌音、及びア韻の語の多いのは、勁く花やかな聲調を成す所以と思はれる。二句一本にながるとある。

長月のつごもりの日大堰にてよめる

夕づく夜をぐらの山に鳴く鹿の聲のうちや秋は暮るらむ

○長月の云々 「長月」は、陰曆の九月の異名。夜長月の略かといふ。「つごもりの日」は晦日。「大堰」は京都府下葛野郡嵐山の麓を流れる大堰川に沿うた里の名。小倉山はその北岸に當る。○夕づく夜 ヌラツクヨ 夕方になるをいふ。故に小闇き意をいひかけて、小倉山の枕詞に使ふ。「づく」は、月の意でない事は、朝づく夜、夕づく日、秋づけばの語を思ひ合はすればわからう。さて「夕づく夜小倉の山」と續いた例は萬葉集にあるが、それは大和の立田の小倉山である。

大意 あの小倉山に鳴く鹿の聲のするうちにサ、秋はもう暮れることであらうか。

蕭條たる山本の里に、物悲しい夕闇を傳うて、曳聲に鹿の鳴く音の聞えてくる、いかに遊子の悲を催すことであらう。こゝに今遊子といつた。この時代では都から出て、嵐山や交野邊ぐるるを歩いて、旅であつた。

この氣分で、この歌の味を曉らなければならぬ。況やそれが九月盡の當日ときては、溜るものではない。又「聲のうち」に秋暮る」といふに、秋の果の九月盡のその日も、早暮方にまでおし詰まつて、殘餘の秋の幾ばかりも、ない趣をいひ現はし、秋のいと惜まれる所以を構成してゐる。家集にある、くれぬとてなかなりぬる鶯のこゑのうちにや春のへぬらむはその初稿で、更に推敲されて今の歌とはなつたのであらう。想は清警、措辭は縝密、調は流暢である。

同じつごもりの日よめる

み つ ね

道しらばたづねも行かむもみぢ葉をぬさと手向けて秋はいにけり

大意 え、道を知らうなら、跡追つて尋ねても行かうよ、散紅葉を道の神へ幣のやうに手向けて、秋は旅立して去つてしまつたわい。

しかし道を知らぬから、あとの追ひやうもないの餘意がある。秋を擬人して、その暮れ行くを旅立つものと看なし、さて人の別を惜む情を、秋の別に擬した。人の別はなほ道が分明だが、秋の別となつては道がわからぬ。その惜まれる所以は偶然でない。巧を究めて纖弱の弊がないのが、この作者の壇場であらう。但春上の、素性の歌、

花散らす風のやどりは誰れか知るわれにをしへよ行きて恨みむ
と構想が似寄つて、曲折自在は彼れにあり、歌の位はこれが勝つてゐる。どちらが先に詠まれたものか。
古本に、二句たづねもいなむとあるは、結句にさしあつてゐる。又同じ本に、結句秋はいぬめりとある。又六
帖に、下句ぬさに手向けて秋はいぬともとあるは、調が舒暢でない。

古今和歌集卷第六

冬歌

題しらず

よみ人しらず

たつ田がは錦おりかくかみな月しぐれの雨をたてぬきにして

○おりかく 織り懸く。但、懸くに重い意のない事は、春上「あを柳の絲よりかくる春しもぞ」の條にいつた。

○かみな月 陰曆十月の異名。

大意 立田川が、紅葉の錦を織りかけるわ、神無月のこの節降る時雨の雨を、堅横の絲にしてサ。

上の秋下の、

たつ田川もみぢ葉流る神なひの三室の山にしぐれ降るらし

と同一の詩境で、但これは眼前に時雨を見、紅葉の散り浮くを見たものだ。紅葉を錦と譬喩した縁によつて、
時雨をその経緯の絲と見做した。尤も雨脚を絲に譬へることは、漢詩にも例ある事で、秋下、
霜のたて露のぬきこそよわからし山のしきの織ればかつ散る

などの構想も、これと似通つた巧か、一段格調が高くて、繊細の弊のないのが嬉しい。又、その實況に譲つ

て、紅葉の一語を着けないのも、この歌の餘情ある一因として數へられよう。

初句、新撰和歌、及び六帖に立田山、家持集に佐保山とあるはいかゞ。山の錦を時雨の織りかける頃、即ち紅葉の色付く頃は、寧ろ長月がふさはしからう。神無月では季節後れだから、山の紅葉は盛り既に過ぎて、最早落葉してゐる頃だらう。されば本文のまゝに、立田川の落葉の趣が妥當である。又家持集は後人の僞撰だから、これによつて家持の歌と心得てはならぬ。又或書に、延喜の御製とあるも妄りである。それは新古今集の序に、「抑、於古今者、不載當代之御製」と見えてゐるではないか。

冬の歌とてよめる

源宗于朝臣

山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬとおもへば

○人め 人の見る目をいふ。「め」は見えの約。○かれぬ 枯れに、離れを寄せた。離るゝは、遠離るなどの離ると同じい。

大意 山家は、冬がサ取り分け寂しさが増るわい、今まではたま／＼ながらも見えた人目も離れ、草も枯れてしまふと思へばサ。

幽閑寂寥は山家の常ながら、尙春は花、夏は時鳥、卯花、秋は鹿、紅葉などにつけつゝ、稀には都人の音信れる事もあつて、寂しい中にも、自然賑はしい點もあつたのを、冬となつての山家は、はかない小草までも枯れ渡つて、人の訪ねてくる種はひもないので、全く世に超えた寂しさである。さて、草の枯れるは何處でもある事だが、人目の離れるのは山家に限る事なので、「人目」が主眼の語である。結句の「おもへば」を、宣長が、「只、

枯れぬればといふに同じく、思ふに意味なし」といつたのは甚だ粗い。これは只その遣ひなしが稍軽いだけで、意味のないのでは決してない。辭句の彫琢はやゝ見られる。

題しらず

よみ人しらず

おほ空の月のひかりしきよければ影見し水ぞまづこほりける

○きよければ 古本并に新撰萬葉、六帖、朗詠等に、さむければとあるに據つて釋した。

大意 この大空の月の光がサ大層寒いから、嘗て月影を映して見た水がサ、他の水よりは一番先に氷つたわい。

評 大空の色は玄く澄み、月の光は氷と冴えた冬の夜、遣水などの今は氷つてゐるのを見ての作だらう。さうした寒い夜は、何處の水とても氷らないのは無いが、そんな理窟を放下して、單に目前の實境に即した感興のままに、月を映した水が、流石に一番に氷つたわといふ。極めて只ありのまゝの作である。これを舊註は素より眞淵、宣長、景樹等を始めて皆、

昨夜の空の月がきつく冴えた故に、その影を見た水がサ、今朝はあれあのやうに、の意に解いたのは賛成し難い。何で月の光を昨夜のと定めたのか。清かりければなど、過去にいつたなら知らず、清ければとあるではないか。歌は月の光と氷れる水と相須つて、凜乎たる霜氣が骨に徹つて、寒いやうに覺える。

夕さればころも手さむしみよし野の吉野の山にみ雪ふるらし

○夕されば 夕べになればの意。萬葉集に夕去者とあるが、去は借字である。○み雪 「み」は美稱。深雪と書くはこれも借字。

大意 夕方になると、袖のあたりが格別寒い、これではあの三吉野の吉野の山に、きつと雪が降るらしいわ。

評 初句「夕されば」の句、力強く聞えるので、晝の間はさもなくかつたがの餘意を生ずる。日の暮れゆくから、何となく底冷して、働く手許の寒さを覚えるにつけて、この分では、かの氣疎けな高山の吉野の山はと思ひ遣つたのは、吾人が日常の應對にも、「今宵は大層冷エマヌナ、多分遠山ハ雪デセウ」など語ると同想である。萬葉集卷十に、

ゆふされば衣手さむし高まどの山の木毎に雪ぞ降りたる

降雪を現在に看たのと、想像したのとの差別があるばかりで、大體は同調ながら、高圓は吉野ほどは寒くない土地だから、「夕されば衣手さむし」が生きない。流石にこの歌は自然で實情で、格調も高古莊重である。

「み吉野の吉野の山」は諧調ではあるが、或は時代の好尚に惹かれて、撰者が引き直したのではあるまいか。集中に同調のが三首ある。しかもこの歌は六帖に、初句夕ぐれば、四句高きみ山にとあり。家持集といふものには、四句を高まの山とあれど、高間山は河内國だから、「み吉野」からは續け難い。顯註に「常には深き野山とあれども、崇徳院の御本にも高き山と侍り」とある。これ等を併せてみると、高きみ山も、高き野山も、ふかき野山も、皆、たかぎの山の誤寫から起つて、さまざまに字を填めたらしい。たかぎの山は、萬葉集卷三に、

三吉野の高城の山にしら雲は行きはかりてたな引ける見ゆ

と見えて、吉野山の奥、子守神社の左方にある山で、俗にこれを城山といふ。實際高山なる上に、名稱が既に崇高の概念を表して、峰の上の雪を聯想するに尤も緣由がある。

○

いまよりはつぎて降らなむわが宿の薄おしなみふれるしら雪

○つぎて 引き続きて。○おしなみ おしなべの轉。推し靡けの約語。

大意 これからは、どうぞ打ち續いて降つてもらひたいわい、こちの庭の薄を推し靡かして降つてゐる白雪が、大層面白いによつてサ。

評 下句は萬葉集の、

めひの野のすきおしなみ降る雪に宿かるけふし悲しく思ほゆ (卷十九)

の二三の句をそのまゝだ。然し主意は全く違つて、萬葉のは旅人の羈愁を主とし、これは自然の感興を主としてゐる。然も同じ薄の雪でも、めひの野のと、わが宿のとは全く場處が違ひ、随つて趣を殊にして居るから、踏襲とはいはれまいと思ふ。羅一重覆つたやうに降り布いた雪に、前栽の枯生の薄の靡き伏したのが、殊にいちじるしく見え渡つた風情は、全く面白い。白雪とあるに、その色彩が強く印象されるのも、この場面では興味を一段と助ける。そんな薄雪だから、すぐにも消えさうなので、今よりは間斷なく降れと希つたのは、即ち今より間斷なくめではやしたいの下心と見えた。わざわざ巧まない巧で、情景相協つた作である。貫之が、

よるならば月とも見ましが宿の庭しろたへにふりしける雪

は、實にこれを藍本として、一節をかしくは詠み成したが、遙かに單調で味ひが淺く、雪を月影と見るのも類想が多い。但この歌、「降らなむ」と「降れる」と、同語が重複してゐる。古歌には例ある事ながら煩はしい。

○

ふる雪はかつぞけぬらし足引の山のたぎつ瀬おとまさるなり

釋 ○かつ 片一方からといふに當る。春下「咲くと見しまにかつ散りにけり」の條參看。○けぬ 「け」は消えの約語、「ぬ」は現在完了の助動詞。○たぎつ瀬 張り立つて流れる激湍をいふ。「たぎつ」は沸ると同意の動詞で、古意の瀧と同じ。瀑布ではない。

大意 山の雪は積りもあへず、降る傍から消えてしまふらしいわ、其の證據には、この谷川の早瀬の水の音が、あれ高く鳴るわい。

評 山陰などに住む人の作だらう。屋後の溪聲が、常に變つて鳴高なので、降るまゝに雪が消えるのだらうと想像した。以て寒氣のさのみは烈しくない、初仲冬の頃なる事が知れよう。想はさしもないが、なほ古調の面目がある。

二句、顯本かつぞけぬらむとあるは、この歌體に協はない。結句、六帖に聲まさるなりとある。

○

この川にもみぢ葉ながるおく山の雪けの水ぞいままさるらし

釋 ○雪け 雪消えの約で、雪解のこと。清んで訓む。けを濁ると雪氣の意となる。紛へてはいけない。

大意 この川にみぢ葉の葉が流れる、こりやこれ、川上の奥山の雪解の水がサ、今増るらしいわ。

評 秋歌下なる、

たつた川もみぢ葉流る神なひの三むろの山に時雨ふるらし

と殆ど同想で、今一きはその規模を小さく、その格調を卑くした縮圖の觀がある。劈頭第一、「この川に」と打ち出したのは、驚歎から發した意調で、紅葉の流れたのを意外と感じた様子が出てゐる。さてその紅葉を、必ず川上の奥山の物と見なして、雪解の水に推し流されたとするのは、想像としては當然なことである。その實は途中何處からか散り込んだ物かも知れないが、必ず奥山のと定めたのは、即ち詩の理路に着せぬ所以である。「今」の一語、軽く看過してはならぬ。初句の驚歎に呼應があつて、紅葉が今はじめて流れ出た趣さへ推定されるのである。無論立田川の歌よりは、後出の作である。

○

ふるさとは吉野の山し近ければひと日もみ雪降らぬ日はなし

釋 ○ふるさと 都址、又は故京の意。○し 強辭。

大意 この吉野の古里は、奥深い吉野の山がサ近いによつて、一日とても、雪の降らぬ日といふは無いわ。

評 吉野の里人の作だらう。日本書紀、應神天皇の卷に吉野宮に幸し、又齊明天皇の卷に吉野宮を作られた事が

載つてゐる。いはゆる秋津アキツの離宮で、奈良時代の末からは全く荒廢したから、古里といふのは協つてゐる。抑も吉野は全部北受の土地で、天武帝の御製にも、「三吉野の耳我ミヤノミミガの嶺に、時なくぞ雪はふりける、ひまなくぞ雨はふりける」とある如く、その雨雪の影響を受ける事は一通りでない。かうした山陰沍寒の冬景を、ありのままによく詠み得てゐる。況や「古里は」と打ちあけるからして、人氣遠く物寂しい聯想があつて、その日毎に降る雪は殊に侘しさに感ぜられる。「ひと日も」を「降らぬ日」と受けた「日」の語の反復が、一層その意を強くする。又み雪ミユキ一日もといふべき順序を轉倒して、「一日もみ雪」と四音三音の組織にしたのも、強い迫つた感じを與へる。體格は純古とまではいへないが、素朴で高調である。

新撰和歌に、二三の句奈良の都の近ければとあるのは、甚だ謂れがない。第一地理的からして成り立たない。又結句は日ぞなきとある。六帖に、この歌を御幸ミケキの題に收めたのは、四句の「み雪」をいひかけと見たのだらうが、全く據のない事である。

○

わが宿は雪ふりしきて道もなし踏みわけてとふ人しなれば

釋 ○ふりしきて 降り敷きて。「しき」を願ネガふの意とするは、この歌では面白くない。○道も 「も」はさへもの意。

大意 自分の家は、雪が一面に降り満ちて、行き通ふ道さへもないわ、それといふも、この雪を踏み分けて尋ねて來る人がサ無いからサ。

評 山里などの人氣の稀な處に住む人か、又は侘びしれて、世のまじらひの絶えた人かの作らしい。「わが宿は」と強く出てるるので、差別的に他に對へた趣がある。即ち世上の繁華な宿には引き換へて、わが宿はいとゞ雪の爲に人の足跡を絶つて、訪はるべき道さへもなくなつたよとの歎息である。「ふりしき」は、面積を廣くかけていふ語だから、何處を見渡しても一帯の白皚々で、道一つだにない光景を想像させる。

わが宿は雪ふりこめて道もなしいづこはかとか人のとひこむ (新撰萬葉)
わが宿は雪ふる野べに道もなしいづくをはかと人のとがめむ (寛平后宮歌合)
は誤寫もあるらしいが、とにかく上句は似てゐる。

冬の歌とてよめる

紀貫之

雪ふれば冬ごもりせる草も木もはるに知られぬ花ぞ咲きける

釋 ○冬ごもり 本集の序註の王仁の歌といふものに、「難波津にさくや木の花冬ごもり今をはるべと咲くや木の花」といひ、又萬葉集にも、多く春といふ語の枕詞に用ひてある。冬は閉藏とて、草木の發育をとめて内に籠るをいふ。○せる してあるの約。○はるに知られぬ花 花といふ花は、春の關り知らぬはないが、これは冬の雪の花なので、春に知られないのである。

大意 まだ芽も出さずに、冬に籠つてゐる草も木も、雪が降るとめづらしく、春の一向知らない花がサ、咲いたわい。

評 初句は四句に續く格である。雪を花に譬へる例は、既に和漢に亘つた套語であるが、冬の雪を春に認知され

ない花と見たのはこの歌の特想で、腐を化して新としたものである。この種の趣向は作者の得意とする所で、殊に拾遺集のおなじ貫之の歌、

櫻ちる木のした風はさむからで空に知られぬ雪ぞ散りける

は、これと表裏した一對同調の作で、恰も双生児の観がある。その描寫こそ反対なれ、春と空とを擬人して、「そらに知られぬ雪」、「春に知られぬ花」と巧んだのが、多少理路にわたる感もあるが、いかにも氣が利いて、語が洗煉されてある。一首の精神またよく流動して、う行の音勝に、聲調がうるはしい。さてこの二首の優劣をしひて論ずると、櫻の雪は兄、雪の花は弟だらう。

志賀の山ごえにてよめる

紀秋みね

白雪のところもわかず降りしけばいはほにも咲く花とこそ見れ

○わかず 差別なしに。○いはほ 石秀の義。單に岩といふに同じい。

大意 白雪が別け隔てなしに、平一面に降ると、草木ばかりか、花の咲かぬ筈の岩にも、花が咲いたとサ思ふわい。

評 志賀の山越は、上にもしばしば見えた通り花の名所なので、聯想上から、今草木岩石の差別なく、薄雪の降つてゐるのを見て、流石の無心の頑石にまでも、花の咲くと見たのが、この一節である。但萬葉卷十九に、

于時積雪彫成重巖之起、奇巧綵發草樹之花、云々。

なでしこは秋さくものを君が家の雪は岩ほに咲きにけるかも

とあつて見れば、着想の先取權は彼れにある。「咲く花」は、花咲くとあるべきを、語調のまゝに倒裝したのである。景樹が、「これは花を主としたるいひさまにて、草木と同じく、巖にも咲く花ありと見ゆの意なり」と解いたのは、一應尤もに面白いが、よく思ふと、もし花が主なら、三句はそれに顧應する名詞が必要であるから、降る雪をとか、降り敷く雪をとかなくてはならぬ。「降りしけば」では、やはり咲くを主として、意釋のやうに見るべき語勢である。結句、六帖に花かとぞ見るとある。

奈良の京にまかれりける時に、宿りける所にてよめる

坂上是則

み吉野の山のしら雪つもるらしふる里寒くなりまさるなり

○奈良の京に云々 「まかれりける時」は行つて居た時の意。作者が奈良の古京に逗留してゐた時に、その旅宿で詠んだものである。「延喜八年正月任大和權少掾、同八月廿八日任大和權掾」と、古今集目錄に見えた。これはこの集の撰よりも後の事だから、それより以前に、大和の目などで下つてゐた時の作か。或は撰進後の追加だらう。○ふる里 こゝは奈良の故京をさしていつた。

大意 この頃は、あの吉野の山の雪が、積るらしいわ、さうと見えて、この奈良の古里が、ますます寒くなるこ

とよ。後世の人が、吉野山と云へば櫻花を聯想するやうに、奈良時代からこの頃にかけては、吉野山とさへいへば、

山深く雪も亦深い荒山が聯想されたのであつた。奈良では、間に塔の峯續きの山があるので、その山影すら見難いが、嚴冬の寒さを感じては、附近の山々をさしおいて、まづ吉野の積雪が思ひ出されたものらしい。ラ行音多くて、聲調ほがらかである。

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌 藤原興風

浦ちかくふりくる雪はしら波のすゑの松山越すかとぞ見る

○すゑの松山 今陸中國二戸附近にある波打峠を、末の松山だと里俗にいひ傳へてゐる。すゑは地名と見え、日本紀に、山城に陶野あり、和泉に陶邑ある事見え、又、上總には周淮郡あるを以て證とされる。顯註に、能因が歌枕を引いて、「本の松、中の松、末の松とて、三重にありと申す」とあるは、妄言である。なほ本集東歌のうち、みちのく歌に、

君をおきてあだし心をわがもたばすゑの松山波もこえなむ

の所で委しくいはう。

大意 かう海近い所へ降つて來る雪は、景色が面白くて、古歌に波の越さぬ處と歌つた末の松山を、白い波が越えるかとサ思ふわ。

評 山近い海岸で、浦風に吹きしかれて、雪が卍字巴と亂れ降る趣が、沖つ波邊つ波が押し寄せて、陸を覆つた狀に似たので、うちつけに、白波の山を越すかといはうとしたが、端なく、「末の松山波もこえなむ」の古歌を聯想して、かの山を波の越すかと見ると擬へたのである。されば、初句は何處の浦でもよい。契沖が、末の松

山あたりの浦と見たのは泥んでゐる。巧に典故を湊合した手際は見えるが、何だか作物で、實感が伴はない心地がする。

二句、新撰和歌にふりしく雪はとある。又この歌、拾遺集にも金玉集にも再選されて、作者人丸とあるが、無論人丸の歌體ではない、この集の方が正しい。

壬生忠岑

みよし野の山のしら雪ふみわけて入りにし人の音づれもせぬ

○音づれもせぬ 「音づれ」は便り。「も」はさへもの意。「ぬ」は否定の助動辭。

大意 吉野の山の深い雪をふみ分けて、籠つてしまつた人が、その後は出て來るところか、一向に音づれさへもせぬわ。

評 いよく無事かどうか、時節柄所柄ゆゑ心配だなあ之餘意がある。初二句、單に「白雪」とあるのとは異なつて、いかにも荒山の深雪の狀に聞え、入りにし人の心細さを映發してゐる。一去杳として消息を斷ち、さりとてこちらから尋ねる心當りもない。生かした死か、覺束ない極みではないか。友愛相思の熱情はこゝに迸發して、端なく「入りにし人の」と歌ひ出されたものだ。結句の「も」の辭に力があるので、出會ふことは勿論の意が含まれてゐる。商徴の音過半を占めて、聲響が悲愴に、情が眞摯で、體格の長高なのは、忠岑の他作に似ない。それゆゑ景樹は、「その趣、打ち任せたる雪の景色にあらねば、歌合の歌めかぬ心地す。別に事に當りての歌ならむ」と疑つた。けれど、世を憤り俗を厭ふ餘りの山籠りに、吉野の山奥などに遁れるのは、奈良に都のあつ

た時代の事である。今の平安京になつては、藤原關雄が東山進士と稱せられたやうに、東山西山、あるは北山、さては白河宇治などのあたりに、多く閑居したものであつた。それを奈良時代の舊套のまゝに、都からは懸け離れた吉野を特に取り出したのは、あのもろ越の吉野の山と詠んだ類で、吉野を必ず隱遁の場處と假定しての上の作と思はれるから、實況の歌ではなく、題詠の範圍内に屬するものだらう。やはり歌合の歌と見てよい。

秋山にもみぢあはれとらぶれて入りにし妹はまでど來まさぬ (萬葉卷七)
に比べると、雲泥の優り方である。後世鎌倉の八幡社頭で靜御前が、この歌の結句をあとぞ戀しきと謠ひ易へたのは、時に取つての手柄だが、や、露骨で、大いに風雅を傷ける。

○
しら雪のふりてつもれる山里はすむ人さへやおもひきゆらむ

○おもひきゆ 心細く消え入る思するをいふ。

大意 雪は消える物だが、その白雪が降つて、段々深く積つてある山里は、さぞや住んで居る人までが、心が消え入るやうに思ふ事であらうか。

源氏物語手習の卷に、小野に住みわびた所に、

雪ふかく降りつみ、人め絶えたる頃ぞ、思ひやりたる方なかりける。

とあるにおなじく、山家の情を思ひ遣つたのである。二句の「て」の辭は注意を要する。單に降り積るといふ

とは異なつて、時間を持つ爲に、いみじく降りもし、積りもした狀に聞きなされて、大いに力がある。これが爲に麓の通ひ路も打ち絶えて、閉ぢ籠つた寒さや寂しさの甚しさが映出されてくる。それを雪の縁で、「思ひきゆらむ」と調べおろしたのである。だから雪の消えるのは現前の事實と見てはならぬ。只雪は消えるといふ觀念を基調としたに過ぎない。

三句、新撰和歌にふる里はとある。

雪のふるを見てよめる

凡河内みつね

雪ふりて人もかよはぬ道なれやあととはかもなく思ひきゆらむ

○雪のふるを見てよめる 見て思ふ事をよめるの意。○道なれや 秋上、「秋の野におくしら露は玉なれや」の語法と同じい。参看されたい。○あととはか 「あと」は跡である。「はか」は、そこはか、いづこをはかりなどいふ、はか、はかりに同じく、量りの略である。けれど「あととはか」と連ねては、「はか」に深い意味はなく、單に跡といふ語の意を強めたに過ぎない事は、淺はか、あてはかなどいふ語例を思ひ合はせるがよい。

大意 雪が降つて、人も通はぬ道は、足跡も無いによつて、道筋が消えてしまふが、このやうに引き籠つてゐる自分の心は、不思議にもその人通りの無い雪道かして、何がなしに消え入るやうに思ふのであらう。

○愛思を抱いて、ひどく懊惱してゐる折しも、雪の降るのをつくづく詠め入つて、わがはかない思に擬へたのである。雪故の物思ではない。けれどまた、かうも歌ひ出されるのは、雪の日の徒然な物わびしさからである事は勿論である。まづ寄雪述懐といつたやうな歌である。元來不倫な物を譬喩に捉へて來て、縁話によつて

連絡したので、彫蝨の技は多少見られもするが、感哀はやはり浅い。

雪の降りけるをよみける

清原深養父

冬ながら空より花のちりくるは雲のあなたは春にやあるらむ

○花のこは雪を譬へた。

大意 まだ冬でありながら、あのやうに花の散つて来るのは、あの雲のあちらは、もう春になつてサるるのであらうか

評 雪の花などいふ、陳套の譬喩を用ひないで、直に花と断定したのが面白い、この穉氣が即ち歌である。貫之集に、

春ちかくなりぬる冬の天空は花をかねてぞ雪もふりける

とあるも、想は類似してゐるが、理路に纏はれ過ぎて、ひどく劣つてゐる。「雲の」は空のといつてもよい所を、上に「空より」とあるので、轉義したものと見ても見られるが、自分はこれを實在の雲と解したい。冬の一、日、雲影が低迷して、折々軽く雪がちらつく。それが花とも見れば見られる。即ち雲の此方は冬ながら、彼方は春だらうとの想像が、そこに生まれてくるのは自然である。この集、夏歌、

夏と秋と行きかふ空の通ひ路はかたへ涼しき風やふくらむ

を、時節と材料とを取り換へて、逆寫したやうな作である。上に、「冬ながら」とおき、下に、「春にやあるらむ」と結んだ対照は貼密に過ぎて、餘情が乏しい。この歌が體格の點で卑小な原因の一にも數へられよう。道

濟十體に、高情の歌と評したのは、どういふものか。聲調は花やかで流滑である。

雪の木に降りかゝれりけるをよめる つらゆき

冬ごもり思ひがけぬを木のまより花と見るまで雪ぞふりける

○冬ごもり この解上出。但こは冬籠りの頃はの意に解さなければならぬ事は、なほ梅雨を梅雨の頃はの意に解するのと同じい。

大意 諸木は冬枯れたまゝ、まだ芽も出さず籠つて居る頃なので、花を見ようとはとても思ひも戀けぬものを、それにまゝ、あの木の間から花の散ると思はれる程にサ、雪が降つたわい。

評 韓愈の春雪の詩に、

白雪却嫌春色晚、故穿庭樹作飛花。

萬葉集卷八に、

うめの花枝にかちると見ると見るまでに風にみだれて雪ぞふりける

など和漢を通じて、夙く同案の作あるうへに、新撰萬葉の、

木の間よりふきくる風に散る時は雪も花とぞ見えまどひける

に至つては全然吻合してゐる。其の穿庭樹といひ、枝にか散るといひ、木の間より散るといつたのは、皆、雪を花と見る爲の襪染である。既にいふ通り、雪を花の構想は等類がすでに澤山あるうへに、後世いよく屋下屋を架して、どうもならぬ。

結句、六帖に雪は降りつゝとある。

大和の國にまかれりける時に、雪の降りけるを見てよめる
坂上是則

朝ぼらけ在明の月と見るまでによし野の里にふれるしら雪

○大和の國にまかれりける。この作者が、大和に往つた事に就いては、上の三吉野の山の白雪つもるらしの條に辨じた。○朝ぼらけ 朝朗明の略で、夜明方のこと。集中戀三に、「東雲のほがらくと明け行けば」とある趣がそれである。○在明の月 影がまだ空に在りながら、夜の明くる頃の月をいふ。おもに下弦の月。○月と見るまでに 月の影と見るまでにの略。「まで」はばかりの意。○ふれる白雪 下に、なるかなといふ詞を補つて聞く格。

大意 朝しらく明けに見れば、恰も在明の月の影かと思ふ程に、一夜の間に、吉野の里に、一面に降つた白雪であるよ。

元來吉野は山ふところだから、他所よりは雪も早い。或朝ぼらけ、外の方おしなべて眞白に見渡されたのを、都人の慣はらぬ心からは、雪とは思ひも寄らず、ふと在明の月影が地に印したのかと疑つたが、よく見れば、夜の間降つた雪の光であつたといふのである。かう闇夜の頃に、雪を月明かと疑ふのは、白居易の詩に、「風吹枯木晴天雨、月照平沙夏夜霜」とある儻である。貫之集にも、よるならば月とも見ましわが宿の庭しろたへにふりしける雪

といふのがある。強ひて詠出の前後は決し難いが、いづれも白詩からヒントを與へられたと見るが至當である。又この雪は草木の形を失はぬ程度の薄雪の光景で、更に萬物の面目を埋了する深雪の趣ではない。白詩の霜の風情に近い雪である。然るに眞淵が、「まで」の辭を重く見、且歌の序次に拘泥して、薄雪でないとしたのは失考である。又契沖、宣長が在明の月は光り收めたる朝朗に、尙その影かと思はるばかりと説き成したのは、在明の月を曉の月と解し、朝朗とは時刻が出會はぬと考へた拘泥の見で諾ひ難い。さてこの歌は姿も綺麗で、長けも高いが、大した佳作でもない。四句、歌集に吉野の山にとある。

題しらず

よみ人しらず

けぬがうへに又も降りしけ春霞立ちなば深雪まれにこそ見ぬ

大意 これ雪よ、このまだ消えぬ上に、又も降り續いてくれい、その譯は、追つ付け長閑な春の霞の立つ時分になつたら、この面白い雪も段々消えて、稀にサ見る事であらう。

上の「今よりはつぎて降らなむ」は、その降り敷いた様を興じて、その度々降る事を望み、これは残雪の稀なことを豫想して、ある上にも夥しく降り積れと希つた。それを景樹は同意と見て、初句を、けぬが、うち、の意だと解いたのは、いみじき誤である。この歌、表面から見ると雪の熱愛者の詞らしいが、或は裏をいつて居るのではあるまいか。この頃雪が頻々として降るので、その苦寒に堪へぬ餘り、いつそ降るなら在るうへにも山と降り積つておけ、春になれば少ない雪だからと、自棄的に皮肉をいつたものと思はれる。どうもかう見た方

が、この歌の自然の調に協ふ。「春霞立ちなば」は春立ちなばの意で、春の歸るを春下に、をしめどもとまらなくに春霞かへる道にし立ちぬとおもへばといつたと倅しい修辭で、おのづから霞と雪との對照が出來てゐる。

○
梅の花それとも見えぬ久方のあまきる雪のなべて降りば

此歌は、ある人のいはく、「柿のもとの人まろが歌なり。」

○それとも、それなりとの略。「それ」は梅の花を指す。○久方のあまの枕詞。春下「久方の光のどけき」の條を參看。○あまきる 奈良時代に多く見えた語で、天きらし、天きらふなどいふ。天のボツと曇り合ふのをいふ。あの霧といふ語はこの居體言で名詞となつたものである。○降りば 降りてあればの約。

大意 大空に漲る雪が、一面に降つてあれば、梅の花が梅の花とも見えぬわ、同じ白さなので。

梅雪相紛れることは、夙く支那の詩に見え、奈良時代にも數多いひ舊してゐる。しかも萬葉集卷八、赤人の歌に、

わがせ子に見せむとおもひし梅の花それとも見えぬ雪のふれ、ば

又同集卷十に、「梅の花それとも見えぬ降る雪の云々」とも續けて、語句に多少の出入こそあるが、全く同想同趣である。但この體格、風調、用語を味ふに、雄渾雅健で、しかも蒼然たる古色を帯びた所は、純乎たる萬葉調である。道濟十體には、これを器量ある體として擧げたのは、一隻眼を持つてゐる。一體この作者は誰れ

か。風調が既に赤人でない。憶良でない、家持でない。旅人でない。かう數へてくると、僅に只一個の歌聖人麿を剩してゐるばかりだ。左註に「人麿が歌なり」とあるは、あながちに否認し難い。以下四首、皆雪中の梅を詠んである。

拾遺集には、斷然これを人麿の作として採録したことを思へば、却つてこの左註は、拾遺集の選者といはれた藤原公任卿の所爲かも知れない。既にすべての左註は、この卿の手になつたものだらうと、古人も疑を挿んでゐる。

梅の花に雪の降れるをよめる

小野篁朝臣

花の色は雪にまじりて見えぬとも香をだに匂へ人のしるべく

○雪にまじりて 雪の白さに混つて。○香をだに「を」は歎辭。

大意 此れ梅よ、汝が花の白い色は、よし雪の白さにまじつて、差別が見えないとしても、花が咲いてあると人の知るやうに、せめて持前の香でなりとも、あざやかに匂つて呉れよ。

評 梅を愛賞する情の尋常でない態が見える。梅の一語をつけないで、梅を歌つたものであることは動かない。初句「花の色は」と字餘りに起したのは、頗る勁健な調子である。四五句倒裝法を用ひたのが、爲に諧調となつてゐる。次の二首も同調の歌だが、これは稍古朴な傾向があるだけ嬉しい。なほ春下、

花の色はかすみこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風の條を參照してほしい。

六帖に花の色に雪はまじりて見せずとも香をだにぬすめとあるは、甚だ妄りがはしい。新撰和歌に、初句梅の花とある、これは節短く力が弱い。

雪のうちの梅の花をよめる

きのつらゆき

梅の香のふりおける雪にまがひせば誰れかことごとくわきて折らまし

【釋】○降りおける 降り置きてあるの約。萬葉集に多く見え、延喜の頃までは用ひてゐた語である。集中雜部に、時雨ふりおけるとある。○まがひせば 紛ふならば。○ことごとく 別々の意。秋下「秋の露色ことごとくにおけばこそ」の條を参照。

大意 若しこの梅の香が、花の色のやうに降り置いてある雪に紛ひもするならば、誰れが雪と梅の花とをよく別々に見分けて折らうぞ、折る者は無からうぞ。

【評】雪は梅花と一様に白くて、缺く所は只その清香のみである。流石に梅が香は雪に紛れない。それを逆寫して若し紛れたら折るにも折られまいと心配らしく首を捻つたのは、詰り梅雪相紛ふ趣を、婉曲にやゝ誇張して合點させたものである。春上、

月夜にはそれとも見えず梅のはな香をたづねてぞしるべかりける

これも月色の白さを借り來つて、梅花の清香を讃歎したので、色と香と暗に映對してゐる。

六帖に、三四の句うつりせば誰かはものをとあるは、しかと聞き取り難い。

雪の降りけるを見てよめる

紀 友 則

雪ふれば木毎に花ぞ咲きにけるいづれを梅とわきて折らまし

大意 雪が降れば、木それごとくに、白い花がサ、思ひよらず咲いたわい、これでは、どれを梅と見分けて折らうぞ。

【評】雪が梢に點すると、林は盡く花となる。さてそれが梅花に紛ふを誇張して、折り煩ふとまでいつた。六帖に、いづれをかわきてをらまし梅の花枝もとをゝにふれるしら雪

と同想同調で、餘り珍しくもない。新撰萬葉に、

冬くれば梅に雪こそ降りまがへいづれの枝を花とまをさむ

は等類ながら、聊か情致があるやうだ。さて「木毎に」の一語、殊更めて聞える。必ず梅の字を拆いて詠み入れたものらしい。

物へまかりける人を待ちて、師走の晦によめる

み つ ね

わがまたぬ年は來ぬれど冬草のかれにし人はおとづれもせず

【釋】○物へまかりける人云々 「物」は何と限らぬ場合にいふ語で、こゝは餘所へ行つた人の意。「師走」は、年竟、また未果つの轉語で、年の果ての十二月の異名。「つごもり」は、月隱の略で、狹義には晦日の一日に限られ、廣

義には月の廿日過ぎより晦日までを稱する。こゝは前者の意。○かれにし 冬草の枯れにしと、人の離れにしとをかけた。人の離るとは人の寄り付かぬをいふ。

大意 自分が待ちもせぬ新しい年は近く来たが、それとは引き換へ、この節の草の枯れたやうに、離れぬになつて餘所へ行つた人は、歸つて來るところか、音信さへもせぬわ。

評 待ちに待つてゐるうちに年もおし詰つた趣で、しかも「年は來ぬれど」とまであるから、晦は狹義に解した方が、事情がしつくり合ふ。物へ往つた人は誰れか、昔の人は朋友間でもこんな調子の事をいふから、断定は出來ないが、まづ親類附合の女と見てよからう。待たねど來る年と、待てど來ぬ人とを對照させた歌だが、餘りに貼き過ぎる心地がする。初句は下句に反映させる爲だらうが、少しひ過ぎてゐる。新玉のなどと置けば、やゝ大らかで宜からうにと一旦は思つたが、さてこの歌は又そこが山で、「年は來ぬれど」の擬人も、「わが待たぬ」とあるので生きてくる。そしてこの擬人は、「かれにし人云々」を引き出す所縁となつてゐる。「冬草の」は「離れにし」の序ながら、時節の物を應用したので、自然に心細けなけしきが浮かんでくる。「音づれもせず」は來ぬの轉義である。渾べて五分もすかさぬ纖巧さが見える。

年のはてによめる

在原元方

あらたまの年のをはりになる毎に雪もわが身もふり増りつゝ、

釋 ○あらたまの 年の枕詞。○年のをはり 年の果て。○ふり増りつゝ、 身の舊りまさるに、雪の降り増るを寄せた。

大意 年の終りになる度毎に、雪も降り増り／＼するが、自分の身も舊さか増り／＼してサ、次第に年寄つて行くは、あゝ情けない事よ。

評 作者老境の作と見える。眞淵は、古體でいとめでたいといつたが、承知が出來ない。小倉百首の、花誘ふあらしの庭の雪ならでふり行く物は我が身なりけり（公經）

の藍本で、「ふり」の語に縁つて巧んだ秀句に過ぎない。これがこの人の作風である。三句、六帖になる時はとある。

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

よみ人しらず

雪ふりて年の暮れぬる時にこそつひにもみぢぬ松も見えけれ

釋 ○もみぢぬ 赤く色付かない。「もみぢ」は動詞に用ひてある。

大意 他の時にはわからぬが、雪も降つて年の限りになつた時にこそ、さてはとう／＼露時雨は勿論、何が降つても色の變らぬ松だといふ事も知れたわい。

評 他の草木の、雪はおろか時雨にも霜にも、容易く秋の頃から紅葉するのに對へた。論語の「歲寒然後知松柏之後凋」の意を本據としたので、見るべきは只その翻譯の精妙な點にある。「つひに」の一語眼目で、松の地歩はこれに依つて占められてゐる。舌音勝で、聲調が沈んで強い。

二句、寛平歌合、新撰萬葉に暮れ行く、四句、新撰萬葉につひに縁のとある。六帖は本文と同じ。

年のはてによめる

はるみちのつらき

昨日といひけふと暮らしてあすか川流れて早き月日なりけり

釋 ○あすか川 大和國高市郡飛鳥川。明日をいひかけた。

大意 過ぎ去つた日を昨日といひ、さし當つた日を今日といひて暮らして、すぐ明日を迎へるといふやうに、何の間も無いうちに早もう年の暮になつたを、どうした事ぞと思つて見れば、明日香川の水の早く流れて行くやうに、早く經つた月日であつたわい。

評 「昨日」「今日」の縁語で、明日といふ響ある「飛鳥川」を取り出して漸層法を用ひたのは、いかにも一年の月日の、猶豫なく迅速に暮れてゆく概念を與へる。川の縁語で、過ぎて早きといふ所を、「流れて早き」と轉義した。二句は、けふといひて暮しての意なのを、初句の「いひ」に譲つて略いた。作者は流石に漢學者の事として、おなじ歳暮の感懷を賦するにも、歲月如流の句意を骨子として、これに潤飾敷演の皮肉を加へた。詞は流麗で、聲調健やかである。
二句、六帖にけふといひつゝとある。

「歌奉れ」と仰せられし時によみて奉りける

きのつらゆき

行く年のをしくもあるかな増鏡見る影さへに暮れぬと思へば

釋 ○増鏡 眞澄鏡の略。よく清みて光の明らかな鏡をいふ。

大意 とかく暮れて行く年が惜しい事ではあるよ、鏡で見る自分の影までが、年と同じやうに老い暮れたと思ふによつてサ。

評 唐詩に「霜髮明朝又一年」などいつた趣を詠んだものか。明鏡の裡、形影自ら相憐んで老の迫るを歎き、年の逝くを慨く。誰れも思ひ當る感懷である。老いを轉義して、「影さへ暮れぬ」といつたのは、年の縁語に依つて理りを合はせたのである。

古今和歌集卷第七

賀歌

題しらず

よみ人しらず

わが君は千代に八千代にさゝれ石のいはほとなりて苔の蒸すまで

釋 ○こゝに賀歌とあるは、皆算賀の歌である。算は年齢の謂で、四十歳を初老として、十年毎にこれを行ふ。もと支那の習慣だが、奈良時代には、既にわが邦に行はれて、東大寺要録に、僧良辨等が聖武天皇の四十の御齡を祝した事が見え、猶二三の書にも、算賀の事が載せてある。平安朝になつては、殆ど數へるに違がない。皆長壽者の子弟等が、自ら親戚故舊を會して宴を張るのである。されば、かの天皇の大御世の萬歳を祝する歌は、この部中には無い。そのあるのは後撰集以後の事である。○わが君は「君」は一人稱の代名詞で、天子の事でない。○八千代に 八千代にましませを略いた。八千代は八千年の義だが、茲の八千は只多數を意味するまである。○さゝれ石 細石。小をさといひ、打ち重ねてはさといふ。即ちさやく、さらく、さぶ波の類である。それら或はれの接尾語を添へて、さくら、さくれ石などいふ。一轉しては、さくれとばかりで小石の事ともなつた。○いはほ 石秀の義で、大きな岩。○苔の蒸す 「蒸す」は生すで、高皇產靈神の御名の産

に同じい。

大意 私頼み奉る君は、千年も萬年もお繁昌で、お出で遊ばされて下されませ。いやそれではまた飽かぬ、あの小さな石が大きな巖ほとなつて、またそれに昔の生えるまでお出でなされませ。

評 山厲河帶の語もあるやうに、巖石は缺けて小石とこそなれ、小石が長じて巖石となるのは事實ない事だが、昔は和漢を通じてさう思つて居たのだから仕方がない。この時代思想の立場からこの歌を見ると、「さ々れ石」の小と、「いはほ」の大とを對照させて、その變化の時間の無窮なる趣を現はしたので、既に賀意は完全してゐるのを、それでもまだ不足として、さ々れ石の巖となるにはまるで比較にもならぬ「昔の蒸すまで」を歌ひ添へて、少しも餘計にと今一層の時間を持たせた漸層法は、この種の想を叙述するに尤も適當の表現で、その賀意の親切さがつくづくと感ぜられる。二句も、「千代に八千代に」と同調を反復した漸層法で、下句に應じた。六帖、道濟十體、新撰和歌、奥儀抄、顯本等には千代にましませとあつて、表面の意義は完全するが、調がいたく後れて、永遠な意味と、その概念とを記得させる力が、頗る薄弱である。無論本文の方が勝つてゐる。抽象的に限りなき齡といふ所を轉義して、「千代に八千代に」と數量の語に易へたのも面白い。初句の「わが君」は、我が大君、我妹子、あが佛などいふ類で、親しんで呼びかけた趣が見えて、その行末の長久を祈るのも尤もと點頭される。辭様も、構想も面白く、格調も高古莊重なので、唯一の祝歌として、古來から吟誦されてゐるけれども、その音節の凄凉なのが聊か口惜しい。蓋し一首のうち、イ列音十、オ列音七あつて、その過半数は、商徴の音から成立した爲だらう。洋々たる暢諧快活の音節こそ、祝歌の性質として必要と思ふ。初句、朗詠集に君が世はとある。これは事がひろいから、今日國歌として用ひられた。

わたつみの濱のまさごを數へつゝ君が千年のありかずにせむ

釋 ○まさご 眞砂子、或は眞砂子の約。萬葉集には、まなごともある。細い砂をいふ。「ま」は美稱。○ありかす 存在の數。數取と解いた説もあるが妥當ではない。

大意 海の濱の砂の、限りも無い數を數へて、それを、君の御長壽でお經なされる數にしようと思ひます。

評 萬葉集卷四に、

八百日ゆく濱のまなごもあが戀にあにまさらじか沖つ鳥守

に著想は類似してゐる。但、君が千年にせよ、あが戀にせよ、何にまれ、無量數の譬喩に砂を用ひる事は、佛教の影響である事を忘れてはならぬ。それは佛經中に無數恒河沙の語、數多散見して、當時の人士が朝夕の勤行に、誦を成したと思はれるからである。「千年」は窮りない齡の意を轉義したのであることは、上の歌に同じい。

四句、顯本に君がいのちのとある。

しほの山さしでの磯にすむ千鳥君がみ代をばやちよとぞ鳴く

釋 ○しほの山さしでの磯 「しほの山」は顯註に、能因が歌枕を引いて、甲斐國に在りとある。今同國甲府から東

北三里許、笛吹川に沿つて、小邱あるあたりをさし出といひ、それより二里許、北方にある山を鹽山モリヤマといつて
る。しほの山さし出の磯はこれだと稱してゐる。然しさし出の磯はさし出た磯崎の義だから、何處でもいは
れる語である。契沖いふ、「平家物語に、しほの山打越えて、能登の國小田中親王の塚の前に陣を取る。又能登越
中の境なる志保の山と見えたるその志保の山にて、さし出の磯もそのあたりならん」と。又真淵はいふ、「延喜式
に、能登國羽咋郡に、之乎神社あり。萬葉集に、赴參氣比大神宮二行海邊之時作歌とて、之乎路可良多太古
要久禮婆エウレバとあり。之乎シホを後にし、ほと誤り、それよりさし出の磯とは設けてよめるか」と。○千鳥 多く河海の
上に群つて鳴く水禽。鴨に類し、鶺鴒に似て小い。種類多く、その羽色にも種々ある。

大意 　しほの山さし出の磯に鳴く千鳥でさへ、貴方の御世をば、八ちよ／＼とサ鳴きますわい。

評 　前にもいつた如く、智部は皆祝壽の歌だから、「君が御代」といつても、大御世の謂ではない。初二句、たゞ
在りにいひ續けたものながら、汐のさし來る磯邊に、千鳥の鳴き立つ景致が思はれる。その千鳥の鳴聲のちよ
ちよと聞えたので、彌の語を冠せて、八千代と秀句に取り成した。「代」といふ語を折り返したのが、三句、結
句の「鳴く」の重疊と相關聯して、節奏の諧ふを見る。まづは古調中の手ある歌だらう。

四句、顯本に君がみちよをとある。定家の密勅にも異論がない。六帖、伊勢集には君が齡をとある。君が御代
をばは崇徳院御本である由、顯註に出てる。景樹が折衷して、君が千代をばと改めたのは私である。二句、
顯本になく千鳥とある。真淵いふ「下にも鳴くとあるはその理をいふにて、古歌のいひなしなり。後世、同語
の重複を嫌けむとて、さかしらにすむと改めしならむ」と。景樹もこれに従つた。伊勢集にはるる千鳥とあ
る。

○

わがよはひ君が八千代にとりそへてとゞめおきてば思出オモヒデにせよ

釋 　○よはひ 　齡。○とりそへて 　添へて。「とり」は接頭語。○おきてば 　置いたならばの意。春上「梅が香を
袖に移してとゞめてば」とあるに同じい。○思出に 　思ひ出し種タネに。

大意 　自分のこの長命な齡を、貴君に進げようと思ふから、これからは貴君の八千代の齡のうへに、この自分の
齡をも取り添へて、お手許に留めて置いたならば、それを幾千年も長生をされた後に、自分の事を思ひ出す種
にして下され。

評 　七八十の老人が、同年輩か、或は年下の友人の年賀を祝つて贈つたものだらう。されば、我が壽を譲るから
思ひ出にせよなど打ち解け事もいはれるのである。まるで不可能な事を、出来るものゝやうに取り成して、空中
に樓閣を現じたものである。契沖が「君より臣下に賀を賜へるに、同じくはこの久しき齡を、君がもとよりの八
千代の上に取り添へて留め置きて、わが思ひ出にせむと詠めるか。せよとはみづから下知するなり」といひ、
景樹が「とゞめおきてば」を、とゞめたればと既に解したのは皆わるい。

顯本に、結句おもひでにせむとあるは調はない。

仁和の御時、僧正遍昭に、七十の賀給ひける時の御歌

かくしつゝ、とにもかくにも長らへて君が八千代にあふ由もがな

○仁和の御時云々 三代實錄に「仁和元年十二月十八日戊辰、延正僧正法印大和尚位遍昭於仁壽殿、申曲宴、今年始滿七十、天皇慶賀徹夜談賞、太政大臣等預席焉」とある。その時の事である。眞淵は「今本に御歌とあり。古本、御の字なし。延五記にもなし。歌の體必ず御製にあらず。遍昭の詠めるならむ」といつたが、御の字の有無はとにかく、遍昭がみづから詠んだ歌の詞書の體でない。○かくしつ、かくは天皇と遍昭との御中の親密なのを指す。宣長が、今度の賀宴を指すと解いたのは當らない。○もがな「も」は歎辭。「がな」は願望の助辭。

大意 かう互に親しく交らひながら、どうしてなりともかうしてなりとも、朕も存命で居て、その許の八千歳の折にまで、どうぞ逢ふ手段があつてほしい事よ。

評 遍昭を必ず千歳も長生するものと定めて、羨ましさに、及びもない業ながら、その行末までも追従したいといふに、一方ならぬ祝賀の大御心が窺へる。一面遍昭が八千代の暁は、即ち御自身も殆ど八千代になる譯で、表面遍昭を祝ひ、傍ら自身をも祝つて、わが地歩を占られた中に、御交情の親密さが漲る。抑も光孝帝が、遍昭を歸依崇重された事は格別だつたので、みづから弟子の禮を執つて宮中で賀宴を催され、御歌をも下されたのである。

仁和の御門のみこにおはしましける時に、御をばの八十の賀に、しろかねを杖に作りけるを見て、かの御をばにかはりてよめる

僧 正 遍 昭

千早ぶる神のきりけむつくからに千年の坂も越えぬべらなり

釋 ○仁和の御門云々 光孝天皇が、まだ時康親王といつて居られた時に、御母贈皇太后藤原澤子（贈太政大臣、總繼の長女）の御姉妹いつれかの八十歳の壽筵に、銀を壽杖に作つて獻つたのを、遍昭が拜見して、その姨に代つて詠んだ歌との意。案ずるにこの「御をば」を澤子の妹とすれば、藤原長良の室、照宣公基經の母だらうが、八十賀では年配が當らない。依つて澤子の姉と斷ずる。宣長は「をばはおばの假字なるべし」といつた。おばは祖母である。光孝帝御祖母は、嵯峨帝の皇后橘嘉智子であらせられるから、時代が全く合はない。○千早ぶる 秋下「千早ぶる神なひ山の」の條に既出。○きりけむ 杖は多く竹木を用ひるから、杖に作るを切るといふ。○つくからに 杖を衝くにつけて。○坂も 坂さへもの意。景樹が「坂に榮ゆるを寄せたり」と解したのは牽強である。

大意 親王様から下されたこのお杖は、一通りの物とは見えぬ、大かた神様のお作りなされた杖だらう、いかにもこの杖を衝くにつけては、越え難い千年の坂さへも越えられさうだわい。

評 杖といふ言を實物に譲つて廻護してゐる。杖は坂路には殊に必要品だから、在經（アリエノカミ）難い千年を越え難い坂路に混喩して、千年の坂もこの杖ならば、「越えぬべらなり」と讚稱して、「神の切りけむ」とある前提に應ぜしめた。その神の爲業に託したのは、拾遺集に、

あふ坂をけさこえくれば山人の千とせつけとてきれる杖なり

すめ神のみやまの杖に山人の千年をいのりきれる御杖ぞ

の、山人の所業に託したのと同じく、その結構さの人間を超越して、頗る立派な事を稱揚する手段である。かう口を極めて貰ひ物を褒めそやすのは、即ちその贈主の厚意を感謝する結果になる。つまりかの射人先射馬

の筆法である。詩想婉曲で、狂痴の意をさへも寓したのは、例のこの僧正の特色。二句、六帖、家集、顯本等に神やきりけむとある。註家多くこれに據つたが、眞淵は本文を執した。成るべく治定した方が、狂痴の意を増して面白いから、「神の」がよい。

堀川のおほいまうち君の四十の賀、九條の家にてしける
在原業平朝臣
時によめる

櫻花ちりかひくもれおいらくの來むといふなる路まがふかに

釋 ○堀川のおほいまうち君云々 藤原基經公の邸は、京の二條堀河にあつたので、世に堀河の太政大臣と稱した。この公の四十歳の壽筵を、別第の九條の家に行はれた時、業平の詠んだので、賀は貞觀十七年の春の事である。○ちりかひくもれ 散り交ひて曇れ。○おいらく 老ゆらくの轉語。老ゆらくは、おゆるの延言である。しかしこの語は、老と同じ意の名詞として用ひられる。
大意 老といふ奴めが、來ようといふ沙汰のある路の、紛れて知れぬかのやうに、これ櫻の花よ、澤山散り交つて、そこらが闇く曇るやうにして呉れい。

評 さらば老奴も定めて踏み迷つて來得まいがの餘意がある。四十を老の山口とする事は、元來支那の典故に據つたことでもあるし、又老のくるといふのも、空想的な話説でもあるから、「來むといふなる」と人言に取り成した。折柄の賀宴に、櫻花の爛漫たるのを見て、常ならば一片も散るなと惜むべき花をも犠牲にして、今日ばかりは路も見えぬまで散れと命令した狂痴の想は、流石に業平である。かくて隱約の間に、この公の老を傷は

しがつて居る氣持が動いてゐる。「老らく」の擬人は珍しくもないが、この歌では大事な中樞となつてゐる。

貞辰のみこのをばのよそぢの賀を、大堰にてしける日よ
める
きのこれをか

龜のをの山のいはねをとめておつる瀧のしら玉千代の數かも

釋 ○貞辰のみこのをば 「貞辰親王」は清和天皇第七の皇子で、母は藤原基經の女佳珠子の女御である。故に「をば」はこの姉君で、これも清和の女御だつた頼子と斷ずる。「大堰」は山城國嵯峨の大堰の里である。其處に、この姉君の別荘でもあつたのだらう。○龜のをの山 龜の尾山、又龜山ともいふ。山城國葛野郡で、嵯峨の天龍寺の後の山。龜の甲の形した山なのでいふ。「尾」は借字で岑の義。字面に拘泥して龜の尾を引いた形と説くは穩かでない。前中書王の菟裘賦には「吾將入龜緒之巖隈、歸菟裘而去來」と作り、自註に「龜緒、使龜山也、猶如龜尾之讀、故云」と見えた。○いはね 岩根。「根」はこゝでは軽い添辭。○とめて 尋ね求めて。○瀧のしら玉 瀧の水の岩に碎け散るのが玉の如く見えるのを、直に瀧の白玉と譬へた。「瀧」は垂水即ち瀑布ではなく、激湍である。○千代 直譯では千年の意だがこゝは長壽の意に轉義してゐる。○かも かなと同じ歎辭とするは粗い。「か」は疑辭。「も」は歎辭だから、カマアと譯する。

大意 あめめたい龜の名に呼ぶ龜の尾山の、岩根を傳はつて流れ落ちる瀧水の白玉の多い數は、貴女の御長壽の數であるかま。

評 龜鶴を長壽の物とする事は、もと支那にはじまつた。即ち鶴は藐姑射の山に住んで仙人の伴侶とされ、龜の

經あがつたと稱する白龜、綠毛龜の類は、神物として太平の祥瑞と目された。さればこれに擬へて言ほぎかはす事も、既に久しい習慣であつた。今は大堰の里に開いた賀筵なので、さし詰め其處の萬年も生きるといふ龜山を思ひ寄せ、巖も亦動きなき常磐の物なので、その龜山のその岩根をとり並べて、下旬に、「千代の數」といひ出す襯染とした。激湍の飛沫、玉を跳らすその數は、とても數へ盡されないから、その人の齡の數に擬へるには全く適切だ。無窮を轉義して、「千代」と換へて呼ぶことは例の辭様である。さて龜の尾山の瀧は何處か。想ふに、大堰川の龜山に沿つた激湍だらう。

貞保のみこの、きさいの宮の五十の賀奉りける御屏風に、
櫻の花のちるしたに、人の花見るかたかけるをよめる

藤原興風

いたづらに過ぐる月日はおもほえて花見てくらす春ぞ少なき

釋 ○貞保のみこ云々 「貞保親王」は清和天皇第五の皇子。「きさいの宮」は貞保親王の母后で、二條后藤原高子である。「五十の賀奉りける」は五十の御賀を執り行ひ申し上げたことをいふ。「御屏風」は御賀宴の時に立てるので、總べて賀に限らず事ある時は、主人公の背後に屏風を立てるのが、昔の習慣であつた。「櫻の花の散る下に人の花見る」はその屏風の繪様である。「見る」諸本見たるとある。○いたづらに 徒に。むだに。○おもほえて 思はれずしての約轉。

大意 何の事もなしに過ぎて行く月日は、何とも思はれないでうか／＼暮らす、このやうに面白い花を見て暮

らす春はサ、ひどく日数が少ないわ。

評 それ故つく／＼惜しいの餘意がある。作者は屏風の畫中の人物の心になつて詠んだ。「花見て暮らす」と形容したので、いかにも長閑やかに娛しけな春の趣と見え、いと過ぎ去るのが惜しい心地がされる。多ければ宜からうと思ふ春は却つて少ないと打ち侘びたのに、人事の實相が暴露されたやうな氣がする。句題和歌、新勅選集に、大江千里、

年月にまさるものなしとおもへばや春しも常にすくなからむ

これは「歳時春日少」といふ題の歌である。この種の想は當時既に類型が多い。誰れも思ひ寄る口頭語だが、尤も適當な叙述で先鞭をつけただけえらい。抑も屏風の歌は、その圖様に本づいて詠むは例の事で、賀の屏風だからとて、あながち祝賀の意にのみ拘泥しない。さればとて場合が場合だから、陰氣な事や不祥な事を描いたり詠んだりする譯もない。

三句、朗詠集におほけれどとあるは、率易で味ひがない。

本康のみこの七十の賀のうしろの屏風に、詠みて書きけ
る きのつらゆき

春くればやどにまづさく梅のはな君が千年のかざしとぞ見る

釋 ○本康のみこ 「本康親王」は仁明天皇第五の皇子で、八條の宮と號する。一品式部卿となり、延喜元年薨せられた。「うしろの屏風」とは、賀筵に親王の御座の後に建てる屏風。「詠みて書きける」は、貫之は歌書兩道の

名手なので、仰を承けて歌も皆自分で遣つた。○かざし 髪挿の義。今いふ簪はこの轉じた語。遊宴の折節に、冠の中子の根に、時の花や造花を挿すことが、奈良平安時代を通じての風俗であつた。○見る 思ふといふに近い。

大意 春が來ると、この庭にまつ一番に咲く梅の花を、君が御長壽の春のお髪挿とサ存じますわ。

評 詞書には見えないが、これも人の家に花の咲いた繪様の屏風で、その畫中の人物になつて、親王の御壽を賀いだのだらう。「まつさく」が「千年のかざし」に對して、時間上の反映となつてゐる。花を髪挿すのは即ち樂いすさび業だから、折に合つた見立である。

素性法師

いにしへにありきあらずは知らねども千年のためし君に始めむ

釋 ○ありきあらずは ありきあざりきはといふべきを、上のをめぐらして、下の過去のきを略いた。○ためし 迹形。手本である。普通には例の字を書くが、よくは當らない。

大意 千年も生きた人は、昔にあつたか無かつたかは知らぬけれども、假令今まではそんな人の無いにもせよ、千年生きるためしは、君から始めませうよ。

評 「知らねども」と一旦撥ねておいて、「君に始めむ」と一途に思ひ入つた處に、高い狂熱が見えて面白い。二句の疊語、一正一反聲調がよろしい。

これ及び次の歌は、題畫の歌ではない。單に祝壽の意を述べたものだ。上の詞書に、「よみて書きける」とある

から、貫之のと同じく、これも素性の書いたのだらう。延喜六年二月十六日、襲芳舎に召されて御屏風を書き、同九年十月二日、又召されて御前で屏風を書き、左中將源定方をして、酒及び祿を被けられた事が、物に見えるから、素性は貫之にも劣らぬ書道の名手と見えた。

初句、六帖にいにしへもとあるはわるい。

○

ふして思ひおきて數ふる萬代は神ぞしるらむわが君のため

釋 ○ふして思ひおきて數ふる 臥して萬代を思ひ、起きて萬代を數ふる意。○萬代 萬年。○神ぞしるらむ 神こそ知食して守り給はめの意。「しる」は只知るのではない。計らひ行ふをいふ。

大意 私が君の御爲に、寐でも起きても御年の數を、何卒萬年までもと指折り數へて願ひます事は、人の力にこそ及ばずとも、神がサこの心を御承知下されて、願の通りにお取り計らひなされる事だらうと思ふ。

評 初二句、起臥に萬代を思ひ數ふるといふべきを、切り離して對句を作つた。「臥して」「起きて」とあるに、平素不斷の意がある。景樹が「本來、わが君の爲ふして思ひ、おきて數ふると續くべきを、調に任せて『わが君の爲』を結句に置けるより、君の爲に神ぞしるらむの意を倒裝したる語勢となりて、『君の爲』の詞、全く神の方にのみ重く係りて、君の爲に起臥願ふの意は、却て疎くなれり。それも立ち離れたる心ならねば、さる方にかくも調べおろせるなり」と評したのは、尤もと思はれる。

三句、家集によろづ代をとある。

藤原三善が六十の賀によみける

在原滋春

鶴龜もちとせののちはしらなくにあかぬ心にまかせはてむ

この歌はある人「在原の時春が」ともいふ。

○藤原三善 この人の傳不明。○しらなくに 知らぬによつて。「なく」はぬの延言。

大意 昔から人の長生の祝言に例へていふ鶴も龜も、共に長生するものとは聞き及んでは居るが、それも千年も経つた曉は、どうあるやら知らぬによつて、そんな例など引く事は止めて、貴公が何時まで居ても飽き足らず思ふ私の心のまゝに、君の御壽命を任せてしまひませう。

評 それが一番いゝの餘意がある。三句「知らなくに」と撥ねて調べ下した具合、上の「千歳のためし君にはじめむ」と同型である。拾遺集に、

萬代もなほこそあかね君がためおもふ心のかぎりなければ

貫之集に、

百とせといはふを我は聞きながら思ふが爲はあかずぞありける

とあるは、同想ながらこれに比べると狂熱が缺けてゐる。この歌の優れる所以は全く茲にある。

左註に就いて契沖は、「この歌滋春、時春の異を傳へたるに、當時二人とも亡き人にて隨に記せる物もなければ、多分に就きて滋春と載すれども、異説を捨てぬ心にて、註せるにやあらむ」と考へた。

よしみねのつねなりが、四十の賀に、むすめにかはりてよ

める

そせい法師

萬代をまつにぞ君をいはひつる千年の蔭にすまむとおもへば

釋 ○よしみねのつねなり 良岑經世か。「世を也」と誤れるならむと眞淵はいつた。三代實錄に「貞觀十七年五月十九日庚子、從四位下行丹波守良岑朝臣經世卒」とある。その經世の四十賀に、娘に代つて素性が詠んだのである。「よめる」は一本に據つた。原本によみ侍りけるとあるが、この集の書式に協はない。○まつにぞ 待つに松をかけた。○いはひつる 「いはひ」はもと齋の義だつたのを、この頃は既に祝賀の意に用ひた。「つる」は現在完了の助動辭で、鶴を寄せた。○蔭 松の蔭に、父のお庇蔭を寄せた。

大意 私に父君の萬年の御壽命を待ちますから、そのまつといふ名の松に寄せてサ、お祝ひ申しますわ、丁度千年もいきる松の蔭に鶴の住むやうに、私も父君の變らぬお蔭を蒙つて、共に長く居ませうと存じますればサ。

評 祝宴や興宴に、洲濱臺を作つて捧げるのは、この時代の習慣であつた。年賀だからこれはおめでたい造物を洲濱に据ゑたので、松の蔭に鶴の立つて居る型を、金銀か何かで作つたと見える。松を父に、自分を鶴に擬へて、さて松の樹齡の千年は勿論の事だから、この上の萬年を待つといはひ、その理由としては、松蔭に立つ鶴のやうに、その變らぬお蔭を常に蒙りたいからといふ。「千年」は變らぬ、又は常磐の意の轉義である。松と鶴とのいひかけは、小細工過ぎて卑しげだが、親子の情から見ると、さうもあらうかと思はれる。或は經世の娘はまだ年端のいかないので、小娘らしくと構へて詠んだのかも知れない。素性の他作に似ない。素性は良岑氏だから、近い親戚關係で、この代作を頼まれたらしい。

上句、六帖に萬代の松にぞ年をいのりつるとあつて、貫之の歌とした。眞淵は貫之の歌さまにあらざといつた。なほ案すると、經世の四十賀をひき下けて、その歿年近くに行はれたものと見ても、貫之はその頃やうく十歳以下の童兒だから、こんな歌を詠む筈がない。

内侍のかみの、右大將藤原朝臣の四十の賀しける時に、

四季の繪かけるうしろの屏風に、書きたりける歌

春

春日野にわか菜摘みつゝ萬代をいはふこゝろは神ぞしるらむ

○内侍のかみ云々 「内侍のかみ」は尙侍。こゝのは贈太政大臣藤原高藤の二女満子をいふ。(拾遺集に三條内「右大將藤原朝臣」は、高藤の三男定國の事で、泉大將と稱し、尙侍の兄に當る。躬恒集に「延喜五年二月十日、宣旨によりて奉れる和泉大將、四十賀の料、屏風四帖、内よりはじめて内侍督殿にたまふ歌」と詞書があつて、次の「山高み」の歌「すみの江の」の歌が出てゐる。貫之集にも「延喜五年二月、いづみの大將、四十賀、屏風の歌、仰言にてこれを奉る」とあつて、次の「しらゆきの」の歌が出てゐる。四季の繪かける屏風は、躬恒集に屏風四帖とあるから、春夏秋冬の繪を一帖宛にかいて、それに人々の歌を書かせたので、専ら醍醐帝の思召で出來た屏風である。さてこゝの歌ども、普通本には作者がない。又春の部だけ端に春の字が題してない。眞淵の説に「此度の歌七首に、今は作者を記さぬにつきて、この上の歌素性なれば、次々も皆素性の歌なりと思へるは誤なり。六帖、家集等に、各作者見えたり。その上、藤原家隆卿自筆のこの部を見しに、各名あり。さてこの歌は素性なり」とある依つて、この端書には「春」の字を補ひ、以下の歌には、作者の名を一々填めた。○しるらむ 上の「ふし

て思ひ」の條參看。

大意 御賀の爲にかう春日野で、私が若いといふ名の若菜を摘み／＼して、兄君の御壽命の長久をお祝ひ申す心願の程は、御先祖の春日の御神がサ、承知し御納受なさるだらう。

繪様は若菜摘の所と見える。そこで奈良時代からの若菜の名所、春日野を思ひ寄せ、その野の春日明神は藤原氏の祖神なので、それをも撮合して、せめても君が老の若えるやうにと、名におへる若菜を摘むこの心は、わが祖神が御承知だらうと、尙侍自身が畫中の人になつて、祝つた趣に取り成したのが趣向である。上に、ふしておもひ起きて數ふるよろづ代は神ぞしるらむわが君のためと落想は同じい。いづれも素性のである。

四句、大和物語、新撰和歌、家集、六帖等にいのる心はとある。

躬 恒

山たかみ雲るに見ゆるさくららばな心のゆきてをらぬ日ぞなき

○雲る 空をいふ。○心のゆきて 心の往くに、満足の意を寄せた。○をらぬ 折らぬ。

大意 山が高く、空に見える櫻の花を、自身はとも往かれぬが、一枝ほしいと思ふ心ばかりが、其處まで往つて、その櫻の枝を折らぬ日はサないわ。

霞の上に表れた山の頂などに、櫻を畫いたのだらう。心の往くの擬人から、「春毎に心をしむる花の枝に」な

どのやうに、「心の往きて染まぬ日ぞなき」といふべき所を、「花」の縁語で、「折らぬ」と轉義した。
六帖、躬恒集、家隆本によつて、躬恒の名を補ふ。

夏

友

則

めづらしきこゑならなくに時鳥こゝらの年をあかずもあるかな

釋 ○こゝら 許多、澤山などの意。

大意 何時の年も同じ聲で鳴けば、何も珍しい聲では無いのに、あの時鳥は數多の年々を、さてもく聞き飽かない事であるよなあ。

評 幼く詠んだつもりだらうが、感哀が淺い。

六帖、友則集、家隆本によつて、友則の名を補ふ。

秋

躬

恒

すみの江の松を秋風ふくからにこゑうちそふるおきつしら波

釋 ○すみの江 攝津國住吉郡。今の住吉神社のある所。古事記仁德天皇の條に「又定墨江之津」と見え、萬葉集には、住吉、墨吉、墨之江、須美乃延など書き、奈良時代までは、必ずすみのえとのみいつた。この集中に「住、み、よしとあまは告ぐとも云々」、又、和名抄に「攝津國住吉、須二與之郡」などあるので見ると、既に延喜前から、文字について唱へ謬つてきた事が知られる。古くは吉、愛通用して、皆エと訓ませてる。○ふくからに

秋下「ふくからに秋の草木の」の條參看。○うちそふる「うち」は添詞。○おきつしら波 沖の白浪。「つ」は連辭。

大意 住の江の松を、秋風がうち吹くにつけて、どうくと聲を打ち添へる、沖の白浪である事よ。

釋 住吉の地は甚い滄桑の變に遇つた。それは住吉社頭の松原は、その根を洗つて波の寄せるやうに、古歌古文には見えてゐるが、今は海岸を距る事、約二十餘町の西にある。蓋し木津川、大和川の土砂が堆積して、遂に陸地を作つたのである。さればその當時の實境を想像して、この歌の詩趣を辿らなければならぬ。和泉の灘より難波津をかけて、長汀極浦相參差し、住吉の濱を中心として、白砂青松相映じてゐた。海は即ち茅渟の海、右に由良の險灘があり、淡路島を前に控へ、左に播磨諸州の山を望む。烟波はるくとして一望窮りない。この時に當り、天風吹き落ちて颯と梢を拂ふと、一帶の長松はどうくとして、大濤の湧くにも似た響にうち合はせて、寄せくる沖の白波が、鳴高に聲打ち添へる光景は、言語に絶した趣である。しかも「沖つ白波」の立つのは、即ち松ふく秋風の所爲だから、風の趣が一首の上にも活躍し、翠松と白波との配合も鮮やかで目覚ましい。眞に有聲の畫、否畫境は既に渾脱して、神品に入つたものだ。古來、餘情限り無き歌と稱せられ、眞淵は「所のさまに就きて面白きなり。かく其の所のさまを思ひ得て、心はあるがまゝに詠むぞ古歌なる」と評した。後世、この風調を冀ひて「聲打ち添ふる」の語を踏襲し、或はこの詩趣を模倣して詠んだのが夥しい中に、壬生忠見が、秋風の關ふきこゆるたびごとに聲うち添ふる須磨の浦波
の作もあれど、最も勝れたものは大納言經信の、
沖つ風ふきにけらしな住よしの松のしづ枝をあらふしら波

で、躬恒に比べて、契沖は、及ばないといひ、眞淵は、大して劣らないといつてゐる。十訓抄には、かの卿經信後に、俊頼朝臣經信の子息を呼びていはれるは「古今に入れる躬恒が歌に『住吉の松を秋風吹くからに聲うちそふるおきつしら波』この歌、任大臣の大饗せむ日、わが所詠の沖津風の歌、中門の内に入りて、史生の饗に就きなむや」と。俊頼いはく、「この仰いか。彼の御歌全く劣るべからず。然れども古今の歌たるによりて、限り有りて、先任大臣候はむに、御作は一の大納言にて、尊者として南階よりねり上りて、對座に居なむとこそ存じ候へ」といふ。「さてはさもありなむや、いかあるべき」とて感氣ありけり。又自讃していはく「躬恒が家集に歌多かる中にも、『松を秋風』の歌のたけ、品は、年丈けたる胡人の、錦の帽子したるが、尺八・琵琶を鳴らし、紫檀の脇息おさへて詩を案じ、嘯きて眺望したる姿なり。此の人に對ひてあひしらひつべきは、わが沖津風の歌にこそあれ」といはれけり。

と見えて、經信自身も、俊頼も、甲乙なきやうに思はれた。袋草子には、經信の語がや、かはつて、この歌の躬恒のをさす七間四面の寢殿の南面に、御簾所々破れたる中に、何宮など申して御座しまさむに參じて、中門の廊より入りて、寢殿の階の間に參りて給言談一事はわが歌なり。

とある。これは兩者の間におのづから軒輊ある趣で、及ばぬ事を自覺されてゐるやうだ。又景樹が「住吉は岸打つ波の高き事世に聞えたれば、沖つ浪の聲など待つべきにあらず。實景にはあはざれど、さる屏風の繪様にのみ從ひて詠めるがめでたきなり。經信のこそ、歌は劣れど實景なれ」といつたのは、妄も亦甚しい。なぜ住吉には、岸の波より外は詠まぬやうに窮屈に考へたのか。風波のない日こそ、岸ばかりにさゝ波が、折れ返つても居ようが、松を秋風の吹き拂ふ日は、沖が白波だつて騒ぐではないか。試みに岸の白波と對ひて見る

がよい。その詩境が殊の外に狭まり、その聲甚だけ臭く、とても一詠爽風の氣があたりを拂つて、衣襟が汐氣に薰る氣分が出ない。但第二句の「松を」は上に、「秋風」は下について獨立しないのが、調のうへに於いて聊か口惜しい。これは白壁の微癭である。

六帖には素性とある。素性集にも出てゐる。思ふにこの集の最初の流布本には、既にこの前後の名は皆脱けてゐたのだらう。それで上の歌の素性の署名を及ぼして皆素性の作とし、夙く六帖にも、何にも採つたと思はれる。その故は、拾遺集に、躬恒のとしてこれが再出してゐる。既にいつた通り、この集の歌が、後の勅撰集に再出したのは、必ず本文に異同あるか、詞書又は作者に相違あるかの場合に限つた事である。歌も素性の風體ではない。

忠 岑

千鳥なく佐保の川霧立ちぬらし山の木の葉もいろまさり行く

釋 ○千鳥なく 千鳥の鳴くを、後世は冬のみ詠むが、古くは秋、又は春にも詠んだ。○佐保 秋下「佐保山の杵ハツの紅葉」の條に既出。○山の 佐保山の。

大意 もう千鳥の啼く佐保川の狭霧が、きつと立つのらしい、それと知られて、この佐保山の木の葉も、段々色が増つて行くわ。

評 流れ川の向ふに紅葉の山を畫いた圖様だらう。乃ち川を佐保川、山を奈良山に見立て、よんだ。「千鳥鳴く」は、佐保川の形容として冠せたので、あながち今鳴いてゐるのではない。霧もまた繪のうへにない想像で、題畫の詠としては器用な趣向である。紅葉の露時雨や霧などに色付くは常套である。

拾遺集、六帖、忠岑集、家隆本に従つて、忠岑の名を補つた。さて拾遺集にも、家集にも、結句色かはり行く
とある。眞淵いふ「賀の歌なれば色かはるといふ詞を忌みて、後に『色まさる』と換へたるにもあるべし」と。け
れどそれは本末顛倒で、この集のは初から、「まさる」とあつたからこそ、拾遺集には今一説の傳に據つて、再
び採録したのである。下句、六帖に「ま木の梢も色付きにけり」とあるのは深山の景色で、茲にはかなはない。

○

秋くれど色もかはらぬときは山よそのもみぢを風ぞかしける

○ときは山 夏部、秋部下に出てる。○かしける 貸した。

大意 秋が来ても、木の葉の色も變らぬ常磐山では、時節柄紅葉の無いのもいかゞといふやうに、餘所の紅葉を
風がサ持つて来て、この常磐山へ貸したわい。

○山の名に絶つての趣向は、秋下にも、

もみぢせぬ常磐の山はふく風の音にや秋をきゝわたるらむ

などあつて、平凡ながら紅葉を風が貸すの擬人は尖奇である。いかにも題畫らしい作である。木立の茂つた青
山のあたりに、紅葉の打ち散つた繪様だらう。

この歌、家隆本にも署名ないといふ、前と同じく忠岑の作か。

冬

貫之

しらゆきのふりしく時はみよし野の山下風にはなぞ散りける

○山下風 萬葉集には、山のあらしと訓んでる。けれどこれは、ヤマシタカセと讀むがよい。もと萬葉の訓

み違へから起つて、一つの詞となつたのである。

大意 この三吉野の里では、白い雪が頻に降る時には、山下風で、花がサ意外に散つたわい。

○雪中の山の景色を描いた圖様だらう。乃ち吉野に取り成してよんだ。景樹、廣蔭等が「芳野は花の名所なれ
ば、雪を花と見たてしなり」といつたが、奈良時代からこの集の頃にかけては、吉野には雨雪、或は山水の勝
をこそ詠んだが、櫻の花を賞する事は少ない。これは冬部に數多見えた趣向と同じ譬喩である事は、

山高みふりくる雪をうめの花散りかも來ると思ひつるかも (萬葉卷十)

とある先軌をたづねて知るがよい。調子のよい外に、想に見るべき物が無い。

拾遺集、家隆本、貫之集に従つて、貫之の名を補つた。三句、六帖にあし引のとある。

春宮のうまれ給へりける時に、參りてよめる

典侍藤原よるかの朝臣

峰たかき春日の山にいつる日はくもる時なく照らすべらなり

○春宮のうまれ給へりける時に 「春宮」は醍醐天皇第二の皇子で、保明親王と申し、御母は藤原基經の女、

中宮穩子である。延喜三年降誕、同四年二月立太子。延長元年三月御病の爲、御齡二十一にて薨せられた。文
彦と謚し奉る。○春日の山 大和國奈良にある。其處に藤原氏の祖神を祀つた事は、上の「春日野に若菜摘みつ

賀歌

つ」の條に

大意 頂の高い春日の山にさし出る日は、所柄曇る時もなく、世の中を照らすやうな様子であるわ、といふが表面の意で、實は春日の神の御末の藤原氏の中でも、この上もない基經公の姫君の御腹に出来ました若宮様だから、御行末天子とお成り遊ばされて、何時までも御仁徳の曇る時もなく、天下に御照臨遊ばしさうな様子で御座りますわい、といふが裏面の意。

評 昔は后妃のお産を宮中ですることはない。この中宮もお里の藤原家で、皇子をお婉みなされたのだ。作者はそのお祝に参邸して、この歌を詠んだ。お家柄、春日の神を取り出して、閨閣の高さを「峰高き」に、藤原氏出の皇子を「春日の山にいづる日」に擬へて、すべて譬喩を以て御行末を慶賀し奉つたので、巧である事は勿論、その語調の逞しく力ある事は巾幗の作に似ない。やがてこの皇子の東宮となつたのも、この歌の功力が關つたかも知れない。作者の参邸したのは、典侍として職掌上、皇子御降誕の御儀式に參與したものでらしい。

古今和歌集卷第八

離別歌

題しらず

在原行平朝臣

立ち別れいなばの山の峰におふるまつとし聞かば今かへりこむ

釋 ○離別歌 ワカレノウタと讀む。○いなばの山 和名抄に「因幡國法美郡稻羽」とある所の山で、今も松が多い。稻葉山とも書き、又、宇倍山といふ。山下に稻羽川流れて、國府村がある。いにしへ國府を置かれた土地である。文德實錄に「齋衡二年正月、從四位下在原朝臣行平爲「因幡守」とあれば、因幡國の稻葉山であることは明らかである。或説に、美濃國の稻葉山（今の岐阜）かとあるは、據のない臆説である。○立ち別れいなば 立ち別れて去ぬるの意に、稻羽をいひかけたので、將然の意で去なばとまでかけたのではない。○まつとし 松に待つをかけた。「し」は強辭。○今 口語のぢきにの意。

大意 自分は貴方達に立ち別れて、因幡の國へ往きますが、その國の稻羽山に生えて居る松の名の如くに、貴方達が、私を待つとサ聞くなれば、すぐに歸つて來ませう。

評 作者が因幡國に赴任の折の留別の作と思はれる。これが死に別れといふでもない、「待つとし聞かば」すぐに

逢ひに立ち歸つてこようからと、旅行く人が却つて見送る人を慰めた、別離の際の情致掬すべきものがある。況や因幡國は、京より下るに六日、上るに十一日を費すべき行程であつた。それを「今歸り來む」と譯もないやうにいひなした「今」の一語の常理を没した狂想、詩味湧然として生ずる心ちがする。「去ぬ」と「歸る」とを闘はせ、又いひかけを一首のうちに再用したなどは、この作者の慣手段である。すべて親句の續いたのは面白くないものなのを、四五句の續きが疎句に仕立てられてあるから見直されてしまふ。但萬葉集卷十三、〇〇〇門に居るをとめは内に至るともいたくし戀ひば今歸り來む

はこの藍本らしい。しかも修辭の點に於いて、これは一段の巧技を弄してゐる。更にいふ、この「歸りこむ」及びこれに類する辭様は、多くの場合、實際にその意志があるのではない。出来ることならさうしたいといふ希望を、決定の將然にいひなしたのである。國司は私に任地を離れることは法の禁する處である。假令故人が待つと聞いたとて、歸れる筈でもない。況や「今」歸るは尙不可能である。そんな理窟は全くぬきにして、情の動くに任せたのが面白い。

又眞淵が、「いなばの山は、萬葉集に、陸奥の小田郷より金を出し、を、『陸奥山に黄金花咲く』と詠める如く廣くいひしこそよけれ、法美郡稻羽の郷の山とせむは、狭くて古人の意に非ず」と評したのはいかゞ。「峰に生ふる松」といふこまかな取り成しは、因幡の國の山といふが如き、漠然たる廣義の叙法を許さない。それは不調和の滑稽に陥るからである。

よみ人しらす

すがるなく秋のはぎはら朝たちて旅ゆく人をいつとか待たむ

○すがる 和名本草に、「蠶蟬一名土蜂、一名螟蠹、一名細腰、和名佐曾利」とあるも同じ物で、世に似我蜂といふ土蜂である。小野博は、似我蜂に就いて一説を立て、曰はく「全身深黒色に、腰甚細く絲の如き小蜂、夏日人家に飛來り、筆管中などに入りて巢を造り、子を養ふが爲に、蛛を螫し傷めて其の中に入れて、泥にて塗り塞ぐ。管内にて鳴く聲、似我々々と云ふに似たり。又青蜂といふ一種の小蜂も、似我の聲あり。いづれならむ」といつてゐる。舊説、及び顯注、密勘等に、鹿の事としたのは、下に萩原とあるによつた臆説である。

○はぎはら 萩の多く咲いた野。
大意 このやうに、蝶蠶の鳴く秋の萩原を、朝立つて旅へ行く貴方を、さてまあそのお歸を、何時と思つてか待ちませうぞ、あゝ何時とも知れぬ待ち遠い事でありませう。

送る人送られる人、そもどうした關係か知れないが、祖帳既に別を叙して、なほ袂を分つに忍びず、送つて郊外蝶蠶鳴く萩原に到る。その纏綿の情致が思ひやられる。「朝」の一語、疊にその出立の時刻を點出しただけに止まらず、秋氣清爽として露白く花紅なる萩原に朝影を受けて、さうした蟲どものすだく面白い景氣が想像される。蓋しかう極力その背景を詳叙したことは、別離の狀を強く印象させて、再會期遙なる歎嗟の意を佑けるものである。一旦別れたら「何時とか待たむ」であり、さりとてこの場に臨んで別れぬ譯には往かず、痛し痒しで途方にくれた光景で、情景兼ね到つた妙作。

眞淵が、古事記に、鳴をナスと訓んだのに據つて、初句の鳴を借字として、すがるなすと改めていふ、「蝶蠶の子は一度巢を立ちては又歸り來らぬ由、その如く別れ行きては歸の知られぬ人なれば、何時とか待たむと歎

きたるなり」と解いたのは牽強である。況や蝶嬴の子云々も、本據のしかとしない臆説である。又宣長が初句を「萩原」の序詞と見たのは粗である。下句、六帖に旅行く人のをしまるゝかなとあるのは面白くない。

○

かざりなき雲居のよそに別るともひとを心におくらさむやは

釋 ○雲居 例の空のこと。○ひとを 對手の人をさす。

大意 限もなく遠いあちらの國に、今から別れて私は行くとも、不斷貴方の事を心に置いて、跡になどのこして置きませうか、いや何所までも、心には貴方を連れ立つて行きますわ。

評 束の間も忘るまじき交情を婉曲に叙べた。その構想の尖巧なのは、格調のあまり高くない所以であらう。「雲居のよそ」は遠方の轉義である。大和物語に遍昭の詠としたのは、全然信すべからざる小説であるが、口吻はほんに相似て、その下作に儔する。

結句、舊本にをくらさむやはとあるに據つて、眞淵が「心に限なく守りて小暗さむやはの意なり」と解いたのは、牽強も甚しい。を文字の假名遣であることは勿論である。顯注に引いた大和物語にをくらざらめやとあるも、當時の謬に從つた假名遣で聞え難い。又四句、大和物語一本に人に心をとある。これもいかゞ。類從本大和物語は、四五句とも本行のと同じい。

小野のちふるがみちのくの介にまかりける時に、母の

よめる

たらちねの親のまもりと相添ふる心ばかりはせきなとゞめそ

釋 ○小野のちふる云々 小野千古が陸奥介に任ぜられて赴任した時に、その母の詠んだ歌といふこと。「介」は國司の次官。○たらちねの 親にかゝる枕詞。奈良の頃までは、母といふ語の枕詞としてのみ用ひられ、たらちねの、たらしねのとも轉じていつた。足の義で、母の慈愛を讃した詞だらう。○親のまもりと 「の」は口語のがの意。「と」はとしての意。○相添ふる 「相」は互になどいふ意もあるが、こゝは接頭語で、只下の動詞の意を強めるに止まること、なほ相願ふ、相變るの相と同じい。○せきなとゞめそ 道々の關所も止むるの意。

大意 付き添つて一緒に行くことは叶はずとも、この母が子の爲の守にと思つて添へて遣るこの心だけは、往來を止める關も、堰き止めて下さるな。

評 東路は京から陸奥までの間に、逢坂の關を始として、不破、鈴鹿、清見、足柄、白川、勿來等の諸關がある。行人を誰何して、通書文など無い人は押し止めて通さなかつた。されば、この親心ばかりは止めて下さるなと愁訴した。心だけ分けて子に添へて遣れるものでもないが、そんな分別は忘れてしまつた處に、あり難い尊い眞摯な親の熱愛と詩情とが動く。

さだときのみこの家にて、藤原のきよふが、近江の介にまかりける時に、馬のはなむけしける夜よめる

離別歌

四三七

けふ別れあすはあふみと思へども夜やふけぬらむ袖の露けき

釋 ○さだときのみ云々 貞辰親王の家で、藤原清生が、近江介となつて赴任しようとする、その立振舞した夜に詠んだ歌との意。「馬のはなむけ」は、いにしへ旅行く人が乗つた馬の鼻面を、その行くべき方へ向けて祝ひ言して立たせ遣るが本で、轉じては送別の宴を開くをいふとも、驛路の端設の略とも、旅立つ人の馬の鼻へ向けて物を贈つたのから起るともいふ。こゝは送別の宴である。今では略して、はなむけとばかりいつて饞別の事とする。○あすはあふみ 明日は逢ふ身といふに、近江を寄せた。

大意 貴方の赴任なされる近江の國は京隣の程近い處ゆゑ、今日は別れても明日はすぐに逢はれるこの身ぞとは思ふが、さすがに別といへば名残が惜まれて、猶豫するうちにはや夜が更けたのであらうか、これこの通り袖が露ほいことよ。

評 いや／＼これは露ではなくて、別の悲しさに溢れた涙なるのは餘意がある。そんな交通不便の時代ですら、僅々一日のうちに往來される隣國なので、別離とはいへ涙を落して騒ぐ程の事でもないのを、「袖の露けき」とまで誇張してゐる。四句は、これが爲に假設した前提だから、實に夜の更けたのでもあるまいが、おのづから別離の名残惜しさに時の移るを知らなかつた趣が聯想されて、流石に無駄でない。二句を、契沖、眞淵、宣長等の、逢ふに近江國をかけたものとして、明日は逢ふ程に近い近江國と思へども意に解したのは、理のたじろぐことを忘れたものである。「逢ふ身」といへばこそ「袖の露けき」に打ち合つても聞えるのである。國の名は物名として詠み込んだまで、ある。

こしへまかりける人によみてつかはしける

かへる山ありとは聞けど春霞たちわかれば戀しかるべし

釋 ○かへる山 和名抄に、越前敦賀郡に鹿蒜郷がある。其處の山を加比留山といひ、又轉じてはかへる山ともいつたのである。眞淵が「歌の寄せにて、さてかへる山に歸るを寄せ、かへる山と轉じいへるなり」と解いたのは本末顛倒で、名詞を私にいひ改めて聞える筈がない。○春霞 「たち」にかゝる序詞。

大意 北國には、追付け無事でお歸りなされる、かへる山といふ頼もしい名の山があるとは聞いたが、それでもこの節の春の霞の立つやうに、立ち別れて往かれたならば、定めて戀しうありさうなわい。

評 未だ出立せぬ以前に、別後の離情を豫想して、その人の許に詠んで贈つたのである。「春霞」は山の縁で時節の景物なのを、「立ち別れ」の序詞に用ひた。故に契沖が「春霞と共に立ち別れて」といひ、宣長が「あの霞の立ちてある方へ立ち別れて」といふ、いづれも誤つてゐる。想ふに、その人は外官などで赴任したものか。さては一定の任期を終へると、必ず歸つてくる筈なので、其處の山の名に寄せて、「歸ることあり」といつたのだらう。「聞けど」の一語、足いまだ他郷の土を踏まぬ都人士の口吻。

人のうまのはなむけにてよめる きのつらゆき

をしむから戀しきものを白雲のたちなむのちは何ごこちせむ

釋 ○うまのはなむけにてよめる 錢の席上にて詠めるとの意。○をしむかも 「から」はよりの意。○白雲の

「たち」にかゝる序詞。

大意 別を惜むよりはや未だ出立せぬ貴方が、かうも戀しいものを、それをまあ空の果に見える白雲のやうに、立つて遠くへ往かれようその後は、どのやうな心持がしませうぞ。

評 「をしむ」は眼前惜別の情で、「戀しき」は別後の情である。それを混一にして、別れ切らぬうちから戀しいといふ没理路の言は、鍾情の極で、「たちなむ後は何ごころ」の下句の力強い前提を成してゐる。實際離苦は豫想してさへも耐へられない。況や實現の曉は何心地と、不定の疑問を用ひたのに、測るべからざる多大の愁恨を寄せた。

三四の句、六帖に春霞たちわかれなばとあるは、前の紀利貞の歌を謬り混じたるものと思はれる。家集は、四句のみ六帖と同じい。

ともだちの、人の國へまかりけるによめる

在原しげはる

別れては程をへだつと思へばやかつ見ながらにかねて戀しき

釋 ○人の國 他國。狭義にはわが住處をもとにして餘所の國をいひ、廣義にはわが國をもとにして外國をいふ。伊勢物語に「この男、人の國より夜毎に来つ、笛をいと面白く吹きて」とあるは狭義。「人のみかど」などいふは廣義である。さてこの端詞は外國への旅行のやうでもない。内地の旅行ならばこの上下の歌のやうに、越の國、あづまの國など書くべき筈だが、想ふに出先の國が不明な爲に、止むを得ず「人の國」と書いたのだらう。

○程 道程。時間の意に用ひるは俗意である。

大意 一旦別れては、久しく逢はれぬ遠い道のりを隔てる事と思へばかして、一方にはお顔を見て居ながら、一方には案じ置きがせられて、今からも戀しく思はれますわ。

評 「かねて戀しき」の上に、かつの副詞が一つ略されてある。見て居ながら戀しいといふ矛盾を捉へた尖新な着想だが、あまり説明的で、叙法がぐくぐしい。乃父業平朝臣に詠ませたなら、かうはあるまい。

あづまの方へまかれりける人に、よみてつかはしける

いかごのあつゆき

おもへども身をし分けねば目に見えぬ心を君にたぐへてぞやる

釋 ○あづま 日本武尊の東國征伐の時、御妻橘姫が上總の海に沈まれたのを歎いて、碓氷の坂で東を顧みて、吾妻者也と仰せられたので、坂東の國々をあづまといひ、後々は、逢坂の關から東の國をも弘くいひました。さてその行手の道をあづま路といつた。

大意 何程思つても、身を二つに分けられぬによつて、お供は協はぬかはりに、目には見えない私の心を貴君に添はせてサ、はるく遣りますわい。

評 公務などに支へられて、一緒に出立されないで、さりとて「身をし分けねば」と、わが苦心の尋常でない趣をいひ送つたのである。三句は何たる冗語と思はれたが、詞書のやうを見ると、同伴はさておき、見送りにさへ行かないさまだから、或はそれらの怠慢を模稜すべく、目に見えぬ心を引き出したるものか。すると軽く看

置くやうに跡に置いてお出なさらば、私の身はその朝露の消えるやうに、消えてしまひさうに存ぜられますものぞ。

それをなほ見捨て、行くのは、餘り無情な仕打だと自覺して、若し思ひ直りもするかと、一縷の望を萬一に繋いだ可憐の情致は、同情に堪へない。棄て、往つたら生きては居ませんといふ勝氣な氣性ではなくて、生きて居られませんかといふ弱々しいはかなげな氣性なのである。それだけ餘計に同情が惹かれる。夕露といはず、朝露といつたは、朝立つことが旅行の常慣習だからである。この三四の續きは、貫之の、

長き夜を思ひあかして朝露のおきてしければ袖ぞひぢぬる

と同巧である。又死ぬべきの意を露の縁に寄せて、「消ぬべき」と轉義した。枕詞と序詞とで、上下に排對の辭様を取つた。

左註は、大やうこの歌の事情を悉したやうであるが、上來の例に據ると、これも後人の所爲だらう。けれども眞淵の「誰といふ男、誰といふ女、何の司、何の書にありといふべき事なるを、さはなくて、かく浮きたる事のみ書くは、用なき事なり」と難じたのは偏してゐる。その實は確かでない事でも、世間一般にいひはやして捨て難いものもあるではないか。

常陸へまかりける時に、藤原のきみとしに詠みてつかはしける 寵

朝なけに見べききみとし憑まねば思ひたちぬる草まくらなり

○藤原のきみとし 公利とも書く。本朝文粹、三善清行が異見封事中に、備中介になつた事の見えた人である。

○朝なけに 「朝な」は朝にの轉語。「け」は來經の約語だから「け」は常にの意。連ねて毎日の意と解する。○見べき 見るべきの意。○思ひたち 思ひ断ちに、思ひ立ちをかけた。○草まくら 菰、菅の類は勿論、何にまれすべて草で造つた枕をいふ。旅にかゝる枕詞に用ひる。古の旅行には、驛舎の設がなかつたので、草を引き結んで枕とした故、草枕する旅といふ意の續きである。雅澄の説には、草枕把ぬの意を旅にかけたともいふ。こゝは草枕を直に旅の意に轉用した。なほ足引のは山、玉銚のは道の枕詞なのを、後には直に、足引を山、玉銚を道の意に用ひた例に同じい。

大意 とてもいつも逢はれさうな貴方様とはサ憑まれぬ故、あきらめて思ひ立ちました、今度の旅で御座りますわ。

よもやに惹かされて人の無情を怨みつゝある人、失望の極、世間の消息を絶つた住所を求めようと出で立つた。それでもなほ去るに臨んで、戀々の情躊躇の態のない譯にはいかない。「思ひたちぬる草枕」、眞に斷腸の語である。結末殊に力量が見える。さて「きみとし」に人の名の公利、「おもひたちぬる」にさして行く國の名の常陸、「草まくら」に我が名の内藏を詠み入れた。抑もこの作者の名は、寵アナ、寵ウツクシム又、襲カサメなど、異本まち／＼である。清輔與儀抄にウツクと訓んでゐるのは、うつくしむの畧で、寵に従つたものと見える。經典釋文、寵字を寵とも書く。宇冠穴冠通用するは隸書の常である。齋藤彦麿の説に、「この女の夫か兄か、内藏寮の頭助允などの官の時に、内裏へ参りたる女にて、呼名を内藏といひしが、草書にて書きたる二字を一字と見謬りて、上の三字の如くには、寫しひがめしならむ」とある。極めて適解と思はれるから、これに據つて結句に、我が名の内藏を詠み入れたものと定める。煩はしいほどに名詞を断ち入れたが、更に筆鏤の痕の

ないのは、巧手と稱へてよい。

紀のむねさだが、あづまへまかりける時に、人の家にやどりて、あかつき出で立つとて、まかりまうししければ、女の詠みて出せりける
よみ人しらず

えぞしらぬ今こゝろみよ命あらばわれや忘るゝ人やとはぬと

【釋】○紀のむねさだが云々「むねさだ」、如何なる字を填て、よいか明らかでない。傳未詳。「まかりまうし」は罷申と書く。暇乞である。さて人の家から旅に出立するのは、方違への爲に宿つたものと思はれる。中昔の頃は、天一神といふ神の天を周りあるが、其の運行の方に向つて行くと凶事があるといふので、必ず行くべきことのある折には、一先づ他所に宿つて、方を違へてから行く習慣があつた。こゝは素より知合の女の許に宿つたのである。○えぞしらぬ 知り得ぬの意。○今こゝろみよ「今」は口語の追つ付けに當る。「こゝろみよ」は試して見よの意。○命あらば 我が命のあらば。○人や「人」は、こゝでは女から男をさしていつたのである。

大意 何方が頼もしいか頼もしく無いかは、ソレヤ今はわかりませぬ、私は貴方にお別れ申してからが、生きて居る空はないが、萬一にも命あつて生きて居るなら、長い間に私が忘れるか、貴方が音信しても下さらぬか、二つ一つのところを追付け試して御覽なさいよ。

【評】雲山萬里を隔て、長い年月を重ねたら、移り易い女心は甚だ覺束ないものだらうなど、男のいつたのを承

けて、論より證據「今こゝろみよ」の一冷語を下して、さう仰しやる貴方自身こそあぶないものだの意を寓してゐる。日頃疎々しい振舞などした彼れ、慙死せず居られようかい。「命あらば」は、我が思ひに堪へかねて焦れ死ぬべきことを豫定して、男の薄情な反映とした。含蓄あり曲折あつて、面白い歌である。但氣格はさう高くない。

二句、六帖に今こゝろみよとある。これは我が試みむといふ意である。景樹は「本文の如く試みよと人に下知する意ならむには、命あらばも人に係るべし。何故に人の命を覺束なむにか理り立たず。旅の門出にもゆゝしき語なるをや」といつて、六帖に従つた。けれども上文のやうに解けば、本行のまゝで仔細はなからう。

あひ知りて侍りける人の、あづまの方へまかりけるをお
くるとて
ふかやぶ

雲居にもかよふ心のおくれねばわかると人に見ゆばかりなり

【釋】○あひ知りて 多く男女の語りひをした中にいふ。上の二首も男女間の別離だから、これもその儔だらう。○人に 對手を指す。狭義に使つてある。

大意 雲のある程遠い所へ、貴方が往かれても、私の心は何時も貴方の居る方へ通つて、跡に後れて居ねば、詰りこの身だけが、今別れて跡に残ると、貴方に見えるばかりですよ。

【評】上の「かぎりなき雲のよそに別るとも云々」と表裏してゐる。心と身とを二つに分けて、別々に取り扱つたことは詩的である。「私の心はどんな遠方でも貴方について往きます」。遠いく東の旅に赴く人に取つて、こ

んなあり難い嘘はなからう。

一句、六帖に深き心のとある。

友のあづまへまかりける時によめる

よしみねのひでをか

白雲のこなたかなたに立ち別れこゝろをぬさとくたく旅かな

釋 ○白雲の 白雲の如くの意。「こなたかなたに」の句を隔て、三句の「立ち別れ」の「立ち」へかゝる序詞である。下に「秋霧のとも立ち出でて別れなば」とあるも、「秋霧の」は立ちにのみかゝつて、「ともに」といふ詞にはかゝらぬのと同じである。○ぬさとくたく ぬさの如く碎くの意。「ぬさ」は神に捧げる布帛であるが、こゝは旅行く時、道の神に手向の物として幣袋に入れた五色絹の切幣で、細かに切り碎いた物だから、幣の如く碎くといつた。

大意 貴方は遠い東へ、私はこの都にとあちこちに、恰も大空の白雲の立つといふやうに、立ち別れて、道の神に手向けるこの幣のやうに、心を千々に碎いて悲しまれる、貴方のお旅立でありますことよ。

評 行く人は、峠の社頭に幣を捧けて行旅の平安を祈り、送る人は、油然として白雲の生ずる天の一方を望んで、袂を別つに忍びない。眼前の光景に詩材は多々あらうが、これぞ殊にこの白雲と幣とを借り來つて、斷腸の情を叙べた所以であらう。同一の譬喩法を疊用したが、煩冗の感を與へない。

みちのくにへまかりける人によみてつかはしける

つらゆき

白雲の八重にかさなるをちにても思はむ人にこゝろへだつな

釋 ○みちのくに 「みちのく」は陸の奥の略だから、國の字を添へると、みちのくの國といはずばなるまい。上の「常陸へまかりける」の例によれば、陸奥へであらう。さては、文字は冗字。○八重に 「八」は多量多數の意を表する。七重に次ぐ八重の意ではない。○をち 口語のあち、あつちなどの意。萬葉集に、彼此をチコチと訓んである。

大意 今お出になる白雲の幾重にも重なつた彼地でも、貴方を思ふ程の人には、必ず心をお隔てなさるな、假令あの雲は隔て、あらうとも。

評 その「思はむ人」といふは外ならぬ私の事サと、落着させるいひなし、巧である。かうよそしく自身を取り扱つた點に、婉曲の味が生ずる。上句、限りなく遠い趣が見えた。雲の縁で「八重にかさなる」から「隔つな」ときたのは例の手づまで、親貼過ぎるが、かうした叙法は當時の流行である。

人を別れける時によめる

わかれてふことは色にもあらなくに心にしみて侘しかるらむ

釋 ○人を別れ 「を」の辭の説は上に既出。○しみて 染みてと同語。

大意 別といふことは、色でもありもせぬに、何でこのやうに、心に沁みくとなつて、仕方も無くつらいのであらうぞ。

評 「心にしみて」から色の語を聯想して、これを反喩に扱つた。すべて細くからびた仕立、これも一體である。三四の句間に、何故にの語を含めて婉曲にした爲に、大人しい安らかな氣分になつてゐる。

初句、六帖にわかるてふとある。別と名詞にいつた方が二句へよく出合ふ。

あひ知れりける人の越の國にまかりて、年へて京にまう
できて、又かへりける時によめる 凡河内躬恒

かへる山何そはありてあるかひは來てもとまらぬ名にこそありけれ

釋 ○何そはありて「何そは」は何そはの意。この語古來釋き得た説がない。この何は、口語の何大シタ事デモ無イ、何驚クニ及バヌ、などの何で、末に必ず否定の語か、反駁の詞かを現はすべき格である。故にこは、何そはは在つて在甲斐の無いの意に解するがよろしい。下の戀ニ命やは何そは露のあだ物を云々の歌をも参照して、通はせて心得られたい。

大意 越の國のかへる山は、彼地へ下られた貴方の、再び都に立ち歸る名ぞと、これまでは頼もしく思つて居つたに、何それは在つて在甲斐の無いので、その在る甲斐といふのは反對に、久し振に來た貴方が京には留まらずに、又彼地へ歸るといふ名でサありましたわい。

評 山の名の「かへる」は、此方へではなくて、彼方へ歸る意である事を、始めて合點したといふ。「來てもとまらぬ」は即ち歸ることであるが、「かへる山」の名と重複するのでいひ換へたのである。「あり」の語の反復何でも

ないことだが、調子の滑かさを覺える。けれどもとく山の名に絶つた縁語の仕立で、弄舌の妙こそあれ、氣味に至つては、則ち索然としてゐる。

六帖に、作者を市原のおほきみとあるのは誤だらう。

こしの國へまかりける人によみてつかはしける

よそにのみ戀ひや渡らむ白山のゆき見るべくもあらぬわが身は

釋 ○白山のゆき見る 白山の雪を、「行き」にかけた序とする。雪見るに、行き見るをかけたとする説はわるい。白山は加賀國能美郡にある。今は音讀してハクサンといふ。越前にも同名のがあるが、打ち任せて、雪など詠むべき高山でない。越前、加賀、能登、越中、越後のあたりは、すべて古の越の地で、京畿より越路に入つて、先づ目につく高山は雪を載く白山である。故に越の白山の名が世に高い。白山の名も雪によつてある。

大意 今からは、餘所にばかり戀しく思つて、月日を送ることでありませうか、とても雪深い白山のある越路へ往つて、貴君にお目に懸かれさうにも思はれぬ私の身はサ。

評 公務に支へられて、心に任せぬ身なので、「ゆき見るべくもあらぬ」といつたらしい。平凡の着想、わづかに「白山のゆき見る」の弄語が一ふしを成すのみ。

音羽山のほとりにて、人を別るとてよめる つらゆき

音羽山木高くなきてほとぎす君がわかれを惜むべらなり

○音羽山 夏部「音羽山けさこえくれば」の條に既出。○木高く 梢高くの意。小高くと心得てはいけない大意。この音羽山の梢高く鳴いて、時鳥があれあの通り、貴方の別を惜むやうな様子でありますわ。

時鳥の聲を聞いて、あれは君が別ゆゑに鳴くのだといふ推定は、即ち既に君が別に泣いてゐる作者であることを證する。しかも心無き鳥獸すらも愁へ歎くは、即ち別れ行く人の重きを成す所以で、容を借りて主を形する筆法である。杜牧の、

蠟淚有^リ心^ヲ還^タ惜^ム別^レ、 替^フ人^ニ垂^レ涙^ヲ到天^ノ明^ニ。

は、詩材こそちがふが、同想の同叙と見える。「木高く」は、山の端の梢あたりに鳴く景色であるが、おのづから鳴く音の高く聞えた趣も響き合ひ、鳴く音の高いに、別を惜む心の一通りでない態も聯想される。音羽山に木高くといひ、又梢を詠むことは、その木茂き實景から來たものだらう。細心の作ではあるが、一往自然のやうである。又、唐僧無悶の詩に、

杜鵑不^レ願^フ離^レ人意^ヲ、 更^ニ向^テ落花^ノ枝^ニ上^リ啼^ク。

同一の詩境同一の詩材で、有情無情の取り成し、比較してその好處を曉るがよい。

藤原の後蔭が、唐物のつかひに、なが月のつごもりがたに
まかりけるに、うへのをのこども、酒たうびけるついでに
よめる
藤原のかねもち

もろ共になきてとゞめよきりくす秋の別は惜しくやはあらぬ

○藤原の後蔭が云々 後蔭が唐物の使に任ぜられて、九月の晦方に西國へ出立した時に、殿上人達はその饒別の酒を酌んだ序に詠んだ歌との意。「唐物の使」は唐國、渤海國等の商船の、筑紫に着いた時、その積荷を検校して、珍奇の貨物は收公して都に奉りなどする爲に、遣はされる使である。武家の世となつては、唐物奉行といつた。「晦方」は月の下旬。「たうび」は賜びの音便である。この本文は、うへのをのこどもを主とした書き方だから、自他が差つてゐる。たうべとなければなるまい。「たうべ」は賜はりである。飲食することを、口語にたべといふも同語である。○もろ共に 自分と共にの意。これを秋の別と、人の別との二つをいつたとする説は、甚だその謂れがない。

大意 葦よ、共々に泣いてとめて呉れよ、今この秋の暮れ行く別は、惜しくは無いことか、どうして惜しいことであるわ。

壺々のあたりに、唧々と鳴き出した蟲の聲をやとひ來つて、秋の暮れようとするを惜んだのは表面の意で、實は秋行く人の別を惜んだ暗喩である。筑紫の往復は公程として一月半、それに公務執行の時日を加へたなら早くて二月を要する。況や旅行の苦患は今日の人の想像以上であつた當時とすると、いよ／＼旅行く人がいたはしくもあり、随つて別れ難くも感ずる。けれども公事は私情で如何ともし難い。ひたすら別涙の催すに堪へず、汝も手傳つて泣いて止めよと、はかない蟲の聲をも力頼みとする纏綿の情緒、あはれ深いものがある。

平もとのり

秋霧のともにも立ち出でて別れなばはれぬおもひに戀ひや渡らむ

釋 ○秋霧の「立ち出でて」の「立ち」に係る。「出でて」には係らない。○はれぬおもひ 胸の開くことない物思。大意 秋霧の立つと共に、貴方が立ち出でて、お別れなされてしまったならば、私は今からあの霧のやうに、晴れぬ心の物思に、何時も貴方を戀しく思つて、月日を過すことでありませうか。

評 霧の縁語を以て、「立ち」「晴れぬ」など修飾した。これも上と同時の歌で、殿上の夜宴と覺しいから、夜霧の立ち渡つたのを見て詠んだらしい。されば晝の歌として、「おもひ」に日をいひかけ、霧に曇つて日の晴れぬを胸の晴れぬに擬へたとする説は、成り立たない。

源のさねが筑紫へ湯あみむとてまかりける時に、山崎にて別をしみける所にてよめる し ろ め

いのちだに心になふものならば何か別の悲しからまし

釋 ○源のさね云々 「源實」は官右近衛少將に至つた人。「ゆあみ」は湯浴で、筑紫によい温泉があつたので、湯治に行つたのである。「山崎」は山城河内攝津三國の堺、淀川の北岸に當る。京より西國に通ずる咽喉の地で、延喜時代には、京に上下する船場であつた。土佐日記にもこの趣が見えてゐる。○心になふ 思のまゝになるをいふ。

大意 貴方をお留め申すことは協はずとも、せめて自分の命なりとも心任せになつて、お歸まで長らへられるものならば、何のこのお別が悲しからうぞ悲しくもありませんわ。

論 しかし心に協ふ命でないから、やはり別は悲しいと落着する。現代の人の目からは、筑紫あたりの湯治の別に命をかけるのは、餘り大袈裟過ぎる嫌ひはあるが、八束鬚胸前に垂る益荒雄すらも、上に見えるやうに、唐物の使を送るといつては、「鳴きてとゞめよ」晴れぬ思に戀ひや渡らむ」など詠みあつた時代だから、女の情ではましてであらうと思ふ。それに聊か誇張を加へられたら、これ位の事は當然である。景樹が、「生得か弱き人なりけむ」などいつたのは、餘り事情に疎い穿鑿である。杜甫のいはゆる生別常惻々で、焦れ死にして貴方のお歸の日に逢へないかも知れないと、不安を豫測して眼前の別愁に耽る。實に直情のあらはれで、辭旨悽惋に沈痛に、直に人の肺腑を刺して、一聲一涙、一字一珠。この作を思ふと、白女は遊女ながら實に立派な人格者であつたらしい。又いふ、作者は江口の遊女であり、源實は廷臣である。しかも深く馴れねんだ間柄であつたらしい。後の者が大江匡房の遊女記は、よくこの間の消息を説明してゐる。

自、山城國與渡津、浮、巨川、西行一日、謂、之、河陽、江南北、邑々處々、分流向、河内國、謂、之、江口、到、攝津國、有、神崎蟹島等地、比門連戶、人家無、絶、倡女成、群、棹、扁舟、看、船船、以、薦、枕席、上、自、卿相、下、及、黎庶、莫、不、接、牀、第、施、慈愛、又、爲、妻妾、歿、身、被、寵、雖、賢人君子、不、免、此行、長保年中、東三條院參、詣、住吉社天王寺、此時禪定大相國被、寵、小觀音、長元年中、上東門院又有、御行、此時宇治大相國被、賞、中君、延久年中、後三條院同幸、此寺社、狛犬燈等之類、竝、舟而來、人謂、之、神仙、近代之勝事也、相傳曰、雲客風人、爲、賞、遊女、自、京洛河陽、之、時、愛、江口、人、刺史以下、自、西國、入、江之輩、愛、神崎、云々。

上下淫蕩の風見るやうである。既に宇多法皇巡幸の途次、この作者、并に大江玉淵が女の遊女などに、調を賜うたことがあつた。

結句、六帖、金玉集等に悲しかるべきとあるは、風調がや、劣りさまである。

山崎より神なひの森まで、おくりに入々まかりて、歸りが
てにして、別をしみけるによめる
みなもとのさね

人やりの道ならなくに大方はいきうしといひていざ歸りなむ

○山崎より云々「神なひの森」は、秋部に見えた大和國のとは別で、山崎の南の山邊にかゝつて向日明神といふがある。その後方の、今かうなひの森といふ所である。「歸りがて」は歸りにくい意。○人やりの道の遣る道。我が心から行く道でないのをいふ。○大方は 大抵はの意。○いきうし 往きづらいの意。「いき」は往きの古言。○いざ 率ふのいざで、誘ひ出す意の發語。

大意 今度の旅は自分の心からで、何も人に遣られて行く道中ではないので、折角止めて下されるお志を、振り切つて行くもいかゞだから、大抵は往くが大儀とかこつてをいつて、さあ歸つてしまひませう。

○次の詞書を併せて見ると、前との同時の歌である。然らば湯治行きの私の旅で、公務などに關した人やりの道でないことはいふまでもない。されば自發的によしてよされぬ事はない。とはいふもの、湯治療養も亦身に取つて大事である。既に山崎で袂別の情を十分叙したのを、なほ神なひの森まで慕つて来てくれた人々の志は格別である。「いざ歸りなむ」はこの芳情に酬いて、離愁を緩和する爲の挨拶で、歸らうといふのは却つて歸らぬ人の所言である。そこにその胸中の葛藤が見える。上の行平朝臣の「今歸り來む」と似た趣があつて面白い。

「今はこれより歸りね」と、實がいひけるをりによめる

藤原のかねもち

慕はれてきにし心の身にしあれば歸るさまには道もしられず

○今は云々 上の詞書を承けた書きさまである。なほ別れかねて、何處までも送らうとする様子なので、もうこれからお歸りなされと、源實がいつた時に詠んだ歌との意。○きにし 「し」は過去の辭。○心の身にし心に付いた身でサの意。「し」は強辭。○歸るさま 口語の歸りしなといふに當る。

大意 此處まで來たことは、抑も貴方のお跡が慕はれて、自然に引かれて來た心故の身でサあるから、貴方を置いて今歸れと仰しやられても、歸りしなには道もわかりませぬ。

○これも心と身とを分解して、別々に取り扱つた。應酬の語、おのづからかうなるのも仕方がないが、上句は説明に過ぎて面白くない。以上三首のうち、これが最も劣つてゐる。

藤原のこれをか、武藏の介にまかりける時に、おくり
逢坂を越ゆとてよみける
つらゆき

かつ越えて別れも行くか逢坂は人だのめなる名にこそありけれ

○藤原のこれをか 傳不詳。集中の作者には紀惟岳といふ人があるが、氏がちがふ。○かつ越えて云々 惜みて引き止める一方には、坂を越えて別れ行く意で、「かつ」といつた。千秋が、逢坂を越えながら且別れ行く

の意に解いたのは杜撰である。「かつ」は「越えて」に係つて、「別れ」には係らない。「か」は歎辭。○人だのめに憑たもましめる意が本で轉じて、人に憑たももしげに思はせて頼みにならぬ意に用ひる。

大意 逢坂は人に逢ふといふ名なのに、今別を惜んで居るそばから、この坂を越えて別れてまあお行きなさることよ、これでは逢坂といふ名は、人憑たもめな、あてにならぬ名でサあつたわい。

評 上に躬恒が、「歸る山何そはありて云々」と詠んだのに似てゐる。萬葉調を陳腐と卻けた延喜の歌仙等が、更に一生面を開かうとあせつた餘弊は、語言の窠套に陥つて、測らず後世の俑を作つた。拾遺集に、物へまかりける送り關山までし侍るとて、と詞書して、

別れゆくけふはまどひぬ逢坂は歸りこむ日の名にこそありけれ
これも貫之の作である。いづれも着想の出發點が面白くない。

大江のちふるが、越へまかりける、馬のはなむけによめる

藤原かねすけの朝臣

君が行くこしの白山しらねどもゆきのまに／＼跡はたづねむ

釋 ○大江のちふる 大江千古。參議音人の子で、仕へて從四位上伊豫權守式部權大輔になつた。この時は、北陸地方の介、椽などの官で、赴任する折と見える。○ゆきの 雪に行きを寄せた。

大意 貴方の行かれる北國の白山あたりは、私の不案内の道ではあるが、雪の深い處と聞けば、貴方の踏んでゆかれたその雪の足跡のまゝに、お跡を尋ねて私も参りませう。

評 白山は、聲調のうへから、「しらねども」の語を喚び起し、縁語のうへから、「ゆきのまに／＼」の句を引き出し、さてその雪はまた「跡」の一語を呼び出してゐる。恰もとん／＼拍子、口拍子になつたものゝやうである。人に立ち後れては、都に一人ゐる心地せぬ由で、そんな不案内の處でも後から尋ねて行かうといふ。離情の切なのは素よりだが、やはり誇張の言であらう。實に尋ね行かうといふのならば、却つてこれ只言であり、信父の言である。

人の花山にまうできて、ゆふさりつかた歸りなむとしける時によめる 僧正遍昭

夕暮のまがきは山と見えななむよるは越えじと宿りとるべく

釋 ○花山 春下「よそに見て歸らむ人に」の條に既出。山城國山科の花山の元慶寺である。「ゆふさりつかた」は夕方。○まがき 間垣の義とも、馬垣の義ともいふ。和名鈔に、「籬和名末加岐一云末世 以柴作之言三疎籬也」とある。○見えななむ 過去の助動辭のなむと重なつた詞。

大意 夕暮の闇の紛れのこの庭の籬は、どうぞ山と見えて貰ひたい、夜は山が越えられまいと思つて、あの歸らうとする人が、今宵は此處に宿を取るやうにサ。

評 上句を下句で解釋した叙法である。さる大寺の夕間暮、築地や垣やの隈々が黒ずんでほのかな物蔭から聯想して、山に譬へた。蓋し夜山は越えられるものでない。旅人は昔から警戒してゐる。越え易い籬を、越えにくい山、しかも夜山に、あの客人達の眼に映じてくれとの希望、實は客人の別を惜む意に外ならない。破天荒の

空想で、詩膽斗の如きものがある。これぞ遍昭の壇場で、當時の歌仙の、遙かに及ばぬ點であらう。誠、少なしと評せられたのも、これらの風體に就いての事であらう。
三句、顯昭本に山と見えぬかなとあるはわるい。

山にのぼりて、歸りまうて來て、人々わかれけるついでに
幽仙法師
よめる

わかれをば山の櫻にまかせてむとめむとめじは花のまに／＼

釋 ○山にのぼりて云々 山は比叡山である。王朝時代には比叡山の延曆寺を山、三井の園城寺を寺とばかりいつた。眞淵いふ、「歸りまうて來てといひながら、歌に山の櫻とよめるは、幽仙の住める坊は、西坂本などにありけるが、其處まで歸りまうて來て、人々と別るゝなるべし」と。これは幽仙が慈覺に就いて、未だ修業中、山にゐる頃の事としてよい。又思ふに、天台座主記に、第九長意和尚の項に、幽仙律師を録して、「仁和寺根本師、彼寺別當建立人也」と見え、又、

昌泰二年十二月十四日官符任別當。口傳云、幽仙元慈覺弟子、後任仁和寺別當云々。依本習申任延曆寺別當云々。

と見えた。されば眞言宗の僧で、仁和寺別當を勤め、又さる所縁に依つて姑く延曆寺別當に任じたので、折々山に上つて、その職務を執つたものとすると、人々とおなじく麓まで下りて來て、別れる時も山の主人方の位置に立つて、別を惜んだものかも知れない。

大意 さてお別れ申すは甚だ殘念ではあるが、愚僧がいろ／＼申しても、お止まりはなさるまいによつて、この上は別といふことをば、この山の櫻に一任してしまはうわい、貴方達を止めうとも止めまいとも、それは花の心任せサ。

評 とても心なく花を見捨て、歸られはすまいの餘意がある。歸る歸らぬは人々の御心のまゝといふべきを、花のうへに移して擬人にいひはてたのは、婉曲である。人々個々の胸裡に伏藏してゐる一片の風流心に訴へて、花に辜負する罪の容易ならざるべきを暗示した。もしもこの人達が風流を以て自任する風雅男であつたなら、止まらずには居られないことになる。作者の狡猾手段は頗る妙といはう。
六帖に、二句峰のさくら、結句春のまに／＼とある。春は誤寫であらう。

うりん院のみこの、舍利會に、山にのぼりて歸りけるに、櫻
の花のもとにてよめる
僧正遍昭

山風にさくらふきまき亂れなむ花のまぎれにたちとまるべく

釋 ○うりん院のみこ云々 雲林院の親王が比叡山延曆寺の舍利會に參詣なされた歸りに、お送の爲にお供申した遍昭、及び幽仙等が、櫻の蔭で詠んだ歌との意。「雲林院」のことは春下「櫻ちる花の所は」の條に既出。「雲林院の親王」とは仁明天皇の皇子、常康親王のこと。「舍利會」は佛骨供養の法會である。叡山の舍利會は貞觀二年から始まつた。○山風に云々 「山風に吹きまき」といふは、自他が差つてゐる。吹き捲かれてなくては協はない。吹き捲きがもとのまゝならば、初句の助辭と三句の自他とを直して、「山風は櫻吹き捲き亂らなむ」

とあるべきである。○花のまぎれ 散る花の紛れ。

大意 山風はこの櫻の花を吹き捲いて、散り亂して貰ひたいわい、花の散り亂れるに紛れて、歸る道が知れぬといふので、君がお止まりなさるやうにサ。

評 落花兩三片、縞素の衣を撲つて、互に別れ難くする光景が想ひやれる。平生は散るなど希ふ花を、今日は「道まがふまで散れ」といふに、別を惜む情の甚しさが見える。この妙處は、既に賀部の業平の歌、

櫻花ちりかひくもれ老らくの來むといふなる道まがふかに
の條に説明しておいた。詩材も構想も、兩者相同じである。但遍昭のは貞觀八年、業平のは貞觀十七年の作だから、これから彼れは出たものか。業平朝臣は有数の歌仙で、あへて人の歌を拘ふものではない。暗合か。結句、家集に君とまるべくとある。その方が意が明晰である。

幽仙法師

ことならば君とまるべく匂はなむ歸すは花のうきにやはあらぬ

釋 ○ことならば かくとならばの意。春下にも見えた語。殊ならば、如ならば、など釋いた説は誤つてゐる。○

君 雲林院の親王をさす。

大意 櫻の花よ、どうせこのやうに咲き匂ふ程ならば、君の残り多く思し召してお留りなさるやうに、咲き匂つて貰ひたいわ、お歸し申すは、花よ其方の努力が足りないの、其方が憂いことではないか、まさに憂いことであるぞよ。

評 この法師、上には、「別をば山の櫻に任せてむ」と詠み、これは又、今一步を進めて、別をこむる責任は素より花の上にあるものとして、歸すは汝の不面目ではないかと詰責した。これ草を打てば蛇動くの筆法で、暗に親王のお歸りなさるのには花に面目を失はせる所以だからと、必ずお止まりなさるやうに諷示した。寄詠の興、味ふべきものがある。

遍昭も、幽仙も天台僧であるが、山の住僧ではない。故に舍利會がはて、は、親王と同道下山されたのである。すると遍昭のは、この一行全體にかけて、「立ち止まるべく」といひ、幽仙は親王の御うへをのみ「君とまるべく」といつて、別を惜しんだのである。

仁和のみかど、みこにおはしましける時に、布留の瀧御覽

じにおはしまして、還り給ひけるによめる 兼藝法師

あかずして別る、涙瀧にそふ水まさるとやしもは見ゆらむ

釋 ○仁和のみかど云々 春上の「君が爲春の野にいでて」の條に既出。○瀧にそふ 瀧の水に添はる。○しも川下。

大意 残り多くてお別れ申す愚僧のこの涙が、瀧に添つて流れますわ、定めし水が増ると川下では見えることをござりませうか。

評 この法師、抄物に大和國城上郡の人とあれば、石上附近の住僧で、親王の布留の瀧見の御案内に出たものであらう。或は石上の良因院などの住持かも知れない。涙の流水に和する構想は、詩に大分多い。

一含相思涙、臨江灑素秋、碧波如會意、却與向西流。
潮中有妾相思涙、流到樓前更不流。

の類である。さて涙の水に灑の水、量において非常の懸隔のある物を配した。勢ひ奇句が生まれてこなければならぬ。果して「水まさるとや」の誇張、白髪三千丈の李詩仙をも後へに瞠若たらしめる。かくて別恨の深さも見えるのである。又一面から見れば、布留の瀧はさう大いして大きな瀧でないとも、これによつて想像される。實際瀧としては甚だ小さなものであるのだ。

かむなりの壺にめしたりける日、大御酒などたうべて、雨
のいたう降りければ、夕さりまで侍りて、まかり出で侍り
ける折に、さかづきをとりて
つらゆき

秋萩の花をば雨にぬらせども君をばましてをしとこそ思へ

○かむなりの壺云々 「かむなりの壺」は襲芳舎のこと。これは秋上「かくばかりをしと思ふ夜を」の條に既出。「大御酒」は下されの酒をいふ。「さかづきをとりて」は杯を持ちての意。

大意 あの前栽の萩の花を、この雨に濡らすは惜しいものではあるが、それよりもお別れ申す貴方をば、なほの事惜しいとサ思ひますわ。

評 眞淵いふ、「この歌は、兼覽王に杯をさすとて歌へるなり。伊勢物語にも、「狩して天の川に至るといふこと」を詠みて、杯はさせ」とあり。源氏物語にも、源氏の御許へ、今上も院も出でまして、おのく御歌をと

へて、御杯をさ、せ給ふことあり。歌を唱へて杯をさすが、古へのみやびなり。奥儀抄にも其の由見ゆ」と。まことにさもあらう。抑も貫之、躬恒等は、この集撰者の爲に、雷鳴の壺に召されたこと、見えるから、これも必ずその折の事と思はれる。

兼覽王は王氏ではあるが官位はひくいので、今回の勅撰集の事に、奉行か何かで關係してゐた人ではあるまいか。今日しも貫之等は撰集の事で、雷鳴の壺に召され、始めてこの兼覽王に調し、共に賜餐に列して、いよいよ退席の前に、まづ一杯と兼覽王に薦めたものらしい。折柄の秋雨は壺庭の萩の上に濺いで、そのあたらしい光景は、奈良時代の歌人の、一再ならず繰り返して歌つた如くである。乃ちこの詩材を配合して、その雨中の萩以上に、只今お別する君を「惜しとこそ思へ」と、天にも地にも兼覽王の他には人が無いやうに取り成した。當坐の頓作としては一寸面白い。

とよめりけるかへし

兼覽王

をしむらむ人の心を知らぬまに秋のしぐれと身ぞふりにける

○とよめりけるかへし 前の歌を受けて書いた詞書である、しかどと貫之の詠んだその返歌との意。○時雨と 時雨の如くの意。和名抄に「驟雨小雨也之久禮」とある。秋冬の交の小雨を時雨といふ。冬季にのみ限るは後世のことである。○ふり 時雨の降りに、身の舊りをかけた。「身の舊り」は老い行くをいふ。

大意 そのやうに、一寸の別でも私を惜しんで下さる程の貴方のお志を、知らないでをります間に、私の身はサ、この秋の時雨の降るといふやうに、舊く年寄つてしまひましたわい。

評 傾蓋の遅きを憾んだ意が顯然としてゐる。即ち貴君にそんなあり難いお心持があつて下されたのも知らないで、年経ましたといふ挨拶を、折柄の時雨を點景に使つて述べた。景樹の説に「若からましかば未遠く交り語らむをと、知己に逢ひて餘齡少なきを悔めるなり」とはいひ過ぎである。「身ぞふりにける」は、既に老境に臨んだ人の口吻と聞えるものゝ、さまでの類齡ではあるまい。抑もこの作者は惟喬親王の長子である。親王は貞觀十五年に、廿六で薨逝せられたから、その十七八の頃の御子と見ても、この集撰著の延喜の四五年には、やつと四十二である。四十を初老とする支那風の習慣のまゝに、これは詠んだのである。必ず景樹の説に従ふとすると、大抵同年配と見える貫之、躬恒を前に置いて、我れ一人老い朽ちたやうに歎いた譯になつて、穩やかでなくなる。又景樹は「調高し」と評したが、何それ程のものでもない。「秋の時雨とふる」のいひかけも、後人にしばしく模倣されて、折角の一ふしも陳腐になつた。

兼覽のおほきみに、はじめて物語して、別れける時によめ
み つ ね
る

別るれど嬉しくもあるか今宵よりあひ見ぬ先に何を戀ひまし

釋 ○兼覽のおほきみ云々 上のと同じ時の歌であらう。兼覽王は躬恒のみならず、貫之とも初対面の筈なことは、「をしむらむ人の心をしらぬ間」と詠んだのでもわかる。○あるか「か」は歎辭。○あひ見ぬ「あひ」は逢ひの意。相の意ではない。

大意 悲しい筈のお別を致せど、考へて見ればそれとても嬉しうございます事よ、なぜといふに、お目にかゝりましたればこそ、お別れ申すこともあれ、今夜より未だお目にかゝらぬ以前において、何を戀しく思ひませうぞ。
評 「別るれど嬉しくもあるか」と、先づ嬌語を放つて注意を引き付けておいて、さて其の解説を與へた。素より別れぬに増した事はないが、それは出来ない相談なので、第二義を以て姑く満足した。抑も會者定離を苦と観ずることは、事實何處でもおなじ事だ。況や佛教が盛んに宣傳してゐたことである。この一般的思想に對して一寸一轉換を試み、苦中に樂地を發見した。笑の中に涙あるを認めるがよい。これを離合集散を一つにした洞達の見などと早合點しては、大きな謬であらう。なほ春下「残りなく散るぞめでたき」の評語を参照してほしい。「今宵より」の句は、「あひ見ぬ」を隔て、「先に」にかゝる。

題しらず

よみ人しらず

あかずして別る、袖のしらたまは君が形見とつゝみてぞ行く

大意 残り多く思つて別れる袖の涙は、まるで白玉と見えるが、この白玉は貴方のお蔭で出来たもの故、貴方のお形見と存じて、大事に袖に包んでサ行くわ。

釋 泣きつゝ、別れ行く人の作である。おのが涙を人の形見と取り成したのを一ふしとする。さて涙を「白玉」と暗喩して、玉は貴重な物として物に包みなどするから、大事にするの意を轉義して、「つゝみて」といつた。又、上に「袖の白玉」とあるに譲つて、袖に包みてといふべきを略した。袖に包むは元來作者の創語ではない。法華經の表裏珠の典故で、前代からいひふるして居たことである。とにかくこの一語に、人目をかねて涙を抑へ

てるる、作者の態度がほの見えて面白い。

かぎりなく思ふ涙にそぼちぬる袖はかわかじ逢はむ日までに

釋 ○そほち 濡れ透る意。そほ濡る、そほ降るなどのそほも同語である。

大意 この別を限りも無く悲しく思つて泣く涙に、濡れ透つたこの袖は、なかく乾きはすまいわ、又と逢はう其の日まではサ。

評 無窮の離愁に沈まむことを、取り越し苦勞したので、修辭の巧はないが、率直の作である。萬葉集卷十二に、

白妙のわが紐の緒のたえぬ間に戀むすびせむ逢はむ日までに

國遠みたゝには逢はず夢にだに我れに見えこそ逢はむ日までに

朝霞たなびく山を越えていなば我れは戀ひなむ逢はむ日までに

などあると、同調の古歌である。「逢はむ日までに」は、逢はむ日まではの意と同じなことは、萬葉の語例を見て知られる。

かきくらしことはふらなむ春雨に濡衣^{ヌレキ}させて君をとゞめむ

釋 ○かきくらし 「かき」は接頭語。「くらし」は暗くする意。奈良時代には搔^{カキテ}糝^シしといつた。○ことは 上の春

下「ことならば咲かずやはあらぬ」のことと同語。○濡衣^{ヌレキ}させて 奈良時代には、濡れた衣の意にのみ用ひたが、平安時代になつては、無實、寃名の意に轉用した。こゝはその意。

大意 この春雨よ、とても降る程のことならば、いつその事空も搔き暗まして、強く降つて貰ひたいわ、さうしたら、こんな雨降りではと雨に無實をいひかけて、別れて往く人をお留め申さう。

評 雨に雪に托しても、君を留めようとする、これら濃艶な情緒は直に人の心魂を魅するものである。霏々たる細雨の夕、門に臨みて人の歸るを送る、その況致が想ひ遣られる。

初句、顯昭本にかきくづしとあつて、「人のいたく物言ふをも、かきくづしてとこそ中せ」と注した。源氏物語の話だが、こゝには協はない。

しひて行く人をとゞめむ櫻花いづれを道とまどふまで散れ

釋 ○しひて 強ひて。

大意 何程止めても止まらずに、無理やりに歸つて行く人を止めようと思ふわ、櫻の花よ、あの人をどれを道とも迷つてえ行かぬ位に、散つて呉れよ。

評 上なる、

櫻花ちりかひくもれ老らくの來むといふなる道まがふかに (賀)

山風にさくらふきまき亂れなむ花のまぎれに立ち止まるべく (別)

と同一の構想。しかも「老らく」の歌は、殊に奇想を加へてあるから、最も優れてゐる。但「しひて行く」は面

白い。何でもかでも止めた心持が、この一語によつて反撥される。なほ委しくは、上二首の條を參看。

志賀の山越にて、いし井のもとにて、物いひける人の別れ
けるをりによめる
つらゆき

むすぶ手のしづくに濁る山の井のあかでも人に別れぬるかな

○志賀の山越にて云々。「志賀の山越」は春下に既出。「いし井」は石井である。岩ある處に清水の湛へてあるをいふ。古くは、いはるといつた。「物いひける人」とは、男同志にいふ詞でないから、この「人」は女である。○しづく、涓滴。○山の井の、山の井の如くの意。「山の井」は、山清水を堰き溜めた井。詞書の「石井」と同じ物である。○あかで、飽かでの意。梵語に水を阿伽といふより、山の井の阿伽に、飽かでをかけたといふ説は、穿鑿過ぎる。

大意 山の井は浅くて、掬ひ上げる手から落ちる雪の爲に忽に濁るゆゑ、思ふやうに飲み足らぬ残り多い物であるが、丁度その如く、残り多いのにまあ、貴方に別れてしまふことよ。

三句までは、「あかで」にかゝる序である。石井の水は山越の途中では、息づきの爲に誰れもその一杯は汲まずには通れぬ水で、我れも人も立ち寄つて幾掬ひする間に、互に一言二言詞をかはし初めたが、忽に東西と別れてしまふ。逢ふも別れるも極めて假初な事ながら、深く惜まれるやうに詠み成したのが、趣向である。眼前の景趣を借り來つて、序の材料に用ひた。萬葉集卷十一、

泊瀬川速見早瀬をむすびあけて飽かずや妹ととひし君はも

の類型であるが、彼れは修辭にや、粗朴の嫌がある。六帖に、

むすぶ手の岩間をせばみおく山の石垣清水飽かずもあるかな

は酷だ似てるるが、なほ「雪に濁る山の井」の、形容の妙を悉したのに遠く及ばない。掬ひ上ぐる手の股より雪の滴り落ちると、透き徹つた水底の砂が攪き亂されて、忽に濁り果てた浅く涼しい山の井の狀、見るがやうである。俊成卿の風體抄にいふ、

この歌、「むすぶ手の」とおけるより、「雪に濁る山の井の」といひて、「飽かでも」といへる、大方すべて詞毎のつゞき、姿心限りなく侍るなり。歌の本體は、只この歌なるべし。云々。

拾遺集に、再びこの歌を擧げて、次に「三條内侍方達へに渡りて歸るあしたに、雪に濁るばかりの歌は、今はえ讀まじと侍りければ、車に乗らむとしける程に」と詞書して、貫之、

家ながら別る、時は山の井の濁りしよりもわびしかりけり

この詞を見れば、俊成卿以前、作者現存の當時に於いて、既にこの歌が噴々の好評のあつたことが知られる。但、風體抄に、歌の本體のやうにこれをいつたのは、過褒の甚しいもので諾きがたい。又拾遺集のこの歌の詞書に、「女の、山の井に手洗ひむすびて飲むを見て」とあるは、歌の上には適はぬやうである。

道にあへりける人の車に、物をいひつきて、別れける所に
てよめる
とも のり

したの帯の道はかた／＼別るともゆきめぐりても逢はむとぞ思ふ

○道にあへりける云々 「人の車」は女車であらう。「いひつきて」は言ひ寄り着きての意。つぎと濁つて、人してその車に物をいひ繼ぐ意とする釋は協はない。○したの帯の如くのの意。「したの帯」は上衣ウヱガタの下締の帯をいふ。眞淵いふ、「装束の下に着たる物の紐をいふ。いにしへ、帯と紐と通はしていへり」と。契沖が、「下の帯は、道の枕詞なり。伊弉諾尊、日向穗原にして御後し給ふ時、帯を投げ給ひしかば長道磐神となる。これ道の神なり。よりに帯の道とは續けたり」と解いたのは、賛成が出来ない。「下の」といふ語が、それでは無用となる。○かた／＼ 片々の意。○ゆきめぐり 行き巡りの意。

○意 下の帯をするに、はじめは端の方が両方へ別れるが、廻して結ぶと、又出合ふものであるが、その通りに、今往く道はかう右と左へ別れて往くとも、又そのうちには是非とも出合はうと思ひますわ。

評 詩にも歌にも、衣帯に託して思慕の情を寓することが多い。中にもこの譬喩位恰當なのは尠からう。下の帯は、上の帯に對した名稱と思はれる。但こゝは肌付の帯の稱でなく、たゞ下締の帯である。袍や直衣の上の帯は、只一重まはりで前に結ぶ。下の帯は、二重にも三重にも締りのいゝやうに廻して結ぶ。かく必ず行きめぐる筈の物を譬喩に使つて、「逢はむとぞ」おもつたのである。希望に實現性のあることを豫期したことは、深い懇情をもつた趣を説明する。萬葉集卷十一、

玉の緒のくゝり寄せつゝ末つひにゆきは別れず同じ緒にあらむの類想とおもはれる。

古今和歌集卷第九

羈旅歌

もろこしにて、月を見てよみける

安倍仲麻呂

あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

この歌は、「昔なかもろを、もろこしに物ならはしに遣はしたりけるに、あまたの年をへて、え歸りまうでござりけるを、この國より又使まかり到りけるに、たぐひてまうできなむとて出でたりけるに、めいしうといふ處の海へにて、かの國の人、うまのはなむけしけり。よるになりて、月のいと面白くさし出でたりけるを見てよめる」となむ語りつたふる。

○羈旅歌 タビノウタと訓む。昔は年月を亘るのでも、只一夜二夜でも他泊すれば、すべてこれを旅といつた。○もろこし 漢土、即ち支那。○あまの原 「あま」は天空をいふ。「原」は廣い所をさしていふ語。海原、野原など皆同義。○ふりさけ見れば 見ようとする方に振りのけて見るをいふ。これは遠く物を見る時の態度である。萬葉集に、振放と書き、又、振仰而を、フリサケテとも讀んである。「ふり」は接頭語。「さけ」は、放又は、離の義である。○春日なる三笠の山 春日に在る三笠山の意。春日は大和國添上郡にある郷の名。もと、

糟垣の義より出たといふ。三笠山は御笠、御蓋とも書く。春日神社の鎮座まします後方の山をいふ。○かも「か」は疑辭。「も」は歎辭。

大意 大空を遙かに見渡すと、東の日本の方に月が今さし昇るが、あの月は以前わが故郷の奈良の京に居た時、春日の三笠山に出たことであつた月かま。

「春日なる三笠の山」と續けて、月を取り合はせて詠むことは、奈良時代の歌に例が頗る多い。蓋し三笠山は奈良の都の東方に聳えてゐる故である。作者は元來、磯城郡安倍郷出身ではあるが、幼時から學問研究に奈良の京にゐるので、三笠山の月はいつも見慣れて、深く腦裏に印象して居つたらう。故に他國他郷に月を見ては、直に京の三笠山を聯想して、宵々毎に待ち出でし時代を回想し、人を憶ひ、郷土を懐ひ、本國を思ふ。いかに晴れ渡つた夜の月であつたらう。「かも」の用法、極めて輕くて殆ど歎辭に近い。故郷で見た同じ月か否かとまで、疑問したのではない。この詠歎の情味に、わが思ひの外の異郷にさすらつて、月を見ることを悲傷した意が隠然としてゐる。又「見れば」とあるを、「出でし月かも」と承けたとばかり見ては、上下の意が齟齬する。これは二句の下に照應すべき詞のあるのを略したのである。即ち二句と三句との間に、月こそはさし昇れ、その月はといふ詞を補足すると、始めて完全の意義をなすのである。この歌の簡淨な所以も、この省筆から生ずる。風調高邁で、更に工を須ひないが蘊含の妙があり、感愴窮り無く、神韻縹渺として、體格雄渾である。そもく作者仲麻呂が、元正天皇の靈龜二年、遣唐使多治比縣守に従つて、留學生として入唐したのは、十六歳の時であつた。舊唐書東夷傳に、
其偏使仲滿、慕中國之風、因留不去、改姓名爲朝衡、仕歷左補闕、儀王友衡、留七十年、好書籍、

放歸郷、逗留不去、云々。

そのいかに唐土の文化に眩惑して、父母の國を忘れ果てたか、窺はれる。抑も朝廷の留學生を彼の土に遣はされたのは何の爲か。彼が長を取りわが短を補はうの思召ではなかつたか。莫大の給費、巨多の賜暇、以てその學業を成就させたのに、忘恩背信の渠れは、大使の歸國に伴はず、唐の位に居、唐の粟を食ひ、唐の衣を着、唐の天子に仕へて、祕書監となつて、無上の光榮を博したこと、思つて居たであらう。あはれ、この得意満面の渠れ、渠れも亦人である。たま／＼失意あり、憂苦あり、病苦あり、名利の迷雲時に晴れて、本性の月明らかに照る時、獨坐無聊の時に當つては、懷土望郷の念がそこに湧然と起つてきたであらう。法顯三藏が天竺に往つた折、途中漢の扇を見ては悲しがり、病に臥しては漢の食を希つたといふではないか。越鳥は南枝に巢ひ、胡馬は北風に嘶くとあるではないか。頭陀の境涯ですら、鳥獸すらさうである。さては長安一片の月に郷思動くこと萬里、端なくこの一篇の佳作を貽し來つものだらう。かくてこれらの動機は、三十五六年間も逗留した渠れをして、遣唐使藤原清河と共に、歸國の旅装を整へることを思ひ立たせたに違ひない。しかも傍ら玄宗の使命を帯びてゐた。自作の詩にいふ、

銜命將辭國、非才忝侍臣、天中戀明主、海外憶慈親、伏奏違金闕、駢駢去玉津、蓬萊鄉路遠、若木故園隣、西望憶恩日、東歸感義辰、平生一寶劍、留贈結交人。

口調は全く唐への歸化人としか思はれない。この時、王維、包佶、趙驊等の送行の詩がある。又、慕義名空在、輸忠孝不全、報恩無有日、歸國定何年。

とも作つた。海外憶慈親といひ、孝不全といつた點はや、殊勝らしいが、その歸國は只自分の親の爲で、わが

大君の御爲、國の爲などいふ真心は露ばかりも見えない。想ふに、わが大君は渠れが不臣を惡み給うて、「歸りまるこずは、その親どもを罪なはむ」など仰せ下されたのかも知れない。流石にさし當つて親殺しの名を負ふのも心苦しさに、漣りく／＼出立したのだらう。されば海上颯風に遭つて安南に漂泊し、再び長安に還着したのは、寧ろその幸とした事かも測られない。舊唐書の「慕_ミ其中國之風_フ、因_レ留_レ不_レ去_ラ、云々」とあるは、何よりの證據ではないか。仕へて左散騎常侍鎮南郡都護より、光祿大夫兼御史中丞北海郡開國公に至り、寶龜元年_唐の五年七十餘で唐で死に、潞州大都督を贈られた。蜀發の日に向ふに劣ること太しい。安濟泊、夙くこの説を立てゝゐる。

初句、撰者貫之の土佐日記に青海原とある。眞淵が「二様の傳へありしか」と疑つたのは贊成し難い。日記のは、土佐よりの歸途の海上での事なので、青海原となくてはふさはしくない。且は女の筆に托したものであるから、しどけなく聞き僻めたやうに、わざと書き改めたものと思はれる。その證は、續日本紀承和三年の條に、遣唐使に托して仲麻呂に贈位せられた位記の文に、「唯有_二揆_一天_一之章_一、長傳_一、_三擲_一地之響_一」とある。揆は、文選の注に、猶蓋也とある。蓋は笠のことだから、即ち「天の原三笠の山」を摘記した詞である。近藤芳樹亦この事をいつてる。

左註は、土佐日記などに依つて後人の書き加へたものだらう。若しこれに據れば、仲麻呂が清河に伴つて來ようとした時、明州の海濱にての留別の作である。

明州は唐書地理志に、明州屬江南道。開元廿六年以_二城有_一四明山_一爲_レ名云々 それならば、部立も上の離別の部に收めなければならぬ。又歌の趣も、悲的の感情を叙べたもので、送別の宴席での作のやうでない。この調のある處をよく察しなければならぬ。

おきの國に流されける時に、船にのりて出で立つとて、京なる人のもとにつかはしける 小野たかむらの朝臣

わたの原やそ島かけてこぎ出でぬと人には告げよあまの釣舟

釋 ○おきの國に云々 算が隱岐に流された事のおこりは、淳和帝の承和四年、遣唐副使の役で出發する時、大使藤原常嗣が自分の乗船が壊れたので、副使算の船と取り換へたいと、朝廷に願つて許された。それを算は悲つて、病氣と稱して行かず、西道謠を作つて遣唐の事を刺つた。嵯峨上皇、見て大いに怒らせ給ひ、死一等を減じて庶人とし、隱岐に流罪に處した。途上、謫行吟七十韻を作り、當時の稱誦するところとなつた。後、數年を経て召還され、つひに本位に復された。それは帝が特にその文才を愛されたのだといふことである。「船に乗りて出で立つ」は、浪速の津からの舟出であらう。淀や山崎からではない。歌に「八十島かけて」とある。隱岐に行く航路は、大坂から瀬戸内海を漕ぎ通つて、北の海に迂回して出るのである。○わたの原「わた」は海をいふ。「原」は例の廣きをいふ語。○やそ島かけて 「やそ島」は八十島の意。「かけて」は兼けての意。春上、「梅が枝にきぬる鶯云々」の條の、「かけて」を參看。○人には 「人」はわが家人をさす。大意 果しも知らぬ大海を、行先限りもなく、この數多の島々をかけて、今出船したといふ事を、故郷の家人にどうぞ知らせてください、幸ひ其處に居る海人の釣船よ。

詠 「八十島かけて」の八十島は、何處をさしたのか。隱岐行の航路に當る瀬戸内海の島嶼をさしたとも思はれないでもないが、「かけて」の語は、過去から現在に亘るのをいふので、現在から未來へ亘るのをいふのではない。

今は難波津出帆の場合だから、瀬戸内海の島嶼では、「かけて」が未來に亘るから誤用となる。そこで八十島を難波附近に求めねばならぬ結果となつた。つら／＼當時の難波、即ち今の大阪の地勢を按ふと、現在の低地は盡く汐入の海であつて、やゝ地盤の高い處があちこちに島嶼を成してゐたので、姫島だの笠縫島だの田養島だのは、皆その中の一島であつた。八十島はこの島々を稱したもので、「八十」は多數の轉義である。難波の渡津は、今の渡邊橋附近と思はれるから、そこから八十島かけて隱岐行の舟は漕ぎ出すのである。

勅勘を蒙つた流人の身なので、押送の役人は難波の津まで來り、その下官は隱岐まで護送して行くのである。されば公然と京の誰れ彼れに音信する事は、その憚がある。こゝに至つて、「人には」のはの辭に、大きな注意を拂はずには居られない。他人はともかくも、せめて彼の思ふ人ばかりには告げよの意である。單に人にとあるのとは異なつて、差別の意をもつ趣を知らねばならぬ。難波からいよ／＼船出してしまふと、この萬斛の離愁を託すべきものは何もない。僅に千波萬波に浮沈する海士の釣舟を見た。苦しい時の神頼みと同じく、そんなものにも取り縋らざるを得なくなる。もとより釣舟は、消息など取り傳ふべき物でもなく、海士は難波の浦人で都に交渉のある者でもないが、それらの分別を失つて、「告げよ」と頼んだのは、情の高潮に達した狂想で、その詩的情調はこの一句によつて活躍する。さてかくまでに思はれる人は、そも誰れであつたらうか。遣唐の時の上表に、「自分家貧親老、身亦尪弱、當三汲水、薪致匹夫之孝耳」とある。父岑守は以前に歿してゐるから、その親老といふのは母親である。このたよりのない老母をおいて萬里流謫の身となり、わづかに一片の漁舟に託してその熱愛の情を寄せたいと希ふ。感哀窮りない。

渡口郵船風定出、波頭謫處日晴看。

は同時の詩である。併せてその状況を見るに足る。後世平康頼が、

さつま漏おきの小島に我れはありと親には告げよ八重のしほ風

と詠んだのは、この歌を粉本に取つたのである。數多くといふことを「八十」と相換したのもよい。四句と五句との應接、やゝ詩の轉結の落しに彷彿としてゐる。果して作者は詩人であつた。

題しらず

よみ人しらず

みやこいでてけふみかの原いづみかは川風寒しころもかせ山

○けふみかの原 今日三日といふに、甕の原をかけた。契沖は「今日見るといふに甕をかけた」といひ、眞淵、宣長等もこれに従つてゐる。世にこんな拙い辭様はあるまい。従ふべからず。「甕の原」は山城國相樂郡。山城名勝志に、「在木津渡、東一里半許、郷内廣今有九村」と見え、和銅年中離宮を置かれ、聖武帝の天平中、始めてそこに恭仁宮を造られた。○いづみ川 甕の原を東西に貫流する木津川的一名。こゝは甕の原の泉川といふべきを、語調にまかせての辭を省いたのは、篠竝志賀の浦、石川片淵などの例に同じい。○ころもかせ 山衣を借せといふに、鹿脊山をかけた。この山は、名勝志に、「在木津里、東一里半許、山西南半里許有鹿脊山村、瓶原隔木津川一南也」とある。

大意 都を立ち出てから今日は三日目、この甕の原の泉川に來たが、ひどく風が寒いわ、自分に衣を一つ借せよ、川向ひのあの鹿脊山よ。

平安遷都後、あまり遠くない頃の人の作か。都は平安の都だらう。都を出掛けて何かの事情で、旅路に三日ば

かり費して、壘の原に來たと見える。乃ち三日に壘の原をかけた。既に萬葉集に三日原とも書いてあるから、さもあるべき取り成しである。景樹は、「都をいでてけふ」を、壘といふ語の枕として解したが、さう軽く見るべき意調とは思はれない。下句への照應も、事實であつてこそ面白くも聞えるのである。抑も壘の原は恭仁の京の地で、泉川は壘の原を貫流し、これに對して鹿脊山は、川の南岸に沿うて京口を塞いでゐる。されば、「川風寒し」は、實に壘の原を象徴する句で、舊都の荒涼なる景氣まで聯想される。衣を借すことは古への常習で、夫婦間では珍しくない。で川風の寒さが身に入むと思ふと、はかない山の名に寄せても、衣を借せと要求される、その痴想が面白い。想ふに暖い妹が手を離れた旅人の詠作だらう。

打聽に、「顯本には、初句家を出でてとあり」とあるが、今の顯本には見えない。さうした異本もあつたのであらう。

○
ほのくくとあかしの浦のあさ霧に島隠れゆく舟をしぞおもふ

この歌は、ある人のいはく、「かきのもとの人まろがなり。」

○ほのくくと 仄カガの意の副詞。口語のほんのりに當る。○あかしの浦 ほのくくと明しといふに、明石の浦をかけた。「明石は和名鈔に播磨國明石郡明石郷とある。○島隠れゆく 萬葉集には、島に隠れ行くと、島陰を行くとの兩意に用ひられてある。この解は前の意に従つた。島は明石の浦の眞向ひの淡路島をさした。宣長は、「島隠れは海を隔てたる所の隠れて見えぬをいふ。必しも島には限らず」といつた。さては雲隠れ、葉隠

れ、木隠れ、深山隠れを何といはうか。更に據ない隠説である。○舟をしぞおもふ 舟をぞ懐ふといふに、「し」の強辭を挟んだ。惜しの義ではない。

大意 ほんのりと明けてくる明石の浦の朝霧に漕ぎ出して、向ひの島に隠れて見えなつて行く舟をサ、哀れと思ふわ。

明石の阜頭に立つて、海上を眺望しての作だらう。さては、器旅の部に收め難いやうである、下の白山、二見の浦の歌の如く、詞書でもあらばともかくもだがと、傾く者もあらう。されど、須磨明石といひ列ねてその勝景を詠ぶのは、後の事であることを思ふがよい。奈良時代、及びその前後に於ける明石は、實用的船舶の錨地として、著名であつたことを思ふがよい。瀬戸内海の水東に走つて、茅渟灣に注がうとする時、淡路島に迫られて、海上一里餘の明石の迫門を形作る。潮流の干満に従つて、水勢の變化甚しく急なので、渺乎たる木葉舟は風待ち、汐待ち、是非に恰好の錨地を得なければならぬ。この要求を充たすのは、即ち明石の浦である。難波の津からして西し、瀬戸内海からして東する船舶は、必ず此處に船がかりしたものであつた。されば阜頭に燈明臺を設けて、その往來を安全ならしめたのである。萬葉集に、「燈火のあかしの浦云々」とあるは、即ちそれである。萬葉の註者、皆燈火のを枕詞とのみ見たのは、往時の狀況を察しない疎漏といはう。(この燈臺今船の出入の便)そこで明石とさへ歌へば、すべて行旅の作と聞きなされたものである。況やこれは「舟をしぞおもふ」と、哀れに打ち詠めた様は、まさに遊子驛客の吟と知られる。

早朝浦頭に立つて、霧と波との別れ目に漕ぎ行く舟の島隠れしてしまふまで、見送つた光景である。「舟をしぞおもふ」實に天地の間には、わづかに人間の消息を傳へる一葉の舟の動搖は、頗る詩人の感哀をそゝるに足るも

のである。朝の氣分が、あざやかに表現されてある。又「朝霧に鳥隠れゆく」の句だけ断章的に見て、霧があつては舟の行方は見えまいといふ考から、宣長の鳥隠れ説も起つたらしいが、これは、初句の「ほのく」とを、序詞のやうに軽く見た誤からきてゐる。のみならず、霧その物の變化の状態に熟したら、速坐に了解される光景である。五句に「し」の辭を挿んで字餘りとしたので、大きな重みと力量とが加つて、この種の體製の結束を成すに適する。奈良時代の調よりは和びた所はあるが悠遠で、聲調は蒼涼である。けれど公任の九品和歌に、上品の上に擧げて、「詞妙にして餘に心さへあるなり」とあるのは、人麻呂の作と思つたからの諛評だらう。況や「公任」の歌をば三年まで案じて、始めて心得られし」とある顯注の説、或は一十體ありといふ一時軒隨筆の説など、皆耳を尊んで目を卑めた弊説に過ぎない。左註は全然非である。眞淵が「風調既に人麿のにあらず。剩へ撰者貫之も人麿のとせざることは、後に又勅に依りて撰び出でたる新撰和歌の序文に、『拙始』自弘仁二至于延長二詞人之作」と書いて、この「ほのく」との歌をも收めたり。然らば、嵯峨帝の弘仁にさしつぎて、天長承和の頃の人の歌とせしこと明けし」といつたのは、確論である。

又舊本、今昔物語卷廿四、小野篁被_レ流_二隱岐國_一時讀_二和歌_一語の條に、上に見えた「わたの原八十島かけて云々」の歌を擧げて、次に、

明石ト云フ所ニ行キテ、其夜宿テ、九月許リノ事ナリケレバ、明ボノニ不被_レ寢テ詠メ居タルニ、船ノ鳥隠レタルヲ見テ、哀ト思ヒテ如此ナム。

ホノノトアカシノ浦ノ云々

トゾ詠ミテ泣ケケル。コレハ、篁ガ返リテ語ルヲ聞キテ、言ヒ傳ヘタルトナリ。

とある。これに據つて、眞淵は、直に篁の作とした。長野義言は更に一步を進めて、これは篁の自作でなく、篁の鳥ゆきを送りにきた人の濱邊で詠んだ歌だらうとの新案を立てた。この二首、果して同時の詠であるならば、この集にも八十島の歌に續けて擧げてよい筈ではないか。又一つは篁の名を署し、一つはよみ人しらずと記す筈がないではないか。早まつた断定である。

あづまの方へ、友とする人、一人二人いざなひていきけり。
三河國八橋といふ處にいたれりけるに、その川のほとりに、かきつばたいと面白く咲けりけるを見て、木の蔭におり居て、かきつばたといふいつもじを、句のかしらにすゑて、旅の心をよまむとて詠める
在原業平朝臣

から衣きつゝなれにしつましあればはるくきぬる旅をしぞ思ふ

○あづまの方へ云々 「あづま」は吾郷で、東國をいふ。廣い意では、京の東、逢坂の關から彼方を云つた。

「八橋」は行囊抄、名所記、方角抄等に據れば、碧海郡池鯉鮒宿の東方の里村の續きに、舊址があるといふ。確かなことは分らぬ。伊勢物語に、「水のくも手に流れ別れて、橋八つわたせるによりてなむ、八橋といひける」とある。「かきつばた」は燕子花、杜若など書く。和名抄に、馬蘭を加木豆波太と訓んだのは謬つてゐる。さてこの詞書の書き方は極めて拙い。この集の詞書は専ら短いのを主としてゐるのに、業平のに限つて長く書いて

ある。伊勢物語の内容は、虚實混淆した頗るしどけないものを、頑なに業平の自記なり、實録なりと信じ
た者が、物語に據つて、猥りにこの詞書を書き入れ、或は書き改めなどもしたらしい。それ故伊勢物語の本文
と較べると、その斧鑿の痕があり／＼として見るに堪へない。○から衣きつ、「なれ」にかゝる序の詞。「から
衣」は、もと韓國の衣の義。韓唐の物のめでたいので、からを美稱として用ひるやうになつては、から衣は、
單に衣といふも同じ意となつた。こゝは後の意。さて衣は着襲らす物故、人に馴染む意をかけた。○つまし
妻しである。衣の褌を寄せた。「し」は強辭。○はる／＼きぬる 遙々來たの意。「はる／＼」は遙かの意に、張
るをかけた。張るは衣の縁語。

大意 都に狎れ馴染んだ、衣の褌といふ名の妻がサあるから、別れてはる／＼と來たこの旅をサ、心細く悲しく
思ふわ。

初二句のいひなし、萬葉集に、「唐衣きならの里」とあるに似てゐる。「なれ」「つま」はる／＼など、衣の縁
語を點綴し、しかもかきつばたの五文字を、一字つづ句の頭に置いた細工、手練の極である。三句の字餘りな
のが、よく上來の語勢に對抗し得て、腰折の難を免れた。結句の字餘りに就いては、上の「ほの／＼と」の歌の
條に既に叙べた如くである。氣強く振り切つて京を出ては來たものゝ、長い旅の空には、流石の丈夫心も鈍つ
て、端なく家人を思ひ出して、轉た戀戀の情に堪へない趣かほの見える。伊勢物語に、「皆人乾飯のうへに涙落
して、ほとびにけり」とあるは、さと思はれる。但、この朝臣の詠としては下作である。

むさしの國としもつふさの國との中にあるすみだ川の

ほとりにいたりて、京のいと戀しう覺えければ、しばし川
のほとりにおり居て思ひやれば、かぎりなく遠くもきに
けるかなと思ひわびて、ながめをるに、わたし守はや船に
乗れ、日もくれぬといひければ、舟に乗りて渡らむとする
に、みな人物わびしくて、京に思ふ人なくしもあらず。さる
をりに白き鳥のはしと足とあかき川のほとりに遊びけ
り。京には見えぬ鳥なりければ、みな人見知らず。わたし守
に、これは何鳥ぞと問ひければ、これなむ都鳥といひける
をきゝてよめる

名にしおはゞいざ言とはむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと

○むさしの國云々 この詞書も伊勢物語の抄録で、いよく拙い。「武藏と下總との中にあるすみだ川」とは、
今の武藏の隅田川であらう。さて隅田川の名の起源は、川の東の葛飾郡に、隅田の里がある故で、葛飾郡は、
この集の時代は下總に屬して、川を挟んで武藏と對してゐたらしい。壽永、建保の間は武藏に屬し、永祿の頃
は復下總に屬し、貞享、元祿の頃からは、また今の如く武藏に屬した。委しいことは、高田與清の松屋棟梁集
を参照するがよい。「みやこ鳥」は伊勢物語に、「白き鳥の嘴と足と赤き、鳴の大ききなる、水のうへに遊びつ
つ魚を食ふ」とある。山岡明阿が説に、「都鳥は諸説ありと雖も、鷗なる事疑なし。鷗に大小二種あり。大鷗を

歸東の方言に濱猫といふ。その聲の似たればならむ。小なるは鳩ほどありて、その聲細くひくし。墨田川などに來るはこの小鷗なり」とある。この鳥、嘴赤く腹白く、背は鼠色である。けれどふと見れば白く見える。梅亭鞠場の都鳥考の説は異説である。小野蘭山の本草啓蒙に、「都鳥のミヤは、聲によりておほせ、コドリは、よぶこ鳥、みさこ鳥などの小鳥に同じく、大鳥に對しての稱なり」とある。○名にしおはゞ 名に負ひ持つならばの意。「し」は強辭。○言とはむ 物言はむの意。大祓の詞に、「語問志磐根木根立」、萬葉集に、「言とはぬ木すら」など多く見えて、口を利くことをいふ。尋ね問ふの意に用ひるは、後世の轉訛である。○ありやなしや

「や」は疑辭。事無くて在りや否やの意。生死の事と見るのはや、早からう。
大意 都といふ名を負つて居るならば、定めて京の事をよく知つて居らう程に、どれ話して見よう、都鳥よ、私が思ふ都の人は、今無事で居るか如何かとサ。

「言とはむ」は物言はむの意ではあるが、それも「ありやなしや」と物言ふのだから、おのづから尋ね問ふの意にはなる。只語に分寸の差があるのである。都鳥といつたからとて、京の事がわかる筈もないのを、物言はむとする穉氣痴態、いとく哀れ深いものがある。蓋し作者は測らざる風流罪過から、鬢を切つて放され、心ならずもの東下り、長い旅寢の果は、又この川一つ渡つて國境を越える事かと思ふと、無量の郷愁は、その胸に湧いたであらう。これ暫く川のほとりにおりて、渡船を躊躇した所以である。流石の夏の長い日も、やがて暮れてくる。船頭はもうしまひ舟だと催促する。厭でも渡らねばならぬ。ほんに情なく感じたであらう。たまく白い鳥が、夕汐時をねらつて魚をあさる。都育の物珍しさに、何鳥かと問ふと、船頭が、「これなむ都鳥」、貴方は都人でも、御承知はないのですかといひさうな口振、只この「都」の一語、何たる懐かしい響を作者

の心の奥に傳へたであらう。かうなると、鳥であらうと何であらうと構つてはゐられない。「いざ言とはむ」の一案が湧然と起つてくる。この心理は、なほ溺れた者が蘆の一片にもすがるに等しい。その郷愁の對象となるものは、勿論「わが思ふ人」である。「ありやなしや」と、一正一反してその兩端を叩いたのや、同韻の折り返されたのやで、姿致節奏兩つながら面白く、千古人口に膾炙されたのも、決して偶然でない。

題しらず

よみ人しらず

北へ行く雁ぞ鳴くなる連れてこし數は足らでぞ歸るべらなる

この歌は、ある人「男女もろともに、人の國へまかりけり。男まかり至りてすなはち、身まかりにければ、女ひとり京へ歸りける道に、歸る雁の鳴きけるを聞きてよめる」となむいふ。

釋 ○北へ行く雁 春の歸雁である。北はその歸る方角で、即ち雁の故郷の方。

大意 故郷の北の方へゆく雁がサ、あれ鳴くことよ、故郷へ歸るは嬉しかりさうなものを、あのやうに鳴くは、故郷から連れ立つて來たことであつた、そのうちの一つが死に失せて、來た時とは數が足らなくなつてサ、歸るのであるさうな、丁度自分のやうにサ。

評 伉儷を失つた人の、歸家途上の作である。たまく北歸の過雁を聞く。我れも歸る旅、彼れも歸る旅、また彼れも鳴き、我れも泣く、外面的の境遇が真によく相似てゐる。乃ち内面的境遇も我れと同様で、おなじ不幸に泣くものと看取して、相憐んだ推察は、秋上の歌に「長きおもひは我どまされる」、「わがごと物や悲しかるらむ」など、蟲の音を詠んだのと同規である。又「數は足らで」といつて、そのうちのあるもの、死に失せた

ることを思はせたのは婉曲である。「連れてこし」の一句は四五句の数の足らで歸るの對映で、悼亡の情がいよ
いよ強く表現される。

左註は、大和物語から取り合はせたものか。けれども、大體の事情はさうであつたらうと思はれる。又季吟が、
「哀傷部に見えた在原滋春が、甲斐國に下りける時のなり」といつたのは妄である。土佐日記にも、「くだりし
時の人の數足らねば、古き歌に、「數はたらでぞ歸るべらなる」といふことを思ひいでて」とあつて、古歌とこと
わつてゐる。滋春は撰者貫之と同時の人である。もし滋春の作なら、詠人しらすの歌とする筈もない。

あづまの方より、京へまうてくとて道にてよめる　お　と

山かくす春のかすみぞうらめしきいづれ都のさかひなるらむ

○まうてく　參出來の音便。

大意　もう京の山が見える筈を、隠して見せぬあの春の霞がサ、怨めしいわ、あ、早く往きたいと思ふ都の境
は、何處らあたりであらうぞ。

意地の悪い霞よと怨んだ餘意に、婦人の情致が現はれて面白い。又田舎からはじめて上つて來た人では、こ
れほどまで怨む譯がないらしいから、これはもとからの都人の、東から歸つて來た折の作であることは明らか
である。韓愈が潮州に貶せられて行く時、「雲橫三峯嶺、家何在」と作つたのも、往返の別こそあれ、その意は同
じである。作者の父壬生益成は、仁和四年遠江介に任せられた。若しは秩滿ちて歸京の途次、作者は伴はれて
ゐる詠じたものか。

一句、六帖に霞ぞ春はとある。これでは、怨めしく思ふは春にのみ限つたやうに聞えて、穩やかでない。

越の國へまかりける時しら山を見てよめる

み　つ　ね

きえはつる時しなれば越路なる白山の名は雪にぞありける

○越路　北越地方の道中をいふ。

大意　雪の消え果て、しまふといふ時がサ無いから、越路にある白山といふ山の名のおこりは、雪からでサあつ
たわい。

雪の白色から山の名が生まれたのは、そも／＼からの事で、今更らしくいふに當らない。然しさういふのは
理窟で、この山に始めて、出會つた作者の感想は、かうなのだ。

あづまへまかりける時、道にてよめる　つ　ら　ゆ　き

絲による物ならなくにわかれ路の心ほそくもおもほゆるかな

○よる　縊ること。

大意　絲に縊る物は皆細いが、自分の心はそれでも無いのに、家を別れて遠く行く旅の道は、一通りならず、心
細くまあ思はれることよ。

「心細く」の縁語から絲を聯想し、配合して、離愁に堪へぬ心が弱り細るのを、怪しみ歎いたのである。徒然

草にいふ、

絲による物ならなくといへるは、古今集の中の歌屑とかやいひ傳へたれど、今の世の人の詠みぬべき事柄とは見えぬ。その世の歌は姿詞この類ひのみ多し。この歌に限りてかくいひ立てられたるも知り難し。全く必ず歌屑といはば、集中にこれよりも劣つたのが数多ある。兼好が「知り難し」と訝つたのも尤もである。初二句は、心の絲に纏られぬのをいふのである。それを中村知至が「絲に纏る物とは、纏り合せある絲といふにて、其の絲を一方にわくれば、二筋となりて細く別る、故に、細くと縁語をつらねて、歌とせるなるべし」と解したのは、鑿説に過ぎる。宣長が、「別れ路は絲に纏る物ならなくに」の意に釋いたのは、いよくいけない。さてこれは離別の意なので、詞書を添へて、殊更に旅行の途次に詠んだものであることを知らせた。拾遺集に、離別の部に再び收めたのは、この意を心得かねての所爲である。二句、源氏物語總角の巻に、「物とはなしにと、貫之がこの世ながらの別をだに、心細き筋に引き掛け、むを云云」とある。

かひの國へまかりける時、道にてよめる　み　つ　ね
夜をさむみおくはつ霜をはらひつゝ、草の枕にあまたたびねぬ

○はつ霜　秋冬の交零るはじめての霜をいふ。○あまたたび　數多度。
大意　道中筋は、この頃は夜がサ寒い故に、降る初霜を拂ひくして、その霜のおく草を枕に、幾度もく寝たわ。

作者が甲斐權少目に補任したのは、寛平六年二月廿八日であるが、その年の秋の末になつて旅装を整へたものか。京からの公程は十三日と定まつてゐるから、草の枕は「數多たび」といはれよう。「おく初霜を拂ひつゝ」は誇張ではあるが、旅の艱苦が想ひやられる。當時の旅行の状態を知悉したものは、これを實境實詩と讚するに躊躇すまい。眞淵いふ、「隠れたる所なくて、續け柄面白くあはれなり」と。但幾夜も枕の霜を拂ふのでは、「初」の意義がたじろぐ。
結句、新撰和歌に寐むとあるはわるい。

たぢまの國の湯へまかりける時に、ふたみの浦といふ所
にとまりて、夕さりのかれいひたうべけるに、ともにあり
ける人々、歌よみけるついでによめる　藤　原　兼　輔
夕づく夜おほつかなきを玉くしげふたみの浦はあけてこそ見ぬ

○たぢまの國云々　「但馬國の湯」は想ふに古から著名な城崎の温泉だらう。「ふたみの浦」は契沖の説に、「伊勢の海にもあれど、これは播磨にて、今土俗ウタミと呼べる所なり」と。秋成いふ、「今但馬國にも二見と呼べる所あり。城崎のある邊なり。兼輔のこゝにて詠まれしとかの里人はいへど、所のさまを見るに然るべからず。この歌によりて附會したるものぞ。彼處へ行かむには、難波より舟に乗りて播磨路を經つゝ、高砂のあたりより舟を上りて、北の方山路分け入る道あり。いにしへはその道をや行きけむ。然れば、播磨なるぞ道の行

手なる」と。いづれもしかと定め難い。「夕さりのかれいひ」は夕飯の意で、「かれいひ」は乾飯即ち糲である。古へは行路に必ず糲を携へて、所々で水に浸して食つたのである。「ともに」は共にの意、随伴の意ではない。○夕づく夜 日の入りて夜に成り行く頃をいふ。秋下「夕づく夜をくらの山に」の條に既出。○玉くしけ 「玉」は美稱。「くしけ」は櫛笥で、化粧道具を容れる笥をいふ。蓋、身、懸子がある。○ふたみ 二見に、蓋身 をかけた。○あけて 明けてに、開けてをかけた。

大意 夕暮の闇い頃は、分明には見えぬものを、それを無理に見ようより、玉櫛笥の蓋や笥やといふ名のこの二 見の浦は、櫛笥の蓋を開けてといふやうに、夜が明けてからサ、とくと見ようと思ふわ。

詞書に、「ついでに」とあるに注意を要する。俱にゐる人達は皆この浦の景色に見耽つて、歌詠みかはしなど したとすると、やがて夜も更けたらしいさまである。されば、明日になりてこそと警告した歌で、乃ち事のつ いでなのである。地名に據つた縁語の鎖り、先づ狂歌の一體である。かやうの體は、平安の京になつて發達し たもので、當時の人士は珍しがつて喜んだらしい。二句の下、意解の如くに詞を補はないと、「を」の辭に打ち 合ふべき詞がない。

新撰和歌には、三句玉手笥、四句ふたみの浦をとある。

惟喬のみこのともに、狩にまかりける時に、あまの川とい
ふ所の川のほとりにおりて、酒などのみけるついでに、
みこのいひけらく、狩して天の川原にいたるといふ心を

よみて、さかづきはさせといひければよめる

ありはらの業平朝臣

かりくらし 棚機つめに宿からむ 天の川原にわれは來にけり

○惟喬のみ云々 これも伊勢物語によつて書き加へた後人のしわざであらう。落筆唐突で、他の例に協は ない。伊勢物語、惟喬親王交野の櫻狩の段に、

御供なる人酒を持たせて野より出で來たり。この酒をのみてむとてよき所を求め行くに、天の川といふ所に いたりぬ。親王に右馬の頭大みき參る。親王宣ひけるは、交野を狩りて天の川のほとりにいたるを題にて盃 はさせと宣ひければ、詠みて奉りける。

とあつて、この歌を擧げてある。「天の川」は河内國交野郡（今北河内郡）牧野村禁野にある。○かりくらし 狩して日を暮らしての意。句の下、ての助辭が畧かれてある。勢語を釋く者、その本文に泥んで、櫻狩とした ものがあつたが従ひ難い。櫻狩を打ち任せて只狩とのみいつた例がない。○棚機つめ 秋上「天の川もみちを橋 に」の條に既出。○天の川原 秋上「あき風の吹きにし日より」の條に既出。

大意 いつその事今日一日を此處に狩し暮らして、棚機様に今宵の宿を借らうぞ、歩きまはつて、丁度幸ひ棚機 の居る天の川の川原に、思ひかけず來たわい。

評 「棚機つめに宿借らむ」の唐突にして、且奇矯なのに人耳を敬てしめて、さてこの天の川を、かの天の川に暗 喩して、天上の天の川原に來たと斷じた。作者の人を翻弄すること實に甚しい。この技倆は業平に至つて始め

て見られた。到底諸家の企及すべき所でない。景樹は、「下に漢の張鷟が槎にのりて、漢を窮めし故事を思へり」といつたが、恐らく無用の説と思はれる。初句を古來の多くの註者、四句の上に冠せて、狩り暮らして天の川原に來りけりの意に釋いてゐるのは疎漏である。

みこ、この歌をかへすくよみつ、返しえせずなりにければ、ともに侍りてよめる
きのありつね

ひと、せに一たび來ます君まてば宿かす人もあらじとぞ思ふ

【釋】○みこ云々 伊勢物語には、前の歌を擧げて、「と聞えければ、この歌をかへすくよみつ誦し給ひて、返しえし給はず。紀の有常、御供につかうまつれり。それが返し」とある。○ます 座すで、こゝは敬語。大意 いや／＼天の川では、一年に一度つのお出でなされる彦星の君を待つことだから、他の者が宿を借らうといつても、借す人も容易にあるまいとサ思ふわ。

【評】彦星のことを、「一年に一度來ます君」と婉曲にいひ成し、織女星のことを「宿かす人も」と大らかにいつたのが、含蓄があつて面白い。業平の歌の宿借りて寐て行かうといふのを承けて、織女は操正しく、思ひ入つて彦星の君を待てば、天の川原には宿の借し手もあるまいと、裏を缺いて出た。貞操な織女と、色めいた業平とが自然對照されてゐる。景樹の、彦星を惟喬親王に擬へたといふ説は諾ひ難い。親王は既に天の川原に來て居られるのだから、更に「待てば」とはいはれない。狩場先の交野の院で、年若な親王の思ひ上つて居られる御容體、天が下の好き者業平が大御酒奉らうとするを抑へて、酒の好下物としての歌の御所望に、取り敢へず棚機様と

寢て行かうの、例の本性を見はしたたはれ言、素より歌好きの親王も、業平の歌の出榮えしたのに隠れてか、返歌が出来かねて呻吟して居られると、座に侍つてゐる有常が黙しかねて、この一吟を提けて助け船と出たなど、その夜の狀況を想像すると、頗る興味のある團居であつたらう。

朱雀院の奈良におはしましける時に、手向山にてよめる
すがはらの朝臣

このたびはぬさもとりあへず手向山紅葉の錦神のまに／＼

【釋】○朱雀院云々 「朱雀院」は宇多上皇を申す、委しくは秋上をみなへし秋の野風に」の條に既出。「手向山」は大和の奈良ではあるが、今いふ若草山の南麓に當る手向山神社の處ではあるまい。往時の奈良に入る本街道は奈良山の中央部歌姫越と稱する處で、奈良坂もその坂である。奈良に出入する者は皆その道祖神に手向したものと見え、遂に手向の名がこの山に附いたと思はれる。○このたび 度の意に、旅をかけた。○ぬさもとりあへず 「とる」は何にまれその事を取りまかなふ意である。「あへず」は秋下「千早ぶる神の忌垣に」の條に既出。萬葉集には不堪をアヘズと訓んである。○神のまに／＼ 神のお心任せにの意。「まに／＼」は儘に／＼の略で、隨意の義。

大意 何時はともあれ此度の旅は、秋の時分なので、道の神にお手向け申す筈の幣も見すほらしくて、捧げるに堪へぬわい、たゞこの手向山の見事な紅葉の錦を、幣として捧げますから、神のお心任せに御受納下され。

【評】宇多上皇のこの御幸は、昌泰元年十月の事で、貞數親王及びこの歌の作者道眞を従へ、遂に道眞の高市郡の

山莊に宿つて、遂に吉野の宮瀧に至り、龍田山を経て河内に入り、住吉社に詣でられた。奈良の御通過は、十月中の事と思はれるから、紅葉は手向に眞盛りであつたらう。抑も幣は神に捧げる布帛の料で、通例旅行者の携帶する切幣などは、ほんの衣裳の裁屑や何かの、粗末な物と思はれる。錦などは貴重品だから使はない。そこでこの紅葉を錦に譬喩して、これほど立派な錦は、神のお心任せに賞翫なされてゐるから、我が數ならぬ幣の如きは捧げるまでもないといふ意を、更に一轉振して歌つた。畢竟幣を對照の具に用ひて、紅葉のめでたさを歌つたものである。「このたびは」とことわつたので、これまでしばらく手向を越えた事が知られた。それは高市の山莊への往返で、もあつたらう。萬葉集に、

いなだきにきすめる玉は二つなしこなた彼方も君がまに〜 (卷三)

春風の音にし出なばありさりて今ならずとも君がまに〜 (卷四)

玉きはる吾が山のべに立つ霧の立ちとも居とも君がまに〜 (卷十)

たらちねの母に知らえずわが持てる心はよしる君がまに〜 (卷十一)

の儔、なほ澤山ある。作者はこの風體を學んで、や、平安朝の皮肉を加へた。

初二句に就いて諸説ある中に、或は院のお供だから、私の幣は取りあへずの意といひ、或は院のお供で多忙の爲に都を出た時、幣も取り持ちあへずの意ともいふのがある。景樹いふ、

私の幣はとるに堪へずとならば、君が爲の幣をばいよくとらるべきなり。打ち任せて此度はとらずといふべけむや。また院は微行を好ませ給ふと雖も、大和、攝津、河内の遠方を巡幸し給ふらむは、流石に搖り満ちたる御しつらひなりけむ。況や右大將ばかりの人の、御供に仕へ奉り給ふなるをや。卑賤の子の、周章し

く取る物も取り敢ず騒ぎ立つと侘しからむや。これとりあへずといふ詞を、急遽者卒の意と思ひ泥めるよりの僻言なるべし。

と。この駁論はよろしい。

素性法師

手向にはつゞりの袖もきるべきに紅葉にあける神やかへさむ

○つゞりの袖 僧服で、衲衣の事である。人の捨て、顧みぬ糞掃に均しい襤褸を拾ひ集め、これを綴つて衣とするのでいふ。もと袈裟の異名である。天竺では、袈裟の外に衣はない。日本支那の寒國は、特別に下に衣裳を着る。○あける 飽きてあるの約。

大意 この手向山の神への手向には、出家の身もこの衲衣の袖をも切り刻んで、幣にして手向けてよい善なのに、あの錦のやうな見事の紅葉をば幣と受けて、思ふ存分見て御座る神様だから、衲衣の袖の小切などは、入らぬといつてお返しなされる事であらうか。

評 それ故にさし控へて居るの餘意がある。志は松の葉、切つてはならぬ袖さへも切るべしといふのが、既に面白いのに、「紅葉に飽ける神やかへさむ」の意外の落想。神意を人間の心理と混一にしての想像に、更に一段の詩趣を生ずる。又「つゞりの袖」とあるに對へて、おのづから神の飽き給へる紅葉は、錦の如くあるべきことが想ひ知られる。畢竟上のもこれも、手向の神を取り合はせて、紅葉のめでたい限りを形容したので、面白いのは、神やかへさむ綴の袖、格調の高いのは、神のまに〜の紅葉の錦である。

作者は當時、石上の良因院の住持であつた。宇多天皇はこの大和御幸に、作者を召して戯れに良因朝臣の假名を賜ひ、供奉を仰せ付けられた。詩人道真、歌人素性を左右に従へられて名所巡り、いかに興味の饒い御幸であつたらう。當時他に歌人もあり詩人もあつたが、特にこの兩人に供奉を仰せつけられたことは、道真も素性も、大和の地に殊なる縁故があつたからである。

古今和歌集卷第十

物名

うぐひす

藤原敏行朝臣

心から花のしづくにそぼちつゝうぐひすとのみ鳥の鳴くらむ

○物名 モノ、ナと訓む。物名は名詞の事であるが、こゝは詠歌の技工上の特殊の名稱に用ひられてゐる。即ち名詞を他の意に取り成して、歌のうちに詠み込むをいふ。奥儀抄に、「隠題歌、古今集并拾遺集の物名部といふはこれにや。近代の人これを稱^{フル}隠題^ト也。件歌は爲^ル題物の名を歌の表に置きて、他の心を述ぶる也」と見え、八雲御抄には、「物名、これは隠題也。物の名を隠して詠む歌なり。古今などには、隠す物をやがて題にて、多くはその心を詠めり。」とある。その組織の種類からいへば、隠すべき名詞即ち物名をやがて題としてそれを詠じたのと名を歌の表に置いて、他の事を歌つたのとの別がある。さて、この體製は萬葉集に見えない。平安朝になつて、國歌の復興に連れて創められた一新體であらう。詩に離合詩といふ一體がある。文體明辨附録に、「按離合詩有四體云々。其三、離^レ二字^ヲ偏旁^ヲ於^テ二句之首尾^ニ、而首尾相續爲^ニ一字^ト。其四、不^レ離^ニ偏旁^ヲ、但以^ニ物二字^ヲ離^ニ於^テ一句之首尾^ニ、而首尾相續爲^ニ物云々。」と見えて、唐の陸龜蒙が詩、

物名

松間對

子山園靜憐^ニ幽木[。]公幹詞清詠^ニ華門[。]月上風微瀟洒甚[。]斗醪何惜置^ニ盈樽[。]

の如きは、その一例である。國朝詩人、また、字訓詩の體あり。本朝文粹に、清原真友が詩、
禾失會知^レ秩[。]中心豈忘^レ忠[。]里魚穿^レ浪[。]江鳥度^レ峽[。]鴻[。]火盡仍爲^レ燼[。]山高自作^レ嵩[。]色絲辭不^レ絕[。]凡虫
泣^ニ寒風[。]

の類である。是等の遊戯文字は、専ら詩にのみ行はれてゐたのを、復興期の歌人等が欽羨の餘り、こゝに物名
の一體を創めて、わが誇としたものだらう。(以上岡井慎吾の説に據る) ○心から「から」はよりの意。○う
くひす 憂^ク干^スずの意。鶯を隠した。

大意 おのが心から、花の雫に濡れ^クして、それを人の知つた事のやうに、何で、つらく乾かぬとばかり、あ
のやうに鳥が鳴くのであらう。

評 歌の意も、鶯を詠んである。「憂^ク干^スず」は、鳥の鳴く理由をいつたまで、う^クひ^スすと鳴くのではない。そ
を思ひ誤つて、大江匡房が、

いかなれば春くるからにう^クひ^スすのおのれが名をば人につぐらむ
を初めて、鳴聲として詠んだ歌が後世に多い。

ほとゝぎす

くべきほどときすぎぬれや待ち侘びてなくなる聲の人をとよむる

釋 ○くべきほどときすぎぬれや 來べき時期過ぎぬれやの意。時鳥を隠した。「ぬれや」はぬればにやの意。○
とよむる 響動せしむる意。

大意 時鳥が待つ雌の來る筈の時分が過ぎたかして、それを待ちつらがつて鳴き立てる聲が、時鳥が鳴く^く
と、人をワヤ^クくさせるのであらう。

評 時鳥のうへの戀を詠じて、下には作者自身の戀を思つたのだらう。

うつせみ

在原 滋春

浪のうつせみれば玉ぞ亂れけるひろはば袖にはかなからむや

釋 ○浪のうつせみれば 浪の打つ瀬見ればの意。空蟬を隠した。「うつせみ」に二義ある。現し身の轉語である
現せ身の意と、空蟬即ち蟬の蛻の意とである。但後の方は更に一轉して、直に蟬の事にもいつた。○はかなか
らむや 「や」は歎辭。

大意 浪の打つ川の瀬を見れば、見事の玉がサ亂れて散るわい、しかしあの玉は、袖に拾ひ入れようならすぐ
消えて、はかないだらうよ。

評 歌は水珠を詠んでゐる。四句は袖に拾はばを倒置した。

かへし

壬生 忠岑

袂よりはなれて玉を包まめやこれなむそれとうつせみむかし

物名

○缺よりはなれて 袂より外にてといふ程の意。○包まめや 包まむやはの意。「や」は反動辭。○それとそれなるとの意。○うつせみむ 移せ見むの意。空蟬を隠した。

大意 貴方は、袖に拾ははかなからむと仰つしやるが、袖を除けての外に、玉を何に包まうか、包む物はありませんわ、やはり袖の上に、これがサそれであると取り移して見せなさい、私が見ませうわサ。

評 汝は移せ、我は見むとあるべきを、主語を略いて單語を重疊して、簡淨にいひなした。この語法は後世の戯曲文に、多く襲用されてゐる。

うめ

よみ人しらず

あなうめに常なるべくも見えぬかな戀しかるべき香は匂ひつゝ

釋 ○あなうめに常なる 「あなう」で切り、「めに常なる」と讀む。「あな」は歎詞、「う」は憂しの畧、「めに常なる」は目に何時も觸れるをいふ。梅を隠した。

大意 梅の花はあゝ愛いわ、すぐ散つてしまつて、目に常住見られさうにも見えぬことよ、その癖後で戀しかりさうな香は、匂ひくしてサ。

評 「べく」「べき」が重複してゐる。

かにはざくら

つらゆき

かづけども浪のなかにはさぐられて風ふくごとに浮き沈む玉

釋 ○かにはざくら 和名鈔に、「樺木皮、可^ナ以^テ爲^ル炬^ト者也、和名加波、又、加仁波」。又、源氏物語に、「外の花は八重さく花櫻盛り過ぎて、かばざくらは開け、藤は遅く色づきなどはすめるを」とある樺櫻がこれである。宣長は「和名鈔に櫻桃、一名朱櫻、和名波々加、一云^ニ邇波佐久良とあり。邇の上に加の字の脱ちたるにて、加邇波櫻なり」といつたけれど、樺櫻は花が白いから、朱櫻とはいへない。小野博いふ、「樺木は、葉は桑の葉に似て尖れり、四月に白色の細花開く、樹皮白くして黒斑あり、横理ありて櫻皮と同じ、物など纏き綴ちするに用ゐる」と。○かづけども 潜けども。○なかにはさぐられて 中では探られないで。樺櫻を隠した。大意 海の底に潜つて取らうとするけれども、浪の中では探り當てられないで、風の吹く度毎に、浮いたり沈んだりする玉であることよ。

評 滄海に珠を撈る趣を思つて、波の白玉を詠んだのである。

すもゝのはな

今いくか春しなればうぐひすもものはながめて思ふべらなり

釋 ○すもゝ 酸桃の義で、李のこと。○うぐひすもものはながめて 李の花を隠した。

大意 春は今幾日あるぞ、もはや幾日も春がサ無いから、鶯も自分と同じやうに、辛氣さうに物思をする様子であるわ。

評 春上に「鳴きとむる花しなれば云々」と詠んだのと、着想も叙法もおなじで、作者も同じ人である。

景樹は、「ながめて物とは誰れもいふべきを、倒置したるが調のいみじくめでたきに、それはた物名となれ

る、奇なり」といつた。

からも、のはな

ふかやぶ

あふからもものはなほこそ悲しけれ別れむ事をかねて思へば

○からも、杏のこと。韓桃、辛桃の兩義がある。○あふからもものはなほ、杏の花を隠した。

大意 逢へば嬉しい筈なのを、逢ふにつけてもやはり物悲しいわ、逢へば又別れる事のあるのを、豫て思ふからサ。

離別の「別るれど嬉れしくもあるか」の歌と、その意は反對である。但これは平叙。

たちばな

をのゝしげかげ

足引の山たちはなれ行く雲のやどり定めぬ世にこそありけれ

○たちはなれ 橘を隠してある。○行く雲の「の」はの如くの意。

大意 山を立ち離れて行く雲の、宿り所の定まらぬやうに、行末の止まり所の、知られぬ世の中でサあつたわい。

人生を行雲流水に擬へて歎ずるのは、支那の文學に、昔から數多見えたところである。只叙法の流暢さを味ふがよい。秋成いふ、「この題は、山たちばなとありしを、後に、山の字を寫し洩し、か」と。山たちばなは、今の藪柑子といふ物である。

をかたまの木

ともりのり

み吉野の吉野の瀧にうかび出づる沫をかたまのきゆと見つらむ

○をかたまの木 眞淵は、「岡玉の木なり。楢の木にて、その實玉の如し。古へ玉を貴べる習慣より、まことの玉ならねども、圓きは緒に貫きて、身にも帯びたるが故に、かゝる實あるをば玉の木といへり。その岡にあるをいふ」といつた。下に、山柿を並べたので見れば、岡の玉の木かも知れないけれども、玉の木の説は受け取りにくい。谷川士清、橘守部はいふ、「招魂の木の轉ならむ。神の御魂を招ぎ遷す木の意にて、櫛なるべし」と。安齋隨筆、閑田耕筆、茅窓漫録、松屋叢考にはその圖を出してある。○沫をかたまのきゆ「たま」は玉である。をかたまの木を隠した。

大意 吉野川の瀧津瀬に、浮び出では消える水の沫を、玉が出て又消えるのだと、人が見るであらうか。

「うかび出づる」と「消ゆ」とを掛け合はせて、沫には消ゆ、玉には浮び出づるの詞を省いた。

やまがきの木

よみ人しらず

秋は來ぬ今やまがきのきりくすよなく鳴かむ風の寒さに

○やまがき 和名鈔に、「鹿心柿、柿小而長也、和名夜末加岐」とある。千秋いふ、「世に、信濃柿とも、吉野柿ともいふ。材に黒柿といふもこれなり」と。○今やまがきの 山柿を隠した。

大意 秋ははや來たわ、この風の寒さに、籬のきりくすが、今のまに夜なく鳴く事であらうか。

物名

評 すなほな點は、彫琢技巧の作に似ない。

あふひ かつら

かくばかりあふひの稀になる人をいかゞつらしと思はざるべき

釋 ○あふひ 二葉葵である。平安の京になつて、加茂の神事には必ずこの草を用ひる。○かつら 桂である。これも加茂の神事に用ひた桂で、和名鈔に、「楓一名櫨、和名乎加豆良」とあり、又、「桂一名榎、和名女加豆良」とある。古事記でも萬葉集でも、楓をカツラと訓んだ。この楓は今、紅葉を愛ではやす榎樹ではない。貝原篤信いふ、「其の葉白楊に似て、兩々相對ふ、加茂祭に用ふるかつらは是れなり」と。西宮抄に、「四月祭時、近以桂爲挿頭」と見えてゐる。葵と桂とを合はせて、諸綾といふとか。葵は豎くこともあるから、こののを同じ物に見て、葵の義と思ひ誤つてはならぬ。○あふひ 逢ふ日である。葵を隠した。○いかゞつらし 桂を隠した。

大意 これ程逢ひ見る日の稀になる人を、どうしてまあ、つらい事と思はずに居られようぞ、實に辛い事と思ふわ。

評 平安時代の葵に逢ふ日をいひかける習慣は、文獻上ではこの歌から始まつたと見られる。逢ふ日とあるので戀歌によまれた。とにかく二箇の名詞を耳立たぬやうに取り扱つたのは、器用なものである。

○

人目ゆるゑのちにあふひの遙けくはわがつらきにや思ひなされむ

釋 ○あふひ 逢ふ日、葵を隠した。○わがつらき 桂を隠した。

大意 人目を憚る故に、これから後に若し逢ふ日が間遠になるならば、その譯も知らずに、自分がつらい仕打をすることのやうに、思ひ成されようか。

評 前の歌の手際にくらべると、大分劣つてゐる。

くたに

僧正遍昭

散りぬればのちはあくたになる花を思ひ知らずもまどふ蝶かな

釋 ○くたに 童蒙抄に、「苦丹と書く、澤山にある草なり」、榮雅抄には、「蕁の類」などあるは、源氏物語寄木の卷などに見えた、くたにと混じたのだらう。今は少女の卷に、「花橘、撫子、さうび、くたに、などやうの花のくさくさを植ゑて」と見えた、くたにである。異名分類抄に、「苦膽」(龍膽ノ一名逍遙院説)といひ、また前田夏蔭説の「嘉祐本草に、酸漿一名苦耽とあれば、酸漿なり」といふは、俱に韻の假名が差つてゐる。膽も耽もタムで、タニではない。眞淵の續萬葉論に、「木丹の木の名を上略して、くたにと云へるなるべし。字書に『木丹梔子花也』とありて、即ちくちなしなり。五月花咲きて、殊に子は黄色にて、絲など染めて、女など翫ぶ物故に、源氏にも夏の方に書きける歟。牡丹の類にて、芍薬かともいふ説は、夏の物なれば叶へども、芍薬にくたにの名あること、未だ知らず」と論じた。契沖は苦丹で、牡丹の類だといつた。想ふに、芍薬の根は薬に用ひ、花は牡丹に似てるから、或は、苦丹の名を負せたのであらうか。○あくたに 芥に、苦丹を隠した。

物名

五〇七

大意 散つてしまへば、後は芥になる、何の事も無い花であるものを、それをてんで合點せずに、あのやうに迷ふ蝶であることよ。

例の色卽是空の觀想であらう。

結句、六帖にまどふけふかなとあるは誤寫であらう。

さうび

つらゆき

我れはけさうひにぞ見つる花の色をあだなる物といふべかりけり

釋 ○さうび 薔薇の字音、シャウビの轉。和名鈔に、「薔薇、陶隱居注云營實、和名無波良乃美」とある。又、「うばら、むばら、いばら」と訓じた。高駢が、「一架薔薇滿院香」白居易が、「階底薔薇入夏開」の句の趣を考へると、其の枝は長く生ひ延びて、墻などのやうになる物であらう。この種の薔薇は今でもある。○けさうひに 今朝初にである。「うひ」は初冠などの初で、始めてある。さうびを隠した。

大意 自分は薔薇の花を今朝初めてサ見たわ、この花の色は、人のいふやうな面白い物では無くて、仇なる物ぞといふべきであつたわ。

釋 人の愛で翫んで、面白い花といひ嘖すのに對へて、我は仇な物と覺悟したといふ。宣長が、人の仇な物といつたのを、今思ひ當つた趣に釋いたのは誤つてゐる。想ふに、この薔薇は、常の野茨ではないから、支那から舶來の當坐などで、ひどく珍しかつたものであらう。貫之もこの時はじめて見たので、「うひにぞ見つら」といつたと思はれる。

をみなへし

とも のり

しら露を玉にぬくとやさ、がにの花にも葉にも絲をみなへし

釋 ○玉にぬくとやさ 玉にして貫くとてか。○さ、がに 蜘蛛をいふ。もと蜘蛛の枕詞である。小蟹の義といひ、笹原に住む蟹の意ともいひ、又鹿持雅澄は、「笹の根は入り組みたる物故、笹が根の組むといふを、蜘蛛にいひかけたり」といつた。○絲をみなへし 絲を皆綜して、綜は延ぶる意。女郎花を隠した。

大意 白露を玉にして貫くといつてか、蜘蛛がこの露の置く女郎花の花にも葉にも、絲を皆引き張つた。

評 秋上「秋の野におく白露は玉なれや」と同想。

○

朝露をわけそぼちつ、花見むと今ぞ野山をみなへしりぬる

釋 ○野山をみなへしりぬる 野山を皆歩いて知つたの意。女郎花を隠した。

大意 女郎花の花を見ようと思つて、朝露を分けて濡れ／＼して、今はサ野山といふ野山を、悉く歩いて知つたわ。

新撰萬葉に、初二句露草にぬれそぼちつ、下句しらぬ山べをみなへしりにきとある。

朱雀院の女郎花あはせの時に、をみなへしといふいつも

じを、句のかしらにおきてよめる
つらゆき
をぐら山みねたちならしなく鹿のへにけむ秋をしる人ぞなき

○朱雀院のをみなしあはせ 秋上「女郎花あきの野風に」の條に既出。宇多帝讓位の翌年、朱雀院の御所で、皇后と競はせ給うたのである。○をぐら山 秋下「夕月夜をぐらの山に」の條に既出。

大意 小倉山の峰を立ち馴して鳴く鹿の、これまで経て来たであらう秋の数を、知る人がサ無いわ。

○これは折句である。業平がかきつばたの五文字を置いて、「唐衣きつ、なれにし云々」(羈旅の部参照)と詠んだのと同じである。然るにこれは物名に入つてゐる。思ふに、彼れは題詠の歌でないから、その重い意味に従つて、羈旅に收めたのであらう。

拾遺集に再出したのには、下句へにける秋をしる人のなきとあるが、詞が劣る。

きちかうのはな

とも のり

あきちかうのはなりにけり白露のおける草葉も色かはり行く

○きちかう 桔梗の字音。和名抄に、「和名阿里乃比布木」とある。卑しけでもあり、詞も長いから、字音にいひならしたのだらう。○あきちかうのはなりにけり 秋近く野は成りにけりの意。「近う」と音便を用ひたのは本歌には例のない事だが、物名の歌なので、止むを得ぬ變例であらう。桔梗の花を隠した。

大意 野の景色を見ると、夏も深くなつて、物悲しい秋の時節が、思ひがけず近くなつたわ、そのしるしには、

この野の露の置いてある草も葉も、おひく色が變つて行くわ。

○上句は晩夏、下句は仲秋の頃のさまで、一致しない。雅嘉は上句を助けて、「秋の物悲しき頂上の時節の近づきたる意」とし、景樹は下句を助けて、「秋の下葉などは、五月の末より色付き黄ばみて散りもすべければ」といつてゐるけれど、このまゝではさうも聞えない。

しをに

よみ人しらず

ふりはへていざ故里の花見むとこしをにほひぞ移ろひにける

○しをに 和名鈔、「紫苑一名紫菀、和名能之、俗云之乎邇」とある。今シ、チ、ンといふ。○こしをにほひぞ來しを句ぞ。「句」は花の色澤をいふ。紫苑を隠した。

大意 どりや古里の花を見ようと思つて、わざわざ來たものを、残念にももう、花の色澤が變つてしまつたわ。

りうたむのはな

友 の り

わが宿の花ふみしだくとりうたむのはなければや此處にしもくる

○りうたむ 和名鈔に、「龍膽、和名衣夜美久佐、一云邇加奈、味甚苦、故以膽爲名也」とある。今リン、ダ、ツといふ。眞淵は、「唐音の轉か」といつてゐる。○ふみしだく 躑み拉ぐこと。○とりうたむのはなければや鳥打たむ野は無ければにやである。龍膽の花を隠した。

大意 自分の庭の大事の花を踏みにする、あの鳥を打たうわ、あれは住む野が無いかして、とかく此處にサ來

る、迷惑なことよ。

評 丸子を飛ばして小鳥を弾つことは、支那の詩にしばしば見えてゐる。こゝも其の趣であらう。杖などで打たうとするのではあるまい。

二句、六帖、友則集にふみちらす、結句、友則集にこゝにしも鳴くとある。

をばな

よみ人しらず

ありと見て頼むぞ難きうつせみの世をばなしとや思ひなしてむ

釋 ○をばな 尾花。その義は薄の穂に出たのが、獸の尾に似てゐるからだといふ。眞淵が、女郎花に對して、男花といつたのであらうとて、萬葉集卷廿に「秋野には今こそ行かめものゝふのをと、こをみなの花匂ひ見に」の歌を引いたのは疑問である。をとこをみなは花の名ではない。たゞ男女を花に譬へたのである。或は、麻花の義だともいふ。その狀が一總の苧の亂れたのに似てゐるからだらう。○うつせみの 世にかゝる枕詞。○世をばなし 尾花を隠した。

大意 すべて物は有ると思つても、はかなくて頼みには成り難いわ、この世の中をばいつそ無いものと、料簡を着けて見ようか。

評 例の一切空の無常法門である。

けにこし

やたべの名實

うちつけにこしとや花の色を見むおく白露の染むるばかりを

釋 ○けにこし 和名鈔に「牽牛子、和名阿佐加保」とある。今の朝顔である。但支那では花を牽牛花といひ、實を藥用にする時、牽牛子と呼んだ。牛の字は音便で、午の音と同一になつたのだらう。○うちつけにこし 打ち付けに濃しである。「打ち付け」は唐突の意。牽牛子を隠した。○ばかりをばかりなるをの畧。

大意 牽牛子の花を見て、誰れも一寸見るからして、濃い色ぞと見ようが、何あれは、花のうへの白い露が染めたまでの、何でも無い物であるものをサ。

評 牽牛花をよんだのである。

二條の後、春宮のみやすむ所と申しける時に、めどにけ

づり花させりけるを、よませたまひける 文屋康秀

花の木にあらざらめどもさきにけりふりにしこのみなる時もがな

釋 ○二條の後云々 「二條后」并に「東宮の御息所」の事は、春上「春の日の光にあたる」の條に既出。「めどにけづり花」のめどは著と馬道との二説がある。著は、或は著萩であらうとも、或は玉箒俗に箒草と呼ぶ物であらうともいはれ、いづれもその莖に削花をさして作つた由である。又、馬道は和名鈔に「俗音、馬多宇、向堂之道」とあつて、殿中の眞中の板廊下をいつた。そこに削花をさしたといふことである。削花は木を削り掛けた造花である。延喜式に「金銅花瓶二口、菊削花二枚」と見え、其の他のをも考へ合はせると、佛事に多く用

ひたらしい。これは削り木と同じ物で、蜻蛉日記に「紙屋紙に書かせて、立文にて、削り木に附けたり」とある。この文は、源高明公の北の方の尼になるのを弔はうとて贈つたのだから、やはり佛事に縁ある物だとの證據になる。又思ふに、馬道の説は諾げ難いやうだ。歌も、花のない木に花の咲いた趣をいつてゐるから、著に削花をさした物である事は確かである。後世削り掛けといふ物を門にさすけれど、それは粥杖の移つたもので別である。○あらざらめども 著を隠した。○このみ 此身に木の實をかけた。

大意 著に附けた削花を見ると、花の咲く木でも無からうけれども、花が意外に咲いたわ、それだから年古りた木にも、實の結る時もあつてほしい 即ち年寄りました私のこの身も、何卒成り出る時節もあつて欲しいと存じます。

【評】上句は、俗に「煎豆に花が咲く」といふのと同想で、春上の「春の日の光にあたる云々」と、同一の情願である。歌も同調。

しのぶぐさ

きのとしさだ

山高みつねにあらしのふくさとは匂ひもあへず花ぞちりける

【釋】○しのぶぐさ 秋上「君しのぶ草にやつる」の條に既出。○あらしのふくさと 忍草を隠した。

大意 近くの山が高くて、常々嵐の吹く里は、咲き匂つて居る間もなく、花がサ散つたわ。

二句 六帖に峰にあらしのとある。

やまし

平あつゆき

時鳥みねの雲にやまじりにしありとは聞けど見るよしもなき

【釋】やまし 山にある羊蹄菜か。和名鈔に「葶、和名之布久佐、一云之、羊蹄菜也」とある。又、同鈔に、知母をヤマシと訓んでゐる。○雲にやまじりにし 山羊蹄を隠した。

大意 時鳥は、峯の雲の中に飛んで混つてしまつたかもしれぬ、鳴聲によつて、居るとは聞くけれども、形は見えようも無いわ。

からはぎ

よみ人しらず

うつせみのからはぎごとにとむれど魂の行方を見ぬぞ悲しき

【釋】○からはぎ 萩花集説に、草萩に對したる木萩の名とした。思ふに幹萩の義であらう。眞淵が「一種枝の細く花の色深きを、唐撫子の類にて唐萩と呼べる歟」といつてゐるのは、論據のない説である。又、千秋が、からをぎの誤であるとして、清暑堂の御神樂の時に、人長の持つ枯萩であらうかといつてゐるのは、妄斷である。○うつせみ 空蟬。現し身の意をかけた。○からはぎごとに 骸は木毎に、棺毎をかけた。棺は古くキといつた。幹萩を隠した。○魂 たましひ。なき魂。

大意 蟬の蛻殻は、木毎に留めてあるけれども、その身は何處にか飛んで、往く方が知れぬ、そのやうに、人間も死んでしまふと、骸は棺毎に留めてあるけれども、魂ひの行方を見えぬのがサ悲しいわ。

【評】靈魂不滅の思想は神代からあるが、佛教傳來この方盛んになつてきた。しかも妄執によつた死者生者の魂は

物の怪となつて迷ふと信じたものゝ、その行方を見届た者とはやはりないのであつた。

かはなぐさ

ふかやぶ

うばたまの夢に何かはなぐさまむうつゝにだにも飽かぬ心を

釋 ○かはなぐさ 和名鈔水菜類に、「水苔一名河苔、和名加波奈」とある。これは河藻である。景樹は、「既に川菜といへるに、草の字を添へむこといかゞ、甘菜草、水菜草といふ事なし」といつた。○うばたまの 夢にかゝる枕詞。「うばたまは古言ではぬばたまといつた。和名鈔に、「射干、一名烏扇、和名加良須安布木」とある烏扇の實で、其の色は黒い。野にある物故、野眞玉の義であらうとも、野羽玉の義であらうともいふが、判然しない。色の黒い物だから黒と續け、轉じて夜と續け、更に轉じて夢とも續けた。○何かはなぐさまむ 川菜草を隠した。

大意 戀しい人を夢に見たとて、何で心が慰まうぞ、慰むことでは無い、現在見てさへも、まだ飽き足らぬやうに思ふ心であるものをサ。

さがりごけ

高向のとしはる

花の色はたゞ一さがりこけれどもかへすくゞぞ露は染めける

釋 ○さがりごけ 蕨の種類で、蔓に青白い毛が生じてる。深山の古木などに這ひかゝつて垂れる。和名鈔に「蘿比加介、女蘿也」とあるのがこれである。垂苔とも、さるをかせともいひ、俗に狐のたすきといふ。○一さか

りこけれども さがり苔を隠した。

大意 花の色はほんの一盛りだけ濃いけれども、これまでに染め返しく、何遍も露がサ染めたわ。

にがたけ

しげはる

命とて露をたのむにかたければ物わびしらに鳴く野べの蟲

釋 ○にがたけ 苦茸か。眞淵は、「和名鈔に『長間等、等青最晩生、味大苦也』とある物なるべし。今は女竹とも、しのめ竹ともいふなり」といつた。けれどもこの前後、苦、蕨などの間に並べてあるのだから、茸とする方がよいらう。次のも皮茸を隠した。○わびしらに 侘しの語に、形容のらの尾辭を添へた副詞。
大意 わが命として露を頼みにしても、はかなくて頼みになり難いので、何やら難儀さうに鳴く。野邊の蟲であることよ。

釋 結句、この頃には珍しい語調である。

かはたけ

かげのりの王

さよふけてなかはたけ行く久方の月ふきかへせ秋のやま風

釋 ○かはたけ 皮茸である。今、こゝ茸と轉じて呼ぶ。眞淵は和名鈔に、「苦竹、加波多計、本朝式用三河竹二字」とあるに據つて、苦竹とした。○なかはたけ行く 皮茸を隠した。

大意 夜が更けて、もう空の半分ほども開けて行くあの月を、もとの東の方へ吹き戻してくれい、秋の山風よ、

評 「月吹き返せ」の狂想が面白い。體格豪宕で雄渾であるが、自然萬葉調と異なつた處があつて、新古今時代の豪傑等が希つた風調の祖をなしてゐる。

わらび

眞せい法師

けぶり立ちもゆとも見えぬ草の葉をたれかわらびと名づけそめけむ

釋 ○わらび 蕨。○わらび 藁火。蕨を隠した。

大意 蕨を焚く火ならば、烟が立つて燃える筈なのに、さうとも見えぬ草の葉であるのを、誰れがわらびといふ名を附け初めたのであらうか。

評 契沖は、「物名の詠みざまにあらず、この部に入るべきならず」といつた。上に、折句の歌をも收めた程だから、大まかに見るがよい。

さゝまつ びは ばせをば

紀のめのと

いさゝめに時まつまにぞひはへぬる心ばせをば人に見えつゝ

釋 ○さゝ、和名鈔に、「篠、和名之乃、一云佐々、俗用ニ小竹ニ字、細々竹也」とある。○まつ 松。○びは

枇杷。○ばせをば 和名鈔に、「芭蕉、和名發勢乎波」とある。蕭韻の字は、ヲの假名に響かして用ひた。その例は澤山ある。○いさゝめに 假初にの意、篠を隠した。○時まつ 松を隠した。○ひは 日である。枇杷を隠した。○心ばせをば 「心ばせ」は意思である。芭蕉を隠した。

大意 つい逢ふ時を待つ間に、ひどく日数が経つたわ、逢ひ度いといふ心持をば、先の人に、とくと見られくしてサ。

評 覺束なく思つて日を経た間に、度々自分から音信れなどしたのをいつたものであらう。

なし なつめ くるみ

兵 衛

あぢきなし歎きなつめそうき事にあひくるみをば捨てぬ物から

釋 ○なし 梨。○なつめ 棗。○くるみ 胡桃。○あぢきなし 無益、味氣無しの義だといふ。梨を隠した。

○歎きなつめを 歎き詰むる勿の意。棗を隠した。○あひくるみ 遭ひ来る身である。胡桃を隠した。

大意 あゝ無益の事よ、そのやうに一途に歎くなよ、いろくさまぐの憂い事に遭つて来る、自分の身を捨てもせず居ながらサ。

評 契沖は、「三代實錄に、『仁和三年二月信濃國例貢、梨子、大棗、吳桃子、雉譜、別貢、云々』これをもて思ふに、この貢物をもて來たる時、これを詠めと仰言などのありて詠めるにや」といつた。

からことといふ所にて、春の立ちける日よめる

安倍清行朝臣

浪の音けさからことに聞ゆるははるのしらべや改まるらむ

釋 ○からこと 備前國韓琴の浦であらう。○けさからことに 今朝より殊にである。韓琴を隠した。

物 名

大意 波の音が立春の今から變つて、長閑に聞えるのは、この唐琴の浦の調子も、春の調子に改まるのであらうか。

【評】樂家の説に、春は双調、夏は黄鐘、土用は一越、秋は平調、冬は盤涉調だとか。それ故、春の調子が改まるといつたのだ。地名のからことを、樂器の韓琴に取り成して、浦の立春の景氣を歌つた。韓琴は新羅琴をいつたものか。又、日本琴に對して舶來した箏などの類を總稱したものか。

いかゞさき

かよみのおほきみ

かぢにあたる浪の雫を春なればいかゞさき散る花と見ざらむ

【釋】○いかゞさき 蜻蛉日記に、「石山に參りて、舟にて歸るとて、いかゞ崎、山吹の崎などいふ所を、蘆の中より漕ぎ行く」とある。これに據れば、近江の打出の濱から、勢田、田上あたりまでの内にあつたのであらう。枕草子にも、「崎は辛崎、いかゞ崎」とある。○かぢ 舟を遣る權、梶、棹をすべて、古くはかぢといつた。○いかゞさき散る 如何が咲き散るである。いかゞ崎を隠した。

大意 舟の楫に當つて散る波の雫を、今は春だから、何で散る花と見ないことがあらうぞ、散る花とたしかに見る。

【評】「咲き散る」の咲きは、熟語として軽く添へたまで、ある。口ぶりから見ると、人に答へたものらしいから、返歌であらう。下の二首、これも題に就いて、水邊の光景を詠んである。

からさき

あほのつねみ

かのかたにいつからさきに渡りけむ浪路は跡も残らざりけり

【釋】○からさき 近江國滋賀郡辛崎。唐崎とも書く。○かのかた 彼の方と、彼の瀆との兩説がある。○いつからさきに 何時より先にである。辛崎を隠した。
大意 あの先の方の辛崎に舟があるが、何時からあのやうに、自分より前に渡つたのであらう。渡れば跡のある筈なのに、波の路には、これといふ渡つた跡も残らなかつたわ。

伊 勢

波のはなおきからさきて散りくめり水の春とは風やなるらむ

【釋】○おきからさきて 沖より咲いてである。辛崎を隠した。
大意 波の寄せるのが花と見えるが、この波の花は沖から咲いて、磯へさして散つて來ると見えた、水の春には風がなつて、このやうに波の花を咲かせたり、散らせたりするのであらうか。

【評】四時の變化のない水を捉へて、春をいひ秋をいふ。この種の着想は、奈良時代にはまだ發達しなかつた。秋下、是則が、

もみぢ葉の流れざりせばたつ田川水の秋をばたれか知らまし
と詠んだなど、共に後世の尖巧派の基を開いた。

かみやがは

つらゆき

うば玉のわが黒かみやかはるらむかゞみのかげにふれる白雪

【釋】かみやがは 山城國の北野と、平野との間を流れる川で、古へ紙漉き場のあつたところ。拾芥抄に、「紙屋院、圖書別所、在野宮東云々」。圖書寮は書寫を司る故に、紙漉く所をも兼管したのである。○うば玉の「わが」を隔て、黒へかゝる枕詞。解は上に既出。○黒かみやかはるらむ 紙屋川を隠した。

大意 自分の黒髪が、白髪に變つたのであらうか、自分が對ふこの鏡へ映つた影に、眞白に降つて居る雪を見ればサ。

【評】李白の、「不知明鏡裏、何處得秋霜」と、その興趣を同じくし、張九齡の、「誰知明鏡裏、形影自相憐」と、その感慨をひとしくしてゐる。三句、かはりぬらむとなくては、時の打合が不都合に思はれる。拾遺集に、二三の句をわが黒髪に年暮れてと直したのは、こゝに見る所があつたのであらうか。拾遺集に再出したのは、詞書をも、「師走の晦日がたに、年の老いぬることを歎きて」と直してあるが、よくない。この集撰著の頃の貫之は、未だ鏡裏を白了する程の年配でない。題詠であることが分る。

よどがは

あしひきの山べにをれば白雲のいかにせよとかはるゝ時なき

【釋】よどがは 山城の淀川である。○いかにせよとかはるゝ 淀川を隠した。

大意 山邊に住んで居ると、只さへ氣のふさぐものを、どうせよといふ事か、白雪がかゝつて晴れる時が無いわ。

【評】「いかにせよとか」の辭様、既に萬葉集にその例がある。

かたの

たゞみね

夏草のうへは茂れる沼水の行くかたのなきわがこゝろかな

【釋】かたの 河内交野郡の交野である。○沼水の 沼水の如くの意。○行くかたのなきわが心 交野を隠した。心の行くは、心の満足すること。

大意 夏草がうへに一面に茂つてゐる沼の水の、流れて行くところの無いやうに、満足しようの無い、自分の心であることよ。

【評】沼池などの水は、滞留して流れないのを本とした序歌である。初二句はたゞ沼水の修飾で、うへは夏草の茂れるといふべきのを倒装したのである。これをわが身の世に埋れて人に知られないのを譬喩したと見てはならぬ。又、「かな」の助辭の打合をおもふに、行く方もとある方が妥當であらう。果して六帖には「も」とある。交野の物名に拘はつて、枉けたのであらう。

かつらのみや

源ほどこす

あきくれど月のかつらのみやはなる光を花と散らすばかりを

○かつらのみや 今昔物語に、「五條西洞院に、桂の宮と申す人おはします。その前に大なる桂の木あ故るに、名づけまらせたるなり」とあるのが、これであらう。○月のかつらのみやはなる 實やは結るの意。桂の宮を隠した。月の桂のことは、秋上「久方の月の桂も」の條に既出。○花と散らすばかりを 「花と」は花の如く、花としてなどの意。「を」は歎辭。

大意 すべての草木は秋は實る物だが、秋が来たとして、月の中の桂の實が結るか、いや結りはせぬ、たゞ常よりさやかに、月の光を花のやうに散らすばかりの事よ。

評 月華といひ、桂花の亂れ、桂葉の翻るといふことは、漢詩に多く散見してゐる。たゞこの新案は、桂の實に思ひ到つたのにある。

百和香

よみ人しらず

花毎にあかず散らし、風なればいくそばくわがうしとかは思ふ

○百和香 和名鈔に、「神傳云、淮南王張錦繡之帳、燔百和香、漢武内傳云、武帝好長生之術、求道、七月七日帶宮掖之内、設座殿上、紫羅席、燔百和香、云々」とある。契沖は、「五月五日に百草を取りて合はする香なり」といつた。○いくそばくわがうし 幾何我が憂しである。百和香を隠した。

大意 花といふ花をば、皆残り多いの散らした風であるから、どれ程自分が、あの風奴の仕打を憂いと思つた事か、並大抵に憂いと思つた事では無いわ。

すみながし

しげはる

春がすみながしかよひぢなかりせば秋くる雁は歸らざらまし

○すみながし 墨流しである。墨汁を水の上に流して、その亂れた状を紙や布に寫し取つた物。今もあるものである。○春がすみながし 春霞中しである。墨流しを隠した。「し」は強辭。

大意 春霞の一面に立ち塞つてある中にサ、通ひ路が無いものであつたならば、何時も秋來る雁は、この春に歸らないだらうものを、霞の中に路があるかして、雁が歸つて行くが残念だ。

評 「秋くる」を「春霞」に對した。秋こし雁といふべきのを、「秋くる」と現在にいつたのは、調をいたはつたのである、といふ説もあるが、いかゞであらう。「秋くる」は、何時も秋には來るといふ意から、形容に置いた詞で、過去の事實をいつたのではない。霞の通路は、白雲の道、雲路、空の通路などと、同じ辭様である。「なかし」の一語は贅瘤だが、物名の事だから、仕方がない。

おき火

みやこのよし

流れいづるかただに見えぬ涙川おきひむ時や底はしられむ

○おき火 和名鈔に、「熾、於岐比、猛火也」とある。おこり火の意であらう。○涙川 涙を混喩したのであつて、川の名ではない。○おきひむ 沖干むである。熾火を隠した。

大意 流れ出す方角さへ見えない涙川であるから、底の深さも猶更知れないが、沖の深みまで水の干ようとす

時があつたらば、底の深さも知れようか。
景樹が、「愁思の竭きむ時、自然涙も盡きて流れざらむの意を、河になしていへるなり」と、説いた通りである。

ちまき

大江千里

のちまきのおくれておふる苗なれど仇にはならぬたのみとぞ聞く

○ちまき 和名鈔に、「糲亦作糲、和名知萬木、以三菰葉三裹米、以三灰汁三煮之令三爛熟也、五月五日啖之」とある。支那の例に倣つてした事である。○のちまき 後蔭である。糲を隠した。○たのみ 田の實に頼みかけた。田の實は實つた稻をいふ。

大意 遅蔭の種で、外のよりは後れて生える苗であるけれども、萬更むだにもならず、秋はやはり實つて、頼みある田の稻であるとサ聞くわ。

諷諭である。晩年からの學問だけれども、あながち遅蔭であるとして放棄すべきものではないと、希望に光明ある由を述べたのである。或は、出世などの人に後れた身であるが、末に頼みがあるから落膽すべきでないとの意を比喩したともいはれるであらう。作者の人柄からいふと、どちらでも通用する。

「は」をはじめ「る」をはてにて、ながめをかけて時の歌よめ」と。

人のいひければよめる

僧正聖實

はなのなかめにあくやとて分け行けば心ぞ共に散りぬべらなる

○はをはじめ云々 はの字とるの字とを、歌の終始に置き、ながめの三字をいひかけて、そして當季の歌を詠めとの意。「ながめ」は長雨の約。○はなのなかめにあくや 長雨を隠した。

大意 花の咲いた中を、目に見飽くかと思つて分けて行けば、花に目が移つて、自分の心がサ、花と一所にあちこちと散つて行きさうな心持がするわい。

春の霖雨のつれづれに、眞言祕密の大和上を弄んで、難題をいひかけたものと思はれる。和尚、生憎にこの雕技があつて、綺語罪過を犯し、文字魔を作した。

この部の歌は、しひて精評を加へない。それは作者の目的が、それになく、これにある事を思ふからである。歌として論じたなら、必ずその本意に背く點が多からう。

古今和歌集卷第十一

戀歌一

題しらず

よみ人しらず

ほとゝぎすなくやさ月のあやめ草あやめもしらぬ戀もするかな

【釋】○戀歌 男女間の戀愛を歌つたのを、この部に收めた。萬葉集には、男女親子兄弟朋友の相思ふをも一つに收めて、相聞サウモンの部を立てた。この集に至り始めて特に戀の部を立て、後來の勅撰集の爲に、先例を開いた。○なくや 「や」は間投の歎辭。○あやめ草 水澤に生ずる香草の菖蒲シヤウブで、花を賞する所謂花菖蒲シヤウブとは別である。○あやめも知らぬ 「あやめ」は衣の文目イメから起つて、何とも筋が立たず分別のつかぬを、あやめなしとも、あやめを知らぬともいふ。

大意 時鳥の鳴くまゝ、五月のあやめ草の名の、あやめ目も分らぬ無茶な戀をまゝ、自分はそのことよ。

【評】初戀を歌つた作である。戀は情の火である。その燃ゆるや、多く一時的の性質を帯び、その熾なるや、實に一二味である。あやめも知らぬ戀にして、始めて人を戀すといふべきである。三句までは萬葉集卷十八家持の歌に、

郭公きなく五月の、あやめ草蓬かづらき、云々。
とあるを序詞に轉用したもので、時鳥と菖蒲とは五月の端午の節をもてなす重要な景物である。これを背景として、梅天陰鬱の候に戀の苦悶を喫する作者の境地は、同情に堪へない。「あやめ」の反復、既に諧調たるうへに、全首語々圓健にして、氣勢流活の妙がある。「戀もするかな」の結句は集中に數多見える。この口氣は我れと我が行爲を怪訝し批判してゐるものである。これ理性と感情との衝突を意味するもので、只自家批判に終始してゐるのではない。抑へ難い戀心に、いかに煩々悶々たるかを表現する。この型式は奈良朝歌人の發明にかゝるもので、萬葉集に、

高くらの三笠の山になく鳥の止めば戀がる、戀もするかも (卷三、赤人)

女郎花さきさにはおふる花かつみかつても知らぬ戀もする鴨 (卷四、中臣女郎)

かほ鳥の間なくしばなく春の野の草根のしけき戀もするかも (卷十)

言にいでて云は、ゆゑしみ朝顔のほには開き出す戀もする鴨 (卷十一)

この山の峰に近しとあが見つる月の空なる戀もするかも (同)

君がきる三笠の山邊居る雲の立ちては戀ける戀もするかも (同)

庭淨みおき邊漕ぎ出づる海士舟の執る梶間なき戀もするかも (同)

の類皆同型の先規である。平安朝歌人は、遂に奈良朝歌人の窩套を渾脱することが出来なかつたものか。

素性法師

音にのみきくの白露よるはおきて晝は思ひにあへずけぬべし

釋 ○音にのみきく 噂にのみ聞くに、菊をかけた。○よるはおきて 夜は置きてに、起きてをかけた。○思ひ日を寄せた。○あへず 秋下「ちはやぶる神のいがきに」の條に既出。○けぬ 「け」は消えの約。

大意 風聞にばかり聞いて、まだ見た事も無い人を思つて、夜は寐られないので、聞くといふ名のある菊に、白露の置くといふと同じく起きて居て思ひ明し、さて晝になれば又、日影にその露のえ堪へずに消えるやうに、戀しさにえ堪へずに、この命が消えてしまひさうなわ。

評 噂に聞いて戀するといふ。特別の場合には今でも或はあらうが、この時代には多い事だつた。それは當時の嫁娶の順序が最初は文通のみで、それから訪問といふ段取になるので、いづれも男から仕掛けるのであるから、初は見ぬ戀にあこがれる譯である。寐るべき夜は終宵懊殺されて、夜明の鐘の運さを怨み、起き居るべき晝は終日愁絶されて、ほげくとして思ひ暮らす。この意を後に大中臣能宣は、

御垣守衛士のたく火のよるはもえひるは消えつ、物をこそ思へ
と再演した。晝夜の對照は、夙く奈良時代にいひならした言で、

晝はもうらさび暮し、よるはも息づき明し、

の類、枚擧に違がない。細心巧筆は時にはわるくもないが、譬喩餘りに粘密に過ぎて、弄語の巧は、却つて人をして厭惡の感を起さしめる嫌がある。然し延喜以後かうしたよみ方がますます盛んに流行した。
結句、六帖にたへず消ぬべしとあり、新撰和歌にけぬべきものをとある。

紀貫之

よし野がは岩波たかく行く水のはやくぞ人をおもひそめてし

○岩波 岩に激する波をいふ。平安時代の新熟語らしい。○行く水の 行水の如く。○はやく 風の意。忽ちの意とする説は、結句の「てし」の辭に文法上の時が打ち合はない。

大意 吉野川の岩根に波が高く立つて流れて行く水は、早いことであるが、その早いといふ如くに、疾くの昔に人を思ひ初めて居つたわ。

評 三句までは序である。力強く調さやかにいひ下したのは、よい手際である。想ふにその思ふ人の許に詠んで贈つた歌であらう。長い年月戀の心を胸に秘め來つて、遂に包み切れなくなつた戀の奴が、こゝに慇懃の意を致して、情の露の一雫を待つ趣で、その幽怨の情は甚だ深い。以下、「人」といふ語が、對手又は意中の人を指した場合が多いことを、特に注意ありたい。

藤原勝臣

白浪のあとなきかたに行く舟も風ぞたよりのしるべなりける

大意 白浪のうへの、道の跡も無い方へ行く舟でさへも、思ふ方へ行くには、風といふ物がサ、便りの手引であつたわい。

評 三句の「も」の辭の強い意に用ひられた事は、意釋の通りである。さて、わが戀ふ人に便りのしるべたるべき

風乃ち良媒の無い事を怨んだ。諷諭の蓮意が適切で、爲に幽婉の味が生ずる。

在原元方

おとは山おとに聞きつゝあふ坂の關のこなたに年をふるかな

○おとは山 山城國宇治郡山科の音羽山で、近江との國境をなし、逢坂の關の正南につゞいてゐる。旁ら下の、「音」といふ同音の語を喚び起した序である。

大意 音羽山の名の音に即ち噂に、其の人の事を聞き／＼しては居ながら、逢坂の關の名の逢ふといふ事もえせずに、越えられぬ關の此方で、年月を経ることよ。

評 早く逢坂の關を越えたい、即ち思ふ人に逢ひたいの餘意がある。躬恒の歌に、はる雨に君をやりてば逢坂の關のこなたに戀ひや渡らむ

同様の譬喩である。「逢坂の關の此方」は逢はぬ事を婉曲に轉義した。しかも音羽山は關の此方にある。(京からいふと)かうした地理的關係を考慮においたこの作は、京人達には頗る警拔なものとして喝采されたに違ひない。かく巧中に巧を求めるのは、この作者の慣手である。六帖には、作者を貫之とある。

たちかへりあはれとぞ思ふよそにても人に心をおきつしら浪

○あはれ 感歎の語で、下にかはゆい、戀しいなどの意を含む。○よそにても 餘所での意。「も」は歎辭。

○心をおきつしら浪 心を掛けおくに、沖つ白浪をかけた。「心をおき」は隔心の意ではない。

大意 思ふ人に言ひ寄るすべが無さに、このやうに餘所ながらまあ、かの人の上に心を掛けて置くので、その置くといふ沖の白浪の、跡からく打ち掛けくするやうに、立ち返つてつくくあゝいとしいとサ思ふわ。

評 剪裁彫琢はたまにはいゝが、屢してはうるさい。乃祖業平朝臣が見たら、何とした凡骨と悲しむ事であらふ。只、「心を沖つ白浪」といひ捨てた語調に、嗟歎の味のやゝ動くのみである。

つらゆき

世の中はかくこそありけれふく風の目に見ぬ人も戀しかりけり

釋 ○ふく風の ふく風の如くの意で、「目に見ぬ」にかゝる序。○目に見ぬ 風よりいへば、目に見えぬとあるべきだが、一方の意の重きにひかれて、「見ぬ」といつた。

大意 世の中は、皆かうしたタワイもない物であつたわい、吹く風の目に見えぬやうに、まだ一目見た事も無い人さへも、このやうに戀しいものであつたわい。

評 見ぬ人戀し、こんな理窟のあはぬ事はない。然し事實であつて見れば仕方がない。一旦は自己の行爲を怪んで見たが、考一考すれば、矛盾がこの世相だと氣が付いたといふ。蓋し煩悶の餘りに出た語である。三句以下を契沖、眞淵等の、「吹く風の音にのみ聞きて、まだ見ぬ人を戀ふる」と解したのはいひ過ぎてゐる。三句は只、「目に見ぬ」の序のみに過ぎない。夙く萬葉集に「ふく風の見えぬが如く」と所々に詠んである。昔からいひ馴

した詞と思はれる。埤雅に「人に見風」ともある。和漢想を同じうするものか。

右近のうまばのひをりの日むかひに立てたりける車の
下すだれより、女の顔のほのかに見えければ、よみてつか
はしける

在原業平朝臣

見ずもあらず見もせぬ人の戀しくばあやなくけふや詠め暮さむ

釋 ○右近のうまば云々 袖中抄に、「右近の馬場は一條より大宮の方をいふ。それより東の方は左近の馬場なり」とある。拾芥抄には、「一條京極の末」とある。「ひをりの日」は古來の集訟である。袖中抄には、引折の日の意として、「五月三日左近の荒手詰、四日右近の荒手詰、五日左近の眞手詰、六日右近の眞手詰にして、この六日の右近の眞手詰の日は、紅の下の袴、織物の指貫に、括りをあけずして、そばを挟みて、裾の尾を勝より前さまに引たをりて、前に挟めり。されば、この眞手番の日を、ひをり日といふ」とある。眞淵、宣長は、「五月の五六日に、武徳殿に幸して騎射をみそなはし給ふ御定なれば、右近の馬場に騎射ある事は、他日なる事明けし」と難じた。けれど世々にその式の行はれたことの、史に載せられたのが甚だ稀なことから考へると、その日内裡で式の行はれない時は、左右の近衛の馬場で、代に行はれる例と思はれ、今昔物語にも、「右近の馬場に、五月六日弓行はれけるに云々」とある。「ひをり」を、眞淵は「引柵又は、標柵の意ならむ」といひ、近藤芳樹は「褻の衣は萎えばみ、晴の衣はこはく折目正し。このこはきを引折といふ。台記の、皇后御讀經結願の件に「右

大將衣冠出^ス紅引折^ツ春日詣の件に、「着^ル引折^ニなどある、やがて晴の衣なり。されば、衣の地厚くて、引折るやうに強き義よりつけたる名にて、また如木と云へり。この晴の衣を引折る日は即ち晴の日の意なり」といひ、伴信友は、右近のうまばの日と讀み切つて、柵^ツ日向^ヒに立てたりける車と解した。「車の下すだれ」は西宮記に、「婦人之車傍也」と見えて、車簾の下に帷幕の如くに掛けた物をいふ。

大意 一向に見ぬでもない、又たしかに見たでもない人が、かうも戀しいならば、何がなしに今日は一日、辛氣に思ひ暮さうことか。

評 それでは迷惑だから、しかと名告つて下さいの餘意がある。伊勢物語にも、今昔物語にも、「中將なりける男」とあつて、作者が近衛司で、右近の馬場に行き向つたとある。近衛舍人達の騎射があるので、この日は見物人が賑ふ。中には女車もある。簾からこぼれ出た物見車の出衣や、その袖口どもの艶なものには、「天が下の好き者」と歌はれた渠れ業平が、とても黙つて通さう筈がない。まして、下簾からその透影が夕日に榮えて見えたとあつては、公用も何もあつたものでない。但歌は只當座の外交辭令に過ぎない。

かへし

よみ人しらず

知る知らぬ何かあやなくわきていはむ思のみこそしるべなりけれ

釋 ○知る知らぬ 知る人知らぬ人の略。○わきて 分けての古言。

大意 見知るの見知らぬのと、詮も無いことを差別を立て、何でいはず、いはずとものことである、戀といふものは、たゞ一筋の思ばかりがサ、その成就する手引であつたわい。

評 知る知らぬは問題でない、只信實の心から思ひなさい、さらばその思にめで逢ふ時であらうの意だから、

女にも多少その氣があるのである。果して、伊勢物語には、「後には誰れと知りにけり」と書いてある。兩箇の才人が互に眷戀の情を含んで、物いひ渡つた當座の状況は、願ふに頗る艶なるものであつたらう。贈歌の主意は下句にあるを、これはその初二の句を捉へて、見る見ぬに拘はるは、淺はかな心ぞとそらしてもどいた。人を射るに先づ馬を射る筆法は、返歌の秘訣である。

かすがのまつりにまかりける時に、物見にいでたりけ

る女のもとに、家をたづねてつかはしける

みふのたゞみね

春日野の雪間をわけておひ出くる草のはつかに見えし君はも

釋 ○かすがのまつり云々 春日の祭は、大和國の春日神社の祭祀である。延喜式に、「春二月、冬十二月、并上申日祭之」とある。貞觀の頃に朝廷の式祭に加へられたらしい。「物見」は今の見物といふに同じい。○おひ出くる 生ひ出で来る。○草のはつかに 草の如くはつかにの意。「はつか」は僅かの古言。○はも 歎辭。

大意 この春日野の雪の消え間を分けて生えて出て来る草の、チラリと見えるやうに、今日一寸姿の見えた貴女はまあ。

評 存外に深く戀しくて溜らぬの餘意がある。頃は二月の祭と見える。作者は藤氏のある公卿の隨身などで出掛けたか。とにかく舍人はその祭には澤山往つたものである。春日野、雪消の澤のあたり、萌え出した草が未だ短くはつかない眼前の光景を、序詞の材料として、はつかに見た祭見物の衣被ぎの女に詠んで贈つたのである。その家を送きとめて贈るに至つては、その熱心に驚かれる。女は勿論奈良の里人である。作者はもとより舍人風情の男、まづ程々の懸想であらう。景樹が、物見を物見車と解したのは大業過ぎる。詞書はそんな物々しい身分の人が出てきた趣でない。又事實の上にも協はぬ事である。「見えし君はも」とのみいひ放して餘意をもたせた叙法は、含蓄の味が深い。

結句、六帖に君かもとあるが、詠歎の風味に乏しい。

人の花摘しけるところにまかりて、そこなりける人のも

とに、のちによみてつかはしける づらゆき

山櫻かすみの間よりほのかにも見てし人こそこひしかりけれ

釋 ○花摘 春下「とむべき物とはなしに」の條に既出。詞書のやうは、評語を見合はせて心得られたい。

大意 山の櫻を霞の間から見るやうに、餘所ながらほのかに見た事であつた人がサ、戀しくあつたわい。

評 佛の供養の料にとて、木草の花など摘みあつてゐる所に、何かの用で作者の往つた處が、殊更に羞かしがつて物蔭に這ひ隠れた女の許に、後にこの歌を贈つて揶揄つたものらしい。「見てし人こそ」の強き語調、この意を扶けていよく面白い。「山櫻霞の間より」は、その花摘してゐる野邊の光景である。それを直に、譬喩の材

料に取つた。想ふに、その人は花のやうに艶な人であつたらう。下句餘りに説明語が長過ぎて、感じが離れてくる。詞は圓滑であるが、忠岑の「草のはつかに見えし君はも」の含蓄の味ひの深いには及ばない。

下句、家集に見しばかりにや戀しがるらむとある。

題しらず

もとかた

たよりもあらぬ思のあやしきは心を人につくるなりけり

釋 ○たより 消息や小包やうの物を配達する使をいふ。もと人の往來の便りに言傳てたのから出た名。○つく

る 送附するの意。

大意 使こそ物を人の許に届け附けるが、使でも無いこの思が、不思議な事は、自分の心をかの人の許に届け附けるのであつたわい。

評 何者がこの心を人の許に持つて往つたかと思れば、豈に料らんやわが胸の思であつたと怪みいぶかつた。元來思と心とは、體用の別こそあれ一つ物なのを、姑く名の二つに別れたまゝに、全く分離させて巧み成したことは、雜部に、

身をすてゝいにやしにけむ思ふよりほかなる物は心なりけり

とあるに同じい。戀は人を愚痴にし又神經質にするから、つい瑣末な事にも想到するが、かゝる繊細の構思は感哀に乏しく、氣味が索きる。

後撰集に再出したのは、詞書に、「はつかに人を見て遣はしける」とあつて、作者は貫之である。後撰の頃、夙

く元方の名の脱ちた本があつて、上の歌に列ねて、貫之の作と思つた處から、姑く異説を存する爲に、貫之の名で再選したのでらう。詞書は、前後の歌皆はつかに見聞した戀を排列した例を追つたのみで、歌にはつかの意は更でない。もしは部立の違つたものか。さらすは後撰の如く詞書があるべきである。

凡河内躬恒

はつ雁のはつかに聲をき、しより中空にのみ物おもふかな

○中空にのみ物思ふ 空にのみ物思ふといふとはや、違つて、何方ともつかず物思ふをいふ。

大意 初雁の聲をはつくに聞いた時から、又鳴くかと空にのみ心をつけて、氣を揉むことよ、その如く、その人の聲を、はつくに一寸聞いた時から、思ふ心をいひ出しもえせず、さりとして断念めも出來ず、宙にばかり迷つて物を思ふことよ。

初二句は、初雁の聲をはつかにといひ下すべきを、はつの同音を反復して諧調たらしめる必要上、成るべく近接させる爲に倒置したのである。意解は全體を諷諭の作と見て釋いたが、若し下句を軽く聞く時は、初句の「初雁の」は單なる序詞と聞かれる。いづれか。

つらゆき

逢ふことは雲居はるかになる神の音にき、つゝ戀ひ渡るかな

○雲居はるかに 空遙かにての意。これを三句に引き續け、遙かになるといふに、「鳴神の」をかけたと見る

のは大にわるい。○鳴神の「音に聞く」といふにかゝる序詞。「鳴神」は雷。

大意 此れ程思へども、その人に逢ふことは遠い事で、その霹靂の音を聞くやうに、近く噂に聞きくして、戀しく思つて月日を経ることよ。

違しといふことを「雲居はるか」と轉義して、序詞の鳴神に縁をもたせたことは常套である。但「音に聞く」の序として鳴神を用ひたことは、その音聞の甚しさを思はせるもので、随つて逢ふ事の雲るはるかな事を慨く心持を強める。又見やうによつては、遠近の對照を成してゐるやうでもある。

結句、六帖、及び、家集に戀ひや渡らむとある。景樹は、この方を宜しいと評した。

よみ人しらず

片絲をこなたかなたによりかけてあはずば何を玉の緒にせむ

○片絲 より合はせぬ一筋の絲をいふ。○あはずば 「ば」と濁る。○玉の緒 玉を貫く緒。緒は長く續く物をすべていふ。鳥獸の尾、年の緒、息の緒といひ、さて命をも魂の緒といつて、玉の緒に通はせた。玉の緒に三義ある。一は暫しの意、一は玉を貫く緒、一は命をいふ。

大意 一筋の絲をあちらこちらに縊を掛けて合はせようとして、愚かな頼みをかけてゐるが、結局一つに合はぬなら、何を玉の緒にせうぞい、自分の戀もその如く、こちらばかり、あちらこちらへと心を碎いて見ても、若し逢はれずば、何を命にして生きて居られようぞ。

片絲ではより合ふことは絶對にない。その如く片思では逢ひ得る時は絶對にない。この見え透いた結果をも

無視して、おのが慾目になほ一縷の希望を繋ぎつゝ、戀の不安を豫想して、もし「合はずば何を」と憂慮してゐる。よもやに惹かされた戀の迷を歌つたものである。譬喩は例の巧に傷く。片絲の玉の緒は、夙く奈良朝歌人の用ひた材料で、萬葉に「片絲もち貫きたる玉の緒を弱み」「玉の緒を片緒に縊りて」など數ある。この歌、是則集に出てるのは誤である。以下悉く詠者不詳の歌である。風調體格を以て推すに、弘仁以降、元慶の頃ほひまでの作が入り交つて居らうと思ふ。

○
ゆふぐれは雲のはたてに物ぞ思ふあまつ空なる人を戀ふとて

釋 ○雲のはたてに「はたて」ははてに同じい。萬葉集卷八に「敷きませる國のはたてに開きにける櫻の花の」とある。又萬葉集卷一、「渡津海の豊旗雲に入日さし今宵の月夜清み明くこそ」、懷風藻の大津皇子の詩に、「雲旗張_ル額前_ニ」など見えて、旗の靡く如く棚引いた雲を、旗雲とも雲の旗ともいふから、雲の旗手にの意とも解してゐる。比較すると前説の方が穩かである。

大意 自分は夕方になれば、遙かの雲のはてにながめ入つて、物をサ思ふわ、自分より遙か高い身分の人を戀ひ慕ふといふのでサ。

評 譬喩の「雲のはたて」の縁によつて、身分高いの意を「天つ空なる」と轉義した。景樹の上句を、夕暮は雲の悲しき景色に物思ふと釋いたのは、氣分はちかいがやゝ誤つてゐる。又、「天つ空なる人」を、舊註はすべて、遠方なる人の意に解いた。捨つべきでもないが、戀に上下の隔なし。かけても及び難い人を戀うた意と見る方が面

白からう。拾遺集、

雲居なる人をはるかに思ふにはわが心さへ空にこそなれ

の趣を併せ味ふがよい。夕暮はたゞですら感傷に陥り易い時分だから、戀する身はいよく思ひ亂れるのである。

初句、六帖新撰和歌には夕されば、顯註の一本には夕ぐれのとあり、結句、袖中抄、奥儀抄には人こふる身はとある。

○
かりごもの思ひ亂れてわが戀ふと妹しるらめや人し告げずば

釋 ○かりごもの「思ひ」を隔て、「亂れて」へかゝる枕詞。刈つた菰は、埒もなく亂れ混ぶ物だから續けた。菰は眞菰である。○妹 廣い意味では、男から婦人をさして、すべて妹といひ、狭い意味では、妻又は情人又は女弟をいつた。こゝは前の義である。

大意 刈菰の亂れるやうに、いろ／＼と思ひ亂れて、自分が戀ひ慕ふといふことを、あの人は知るであらうか、いや知りはずまい、人がサいひ聞かさずば。

評 情天礙があり、空床輾轉の思に耐へない。然るに意中の人は格別さうとも知らずにあるではないか。どうかその同情を惹くべく、殷勤の意を取り傳へてくれる人もありたいなど、心中に希望してゐる趣である。古調で風骨が凡でないが、結句は親貼し過ぎて味ひを淺くしてゐる。

つれもなき人をやねたく白露のおくとは歎きぬとはしのばむ

○人をや「や」は反語。○ねたく 悔しくの意。○白露の「おく」にかゝる枕詞。露の置くに、起くをか
けた。○ぬ 寝ぬの意。○しのばむ 偲ばむの意。慕ふをいふ。

大意 あゝの無情なつれない人を、このやうにくち惜しう、朝晩に起きるといつては歎き、寝るといつては慕はう
ことかい、今からはもう歎きも慕ひもすまい。

評 断念めたといふは、断念めぬ人の言である。畢竟熱情の餘りに、三冬暖氣無きの人の無情を恨んだ激語で
ある。思ふと思はぬとは反比例に進行するもので、時にはもう思ふまいと憤慨もするが、實理はむづかしい。こ
の情致、歌としての無窮の妙諦を具へてゐる。業平の「世の中にたえて櫻の無かりせば」と詠んだのも、この筆
法である。朝に晩にの意を、「おくとは」「ぬとは」と轉義し、歎き偲ばむの句を断ち切つて、上下に按排して、
四五に對句を作つたので、語調がおのづから強まつて、常住歎き偲んでゐる趣が強く表理されてゐる。

ちはやぶるかも社のゆふだすき一日も君をかけぬ日はなし

○ちはやぶる 秋下「ちはやぶる神代も聞かず」の條に既出。○かも社 山城國の賀茂神社。上下二社あ
る。平安時代には、祭とさへいへばこの社のお祭であつた位尊崇された。今も官幣大社。○ゆふだすき 木綿

の襪で、社人が神に奉仕する時に掛ける物である。木綿は穀即ち楮の事である。古語拾遺に、穀の木を木綿
なりと註し、豊後風土記に「速水郡楲富郷云々、此郷中楲樹多生、常取楲皮、以造木綿、因曰楲富郷こと
ある。楲は楮である。

大意 賀茂の社の社人が神に仕へまつるとして、毎日、木綿襪を掛けるが、そのやうに、私も一日たりとも貴方
の事を心にかけて思はない日といふは無いわ。

評 三句までは、「一日もかけぬ」にかゝる序である。あながちに賀茂の社の木綿襪をかけたのは、或は、京人の
賀茂の御社に詣でて、この戀を祈つたのであるまいか。伊勢物語に、

戀せじとみたらし川にせしみそぎ神はうけずもなりにけるかな

とあるも賀茂の社に戀を祈つた證據である。さてかう詠んで、かの人の憐を乞ふべく贈つたらしい。「日」とい
ふ語の重疊が、意調のうへに、多少の姿致を添へてゐる。語路暢び／＼して、風韻悠揚、諷すべく誦すべき作
である。

二句、顯註にかみの社とある。景樹いはく、「この方事ひろくてよし。枕草子に、賀茂臨時祭の條に、『千早ぶ
る賀茂の社の木綿だすきと歌ひたる云々』とあり。これはもと神の社とのある歌なるを、かの祭に用ひられし
時、賀茂の社のと謠ひ變へしが一説となりて、今の本には入れるなるべし」と。されど、事弘いのが必ずよい
譯でもない。評語のやうに見れば、却つて、事狭いのが面白く聞えるのではないか。又、結句を新撰和歌に日
ぞなきとある。

わが戀はむなしき空にみちぬらし思ひやれども行く方もなし

○
釋 ○むなしき空 虚空の直譯語であるから、空におなじい。○思ひやれども 「思ひ遣る」は思を遣り失ふこと

遣悶、排辭の義。想像の意にも轉じて用ひられる。

大意 自分の戀は、虚空一杯に満ちくたらしい。心の思を餘所へ逐ひ遣つて見ても、何處へも思の行く處が無
いわ。

評 纏綿の情懷は奇愁を催して、如何ともすべからざる人の作である。戀を説いて、虚空に瀰漫したの嬌語を放
つに至つて、始めて詩歌の三昧に入ることを得る 體裁、や、疎漫なやうで實は縝密である。上句下句の脚字、
同音の韻を踏んでゐる。奇作妙作。

駿河なる田子の浦波立たぬ日はあれども君を戀ひぬ日はなし

○
釋 ○駿河なる田子の浦波 駿河國庵原郡清見が崎から東へ行けば、薩埵峠の山下の渚に昔の道があつて、其處

より向ひの伊豆の山の麓までの海は、田子の浦だといふ。

大意 この駿河にある田子浦は、風の烈しい所なので、その浦波は何時でも立つとはいふ條、それでもたまには、
立たぬ日がありはするけれども、私が貴方を戀しく思はぬ日といつては、一日も無いわ。

評 駿河の國人の作か。比興の體が面白い。「日」の語の反復も味ひを永くする。但萬葉集卷十一、

唐泊能巨の浦波立たぬ日はあれども家に戀ひぬ日はなし

を、些ばかり改竄したに過ぎない。恐らく「唐どまり」の歌の異傳だらう。

○
夕づく夜さすや岡べの松の葉のいつともわかぬ戀もするかな

釋 ○夕づく夜さすや岡べ 「夕づく夜」は夕就く夜の意であることは、秋下に釋いた如くで、月夜の義ではない

から、「さすや」とはいはれない。一本には夕づく日とある、これが宜しい。これは夕就く日の義で、夕暮近く
傾く日をいふ。この歌元久時代には、既に兩様の傳があつたと見えて、千五百番歌合に、公經の「夕づく日さ
すや岡べの松の雪折」の歌の季經判に「萬葉には夕づく日と侍り、古今の歌を思ひて松を詠まば、夕づく夜と
ぞ侍るべき、云々」。公經は、夕づく日とある本に據つて詠み、季經は、夕づく夜とある本に就いて判じたので
ある。「さすや」「や」は間投の歎辭。○松の葉の 松の葉の如くの意。

大意 あの夕就く日の刺す岡のあたりの松の葉は、四季共におなじ色で、何時といふ別ちも無いが、丁度その如
く自分は、何時といふ別ちも無い、えらい戀をまあすることよ。

評 これは戀の迷執を我れから批判したものである。蓋し或機會に理性に立ち返つた瞬間の思索である。夕影の
岡邊の松の裏葉を照すのは、誰が眼にも着く面白い景趣である。乃ちこれを序の材料とした。古へは日影の刺
すのを、崇高なる觀念を與へる無上の形容語として、或は「内日刺す宮」といひ、或は「朝日の日照る宮、夕日

の日陰る宮」など續けた。萬葉集卷十六に、

夕づく日指すや河邊につくる屋の形をよろしみうべぞよくり

とあるも同趣である。この初二句を、これは岡邊の松に轉用したので、只眼前の景氣を述べただけに止まつてゐるが、上句の修飾が餘りに花やかに立派に過ぎて、「いつともわかぬ」の譬喩にのみ用ひたのでは、調和がびつたりと取れないやうな氣がする。又語調からいふと、上句太く違ましく、二句殊に力量があるので、や、下句との權衡を失してゐるやうである。

六帖には、「朝日子がさすや岡邊の松が枝のいつともわかぬ戀もする哉」とある。甚だ劣つてゐる。

○

あしひきの山下水のこがくれてたぎつ心をせきぞかねつる

釋 ○山下水の 山陰の水の如くの意。○こがくれて 木隠れて。○たぎつ心 湧き返つて沸る心。

大意 山陰の川水は茂つた樹木に隠れて、餘所からは見えぬけれど、せわしく瀧つて落ちる物であるが、自分の戀も丁度そのやうに、餘所からは見えないで、只一人胸の内に湧き返る心を、水を堰くといふやうに、堰き止めようと思つて見ても、なかく堰いてサ止めかねたわ。

評 人知れず思ふ心の忍び難さをどうしたらと、打ち歎いた。萬葉集に、

歎きせば人知りぬべみ山川のたぎつこゝろをせかへたる鴨 (卷七)

言にいでていはゆゑ、しみ山川の瀧つ心を堰きあへにけり (卷十一)

の類型はあるが、これは一層巧緻である。「木隠れてたぎつ」までは譬喩であるが、「堰きぞかねつる」と、水の縁語で仕立てたのは、なまじひに大らかな味ひをなくする。萬葉の歌の結句を参照したら、この點がいよゝゝ明らかにならう。

三句、新撰和歌にうづもれて、結句、新撰和歌、及び新朗詠集にかねぬるとある。しかも作者を六帖には源のよしの朝臣とし、新朗詠には伊勢とし、後撰集戀四に再出したのは能宣朝臣として、詞書を「女の許に遣はしける」と加へてある。

○

吉野川いはきりとほし行く水のおとには立てじ戀はしぬとも

釋 ○行く水の 行く水の如くの意。○いはきりとほし 岩切り通しである。○しぬとも 爲去とも意。舊註、死ぬとも意に見たのは誤である。必ず死ぬ意ならば「は」の辭は不用で、戀ひ死ぬとも又は戀ひて死ぬともいつてよい。

大意 吉野川は早川で、岩をも切り通して行く水が、烈しい音を立てるが、自分は假令この切ない戀をするとも、その吉野川の水のやうに、音を立て、泣きなどして、人には知られまいわ。

評 忍び餘つた人の作である。「音には立てじ」の序は、萬葉集卷十一に、

高山の岩本たぎち行く水の音には立てじ戀ひて死ぬとも

の同型の先型がある。戀ひて死ぬとも、音に立て、名には顯はさじと、命をかけて包み忍んだ胸裏の苦悶は、

どんなものであつたらう。これは只、戀爲たりとて音に立てじといふに止まつて、愛の高潮を説く點に於いて、や、遺憾がある。二句は、さうした山川の急流激湍を、よく形容し得てゐる。原作に勝つたのは只この點のみ。四五の倒装は調を諧へむが爲である。初句、六帖に三吉野のとある。

○
瀧つ瀬のなかにも淀はありてふをなどわが戀の淵瀬ともなき

○
瀧の静な所をいふ。○淵瀬 淵は水の深い所、瀬は浅い處である。

大意 山川のたぎり落ちる瀬は早い物だが、その中にも淵になつて水の淀む所はあるといふ事であるものを、それによつて、自分の戀は淵の瀬のといふ別ちも無く、何時も心苦しい事であるぞ。

○
反喩になつてゐる爲に、幽婉な姿致があつて面白い。廣蔭いふ、

「ありてふを」といへるが面白し。ものをといひても聞ゆるなれど、てふといへるは、この作者深窓の婦人に、未だ實際の瀧津瀬を知らず、たゞ淀ありと聞及びて詠めるに、いたく味あり。ものをといふ時は、瀧のやうをも知りていふやうに聞ゆ。

とあるは拍案の快説で、その肯綮を得て居る。「淵瀬ともなき」は、頻り弛むことの無きの意を、「瀧つ瀬」の縁で轉義したのである。

○
山高みしたゆく水のしたにのみ流れて戀ひむ戀はしぬとも

○
したのゆく水 山もとを流れる水。○したに 下への意に、心の内の意である。したをかけた。○流れて 水の流れてに、存在れてをかけてある。存在れてはながら、へての約。

大意 山が高いので、あの下の方にばかり流れて行く水のやうに、自分は切ない戀をするといつても、表面には顯はさず、何時までも心の内ではかり戀ひ慕つて居らうわ。

○
初二句は「下へのみ流れ」とかけた序である。境遇か何か知らぬが、心の中に秘めて一生でも戀ひくらさうとは、同情に禁へない。「した」及び「戀」といふ語の反復が相錯して、聲調を成してゐる。

契沖いふ、「以上四首、寄水戀の類なり。これより下、この巻の中に、忍ぶ意を詠めるは、戀ふる人みづから忍ぶなり。後の巻なるは、世人に忍ぶなり」と。

○
思ひいづるときはの山の岩躑躅いはねばこそあれ戀しきものを

○
思ひいづるときはの山 夏部に既出。「思ひいづる時」は「いはねば云々」と續く。○岩躑躅 「いはねば」の語を喚び起す序詞。和名鈔に、「羊躑躅、和名以波豆々之、一云毛知豆々之」とある。和名本草に、「羊躑躅、和名以波都々之又之呂都々之、又毛知都々之」とある。されば花の色の白い躑躅と思はれる。景樹説に、今の

方言に據つて、紫の花の咲く躑躅だらうとあるのはどんなものか。

大意 思ひ出す時には、常磐山の岩躑躅の名のやうに、口へ出してはすにこそ居れ、それはく戀しいものをサ。

評 少しは察して下されと、相手にその同情を希つた。素より打ち出した戀でないから、その人は知る筈もないのを、なほこの没道理の言を爲すのは、蓋し戀の窮竟で面白い。「いはつゝ、じいはねば」の反復、例の聲調に任せた序である。上句の「思ひ出づるときはの山」のいひかけは少しくどいかも知れない。

人しれず思へば苦しけれなるの末つむ花のいろに出でなむ

釋 ○くれなるの末つむ花の「くれなる」は吳藍である。和名鈔に、「紅藍、久禮乃阿井、吳藍、本朝式云、紅花、俗用之」と和名本草に、「紅藍花、和名久禮乃阿井」とある。秋分に實をおふし、春に至つて莖が延び立つて高さが三五尺になる。夏月枝の末毎に紅の花が咲く。もと吳國から渡つたので、吳の藍草といつたのだらう。「末つむ花」は、その花の紅くなつた時、衣類などを染むる料に、末を摘み採る故にいふ。宣長は、萬葉集にある末摘花を、ウレツム、ハナと訓んだ。○末つむ花の 末摘花の如くの意。○いろに出でなむ ほに顯はさむと同意。
大意 人に知られず心の中で思つてゐると、ひどく苦しいわ、これでは叶はぬからいつその事、あの紅の末摘む花の色に出るやうに、うち出してあの人に知らせようわ。

評 一つを思ひ切つてうち出さうか、けに羞かしい限りである。忍んで思はうか、心の苦しみに堪へぬを何としようぞ。とつ追ひつ煩々岡々の末、やはり、「色に出でなむ」としも決心したのは、どんなに切ない戀であつたらう、況や作者が織手紅花を摘む婦人であつたらうと想像すると。但萬葉集卷十、よそにのみ見つゝ、を戀ひむ紅のうれつむ花の色に出ですとも

とあると同喩で、意を表裏に取り成してある。創作とはいひにくいかも知れないが、出ですともは無骨である。「出でなむ」は心火の劫掠するに耐へず、その餘燄を吐かうとする趣で、感哀が深い。調も流麗で、阻礙の跡が更れない。

秋の野の尾花にまじり咲く花の色にや戀ひむ逢ふよしをなみ

釋 ○咲く花の 咲く花の如くの意。その花は何の花と定まつてさしたのではない。八千種の花などいつて、秋草の花はくさくさある。

大意 このやうに心の内にばかり思つて居ようよりは、秋野の尾花に交つて咲く草花の、色に出でるるやうに、いつその事包まず打ち出して見ようかしら、これでは一向逢へさうな様子が無いによつてサ。

評 色に出でて戀ひもしたら或は逢はれる事もあらうかと、はかない事を頼みとするまで煩悶してゐる。上と同想同趣で、上句は序である。長け立ちの高い尾花隠れに、野菊桔梗などの咲いたけしきを、「まじる」とは、けに妥當の表現である。

わが園のうめのほつえに鶯のねに鳴きぬべき戀もするかな

○
【釋】○ほつえ 上の枝をいふ。秀つ枝の義。○ねに鳴きぬ 「音に鳴く」は音に立て、鳴くをいふ。たゞ鳴くといふとは異なる。

大意 あれあの庭の植込の梅の木の高い枝に、鶯が聲を立て、鳴くが、自分もあのやうに、聲を立て、泣きもしさうな、切ない戀もすることよ。

【評】思慕の情にかきくれてゐる折しも、鶯の鳴くのに驚かされて、ほんに自分もあのやうに泣かれさうなといふ。見聞する處のもの、皆傷心の種となる。情はもろいものである。抑も「音に泣く」は、人の視聽も憚からぬ絶対の戀であるが、これは「べき」の一語に、多少商量の餘地が存する。

普通の序歌の體ならば、二句は、梅のほつ枝のとある方が、意は疏通し易い。に文字の近く重複したのも、聲調上不快である。

あしひきの山時鳥わがごとや君に戀ひつゝいねがてにする

○
大意 貴方の戀しさに、夜も寝られぬまゝに聞けば、頻りに山時鳥が鳴くが、あれも貴方に逢ひたくて、戀ひ慕ひくして寝にくいのであらうか。

【評】時鳥は君に戀ふやら何やらわからぬ。然らば何を以つて「わがごとや」の直喩を用ひたか、それは外でもない、夜通し寝ないで啼くといふおなじ事實があるので、自分は君に戀ひつゝ、この苦悶を味ふ處から、時鳥をも同境遇に推想した。啼くの一語を絶対に著けないのに、餘韻の饒さが見える。秋上に敏行、

秋の夜をあくるも知らず鳴く蟲はわがごと物や悲しかるらむ
と同型である。只秋思の蟲と相思の時鳥との差あるのみである。どれが先きか。詠人知らずの歌には、敏行以後のもあるらしいから俄に判じ難い。なほ「秋の夜」の歌の評を参照されたい。
六帖に、「わが如く君に戀ふれや時鳥この夜すがらをいねがてにする」とあるは、この歌の二様に傳はつたものだらう。

夏なればやどにふすぶる蚊遣火のいつまでわが身下もえにせむ

○
【釋】○ふすぶる 燻るに同じい。○蚊遣火 萬葉集には、蚊火とも詠んだ。

大意 この節は夏なので蚊遣火を焚くが、その燃え上がらずに何時までもくすくすと、下にばかり燻つて居る蚊遣火のやうに、自分の身は思ふことを人にえ言はずに、内證で胸を焦して居るが、何時まであの蚊遣火のやうに下燃えにして居ようぞ、いつそ打ち出して見ようと思ふ。

【評】庭前の蚊火の下燃えに燻るのを見て、忽ち聯想はわが下燃えの苦悶に及び、寧ろ快活的に炎え出したらばといふ。上の「末摘む花の色にいでなむ」「咲く花の色にや戀ひむ」などの儻で、忍び餘つた情懷を陳べた。溜ら

なくなつて一時興奮はしたものの、やはりつゝましく臆病な作者の心持が窺はれる。恰當の比興である。但萬葉集卷十一の、

足引の山田もるをぢがおく蚊火の下こがれのみわが戀ひをらく
を粉本として、更に一步を進めた。六帖、

難波潟すく藻たく火のうち忍び下もえにてや世をばつくさむ

は、「わが戀ひをらく」の意を、さながら承けてゐる。「いつまで」の語、この主眼である。下に反動辭のかを添へて、その意を綜ぬるがよい。

初句、六帖に夏くれば、新撰和歌に夕さればとある。

○

戀せじとみたらし川にせしみそぎ神はうけずぞなりにけらしも

○みたらし川 いづれの神社でもいふが、これは賀茂の御手洗川だらう。神山より流れいでて、賀茂の御社を貫流する小川。○みそぎ 身滌で、水で身を洗ひ清むるをいふ。そして穢除するるのである。○うけず 「うけ」は諸である。納受である。

大意 わが戀の思ふに任せぬことの切なさに、どうぞ戀をしはすまいと思つて、御手洗川でした身滌を、神は意外にお話け下されずにサ、なつてしまつたさうなわ。

評 「苦しい時の神頼み」人情は古今東西かはりもない。戀すれば人に疎まれ、戀せじと願へば神に見放さる。失

戀失望の極は、恐らく氣が狂つてしまふだらう。おなじ事ながら、萬葉集に見えたのは、おのづからその時代の風調をそなへて、

いかにして忘るゝものぞあめつちの神を祈れどわが思ます (卷十三)

天地の神をも我れは祈りてき戀といふものはすべてやまずけり (同上)

などあるが、いづれも叙法が卒直で、この「うけずぞなりにけらしも」の辭様の婉曲で、蘊含の味ひの深いに及ばない。六帖に、

つらき人忘れなむとはらふればみそぐかひなく戀こそまされ

模倣の作、この好處をすべて没却してしまつた。

四五の句、伊勢物語にはうけずもなりにける哉とある。本行のは、聲調やゝこはくしい節はあるが、意は優つてをらう。又四句、一本にうけずもとある。

○

あはれてふことだになくば何をかは戀のみだれの束ね緒にせむ

○あはれてふこと あはれといふ言。「あはれ」は歎辭、あゝと同じい。愛憐の義ではない。○束ね緒 物を把ぬる緒又は紐。

大意 思が胸に迫つて心の亂れた時は、聲を擧げてあゝと溜息を吐けば、少しは心も靜まるが、そのあゝといふ言葉なりとも無くば、何をまあ自分の戀の心の亂れを靜める汐、即ち亂れた物を引き把ぬる束ね緒にはしよう

ぞ、他には何物もないわ。

評 ひどく苦悶した擧句にはあゝと息吐く、又苦悶してはあゝと息吐く。丁度それが亂れ散つた物を束ねる緒のやうな具合なので、もしこのあゝの吐息がないとしたら、戀の亂れは「括もなく亂れるだらう」といふ。「戀の亂れ」とあるより、心を靜むる機會を「束ね緒」と轉義したのである。少し技巧に走り過ぎた感がある。又意釋の一説は、「人の、あはれとだにもいはずば、何をか亂れたる戀の束ね緒にせむ」の意とした。さうも聞えるが、前後の部立から考へると、その意ではこゝに並べられない。

○

思ふにはしのぶる事ぞまけにける色には出でじと思ひしものを

大意 人を思ふ心と、それを懐へ忍ぶ心とが、自分の胸の内ですつてゐるが、懐へ忍ぶ方がサ負けてしまつたわい、それでつい思ふ色目を見られたさうな、え、いつまでも色目には出しはすまいと思つたものを。

評 糾紛した胸中の苦悶を描き出して、餘蘊がない。思ふと忍ぶとの兩者の格闘、いかによく堪へ、いかに強く戀うたものだらう。下句の如きは誰れにでもいはれる。平兼盛も、「忍ぶれど色に出にけり」と詠んでゐる。上句の落想に到つては、所謂天外よりした奇想で、面白い擬人である。但伊勢物語に、

思ふには忍ぶることぞまけにける逢ふにしかへばさもあらばあれ
とあるが、伊勢のはこの歌を作り換へたものだらう。雅嘉が、「しのぶる」を、世に忍ぶ意と解したのは誤つてゐる。

○

わが戀は人知るらめやしきたへの枕のみこそ知らば知るらめ

釋 ○しきたへの 枕にかゝる枕詞。袖、袂、衣手、床などいふ語へもかけて、枕詞とする。「しきたへ」は下に藉きて寝る布をいふ。「たへ」は栲で、楮の纖維から織つた布であるが、轉じて布帛の總稱ともする。○知るらめや 「や」は反動辭。

大意 自分の戀は一途に忍んで居るから、このやうに思ふことを、あの人を知るであらうか、とても知りはずまいわ、しかしこの閨の枕ばかりはサ、若し知るならば知るであらう。

評 それとても知りはすまいがの餘意がある。想は後人のやたらに踏襲する所となつて、新硯を發したやうにゆかない。結句の語調は、春上の「けふこそ櫻折らば折りてめ」と同じだから参照されたい。「知る」の語、ふと見では無意味に三疊したやうだが、然うではない。短歌の體製を案するに、三四五句は、初二句の反復である。形に於いて調子に於いて、同じにゆくのが定律である。故に初二の同意同語を、三句以下に於いて、同調に折り返すことは珍しくない。時に或は意を表裏し、叙法を順逆にして、姿致を取ることがあるが、なほ同語同調を追ふこと、この歌の如きもある。

初二句、六帖にわが戀を人知らめやも、下句、新撰和歌には枕ばかりぞ知らば知るともとある。
以下忍戀の歌をつらねてある。

○ 浅ぢふの小野の篠原しのぶとも人知るらめやいふ人なしに

釋 ○浅ぢふの「野」にかゝる枕詞。「浅ぢふ」は茅草のまばらに生へた所をいふ。茅はつばなの草。生は生ふの略語で、草木などの發生する處をいふ。○小野の篠原 小野の「小」は美稱で、小さい野の義ではない。又地名でもない。篠原は小竹の生へた原で、同音の響で「しのぶ」といふ語を喚び起したので、上句はすべて序である。

○しのぶとも「知るらめや」に續く。忍ぶと人は知らうかいの意。「とも」を重く聞いてはいけない。
大意 このやうに怵へくして忍んで思ふとまあ、先の人を知るであらうか、知りはずまいわ、誰れもいつて聞かす人無しにはサ。

評 「人知るらめやいふ人なしに」は明らかに理窟であるけれども、我が行爲を我れと批判して、非難らしい口吻を洩した點が面白い。否さう自省はしながらも、やはり秘めた戀心を打ち出す勇氣がなくぐづくしてゐる。その矛盾が詩味をそゝる。蒼古な格調である。

四句、一本に妹しるらめやとある。人を親み思ふ意も顯はれ、且「人」の語の重複も避けられ、又第二者第三者の差別も明らかになつて宜しい。六帖には、下句妹はしらじなとふ人なしにとあつて、作者を人麿とある。新撰和歌には、初句夕されば、三句忍ぶれどとある。

○

人しれぬ思やなぞとあし垣のま近けれども逢ふよしのなき

釋 ○なぞと「なぞ」は何ぞの意。「と」の辭が下に續かないので聞え難い。顯昭、眞淵の、詞の助に置いたといふ説は妄りである。千秋いふ、「このとは字形の似たるより、必ずしもを寫し誤りて傳へたるにて、もとはなぞもにてぞありけむ。なぞもは古歌に例多く見ゆ。近くはこの巻の中にも、「かゞり火にあらぬわが身のなぞもかく云々」とあり」と。この説は既にこの集の一本になぞもとあるから、従ふべきである。山田常典は「本の儘にて下に、思ふまでといふ詞を補ひて聞くべしといつたが、さう詞を補つて行けば、聞えない詞といつては世にないことになる。○あし垣の「ま近」にかゝる枕詞。蘆で造つた垣は粗末な垣で、少々つつまばらなので、間近きと續ける。顯昭の説には、「蘆の細きをこまかに組みて、ひま無ければいふ」とあるが、萬葉集に、「岩橋の間近き」とも續けた例を推せば、前の説が可いと思はれる。

大意 思ふ人に知られぬ内々の思は、何たる事ぞまあ、ほんの間近な所に住んで居れども、逢ふ仕方が無いわい。

評 いくら近隣でも心にだけ思つてゐるのでは、先方が御存じなすだから、逢へる筈がない。この見易い道理を忘れて、懊惱の極、「人知れぬ思やなぞも」と、わが思のかひなさを咎めた幽怨の趣は、一寸捨て難い。廣蔭が、「先の人にこの思を知らせなば、逢ふ由もあらむ」とまで、餘意を説いたのは過ぎてゐる。二句、六帖に思やなにぞとある。これは意が明らかであり、二句で切るべき證とされる。

思ふとも戀ふとも逢はむ物なれやゆふ手もたゆく解くる下紐

○逢はむ物なれや「や」は反動辭。上の「秋の野におく白露は玉なれや」。又、西行の「津の國の難波の春は夢なれや」のやは、各これとは別意である。○ゆふ手もたゆく 結ふ手も弛くの意。○下紐 下裳の紐をいふ。

大意 如何に思ふとも戀ひ慕ふとも、その人に逢はれようものか、とても逢はれるものには無い、それにその人が自分を思つて呉れるかのやうに、結ぶ手もだるい程に、何返も下紐が自然に解けるわ、昔から、「人に戀ひられる時は、下紐が解ける」といひ習はしてはあるけれど、あてにならないなあ。

評 奥儀抄に、「人に戀ひらるゝ人は、下紐解くるといふことのあるなり」とある。いにしへさうした諺のあつたことは確實である。萬葉集卷十一に、

君に戀ひうらぶれをればあやしくも我が下紐のゆふ手倦しも

これは下紐のやたらと解けるのを見て、さては思ふ人に逢ふ前兆だらうと、悦んだ趣である。然るにこれはその前兆が一向事實に應現しないので、何と馬鹿な下紐奴と憤慨した口氣である。結句は下紐解くるとあるべきを調の爲に倒装した。婦人の作であらう。なほ、萬葉集卷十二に、

都べに君はいにしを誰れ解けか吾が紐の緒のゆふ手たゆきも

これも類型である。一三の句、清輔、顯昭等の「思ひ戀ふとも我は逢ふまじきを、それも知らず戀ふるにやあらむ」と釋いたのは木強の言で、更に人情の眞諦でない。又詩歌の本旨でない。こは、逢はれむのれの略かれた

一格である。逢はむの意に見るは誤である。

いでわれを人などがめそ大船のゆたのたゆたに物思ふころぞ

○いで 允恭記には「壓乞」、萬葉集には「乞」の字を訓んである。乞ひ望むの意の歎辭で、發語にのみ用ひ、

後には轉じて、口語のサア、イヤ、モウ、ドレヤなどの意に用ひる。こゝも後の意である。○とがめ 異しむこと。○大船の 大船の如く。の意で、「ゆたのたゆた」にかゝる序。大船は動くにもゆくらくと漂ふのでいふ。

○ゆたのたゆたに 萬葉集卷七に、「吾が心ゆたにたゆたに浮きぬなは邊にも沖にも寄りなてましを」とある。

「ゆた」は口語のゆつたりの意。これにたの接頭語を加へて、「たゆた」といふことは、靡くをた靡く、謀るをた謀るといふに同じい。このゆたにを重ねたゆたにたゆたにが「ゆたのたゆたに」と轉訛した。意は大やうに迫らぬ状態なので、ゆくらくと揺くにもいふ。

大意 いやサ自分の様子を、これ人達よ、必ず惟んで呉れるな、自分は今どうしようかかうしようかと、落ち付かずに物思をして居る、この節であるぞよ。

評 いかにしても、思の色が顔に出て隠し切れないので、まゝよと腹を据ゑて、物や思ふと人の怪しまぬ先に、此方から打ち出した。もとより冷靜の思慮ではない。既に戀の甘い香に酔ひ切つた人である。狂してゐる作者である。それでこそ歌も面白くなる。大船の譬喩は、萬葉集に「大船のはつる泊のたゆたひに」「大船のたゆたひ見れば」など數多ある。